

島津家歴代制度卷之廿五

明寛和

一 普請ノ義、同二十日、

一家職ニ付テ致漁獵候義、同十日、勿論、家職外ノ者漁

獵致シ候義ハ、日数五十日、

一 市ヲ立候義並商買ニ付テ大勢集候義、二十日、

一 遊興ケ間敷義、鳴物且又山野ノ殺生、五十日停止、

右ニ付、七月上下町踊、七月七日以後盆前ニ相濟候様

被仰渡候、名^①モ七日ヨリ二踊ツ、一日ニイタシ、盆

前ニ相濟候様ニ被仰渡候事、

正徳六年申

(一三四三の2)

(①により補、行間朱書)

一曲礼云、天子死曰崩、諸侯曰薨、大夫曰卒、士曰不禄、

庶人曰死、

一 書舜典云、二十有八載、帝乃殂落、百姓如喪考妣、三

載四海遏密八音、

一三四四

(吉宗養女、伊達奉行室)

一 利根姫君様御逝去ニ付、鳴物・殺生・漁獵・遊興ケ間

敷義、日数七日停止、家職ニ付鳴物・殺生・漁獵^②等

御国忌

一三四三(の1)

一家継公正徳六申四月晦日薨御、幽源院様御慎左之通、

一 髭・月代、日数七日、

一家職ニ付テ音高義並見世ヲ出致商売候義又ハ振売等、

日数七日、

八日数三日相止、普請ハ無御構、

延享三寅正月十九日

一三四五

一 養仙院様、六月十七日被成御逝去候間、殺生・鳴物・(綱吉養女八重姫、水戸吉孚室)

遊興ケ間敷義、七月十日ヨリ日数七日停止、普請ハ三日留被仰渡、

延享三寅六月

一三四六

一 卯十月十日 (吉貴) 総州様御逝去御慎、山野ノ殺生並鳴物日

数三十日可相止、普請作事等日数十五日、漁獵並諸商買且又家職ニ付音高キ儀モ日数七日相止、商買相止候内ハ明リ入候用分ハ明置、町屋ノ店可鎖置候、御直士ハ日数三十日月代仕間敷候、又者ハ町人・百姓共不及其儀候、火用心別テ入念候様被仰渡候、

延享四卯十月

一三四七

一 水野老岐守様 (忠定)、辰六月廿六日被成御卒去候ニ付、於徳 (吉貴女)

様御聞忌ニテ一日ノ御慎ニテ候、

一三四八(の1)

一 太守様宗信公、巳七月十日御逝去、御慎左之通、

一 山野殺生並鳴物日数五十日、普請作事等日数三十日、

漁獵並諸商買且又家職ニ付音高キ儀モ日数七日、商買相止候内ハ町屋ノ店鎖之、用分達候分可明置候、御直士日数五十日月代仕間敷候、又者並町人・百姓等不及其義旨被仰渡、

寛延二巳七月

(一三四八の2)

一 右ニ付、七月十八日神事能並廿七日廿八日諏訪御神事ノ節、鳴物被差留、御領國中諸所神事ニ付踊禁断ノ内被差留、作法迄被仰付候、

一 慈徳院様御遺跡御相統 (宗信)、兵庫様へ御願被仰上置候処、

御用番本多伯耆守様ヨリ忌服被為受、御出府可被成旨 (正徳)

被仰渡候段御到来、巳九月三日ヨリ五十日ノ御忌被為

受候間、今日ヨリ十月廿二日マテ山野殺生並鳴物停止、

普請・漁獵・諸商買相止ニ不及旨被仰渡、

寛延二巳九月

一三四九

一 大御所様未六月廿日被遊薨御候ニ付、慎左之通、
(吉卷)

一 普請・鳴物・遊興ケ間敷儀可相止候、

一 家職ニ付、音高キ儀、並見世ヲ出、市ヲ立候商買、
②

可相止候、尤、町屋ノ見世可鎖置候、

一 惣テ殺生被禁候間、海山ノ獵仕間敷候、

一 髭・月代、未々迄スリ申間敷候、

一 火用心別テ可入念旨被仰渡、

寛延四未閏六月八日

但、髭・月代、日数三日、家職付テ音高キ儀並見世

ヲ出、其外ノ商買、町屋ノ見世鎖置候儀、日数七日、

但、市ヲ立候商買ハ差留置候、

一三五〇

一家職付テ致漁獵候儀日数十日、普請ハ日数廿日、市ヲ

立候儀、商買付テ大勢相集、儀、鳴物・遊興ケ間敷儀、
①并

山野ノ殺生、日数五十日被停止候旨、跡達テ被仰渡、

一 此節御慎ニ付、名踊・町踊被差留、

寛延四未閏六月

一三五一

一 樺山左京殿與於貞殿被相果、太守様日数廿日御忌係
(久倫) (継豊女) (重年)

リ故、御忌中ハ遊興ケ間敷儀相慎可申候、屹申渡ニハ

不及候、面々其心得ニテ罷居候様被仰渡、

寛延四未八月十一日

一三五二(の1)

一 太守様重年公、於江府去月十六日被遊御逝去、七月四

日ヨリ御慎左之通、

一 山野殺生並鳴物、日数五十日可相止候、

一 普請作事等、日数三十日、

一 漁獵並諸商買、且又家職ニ付音高キ儀モ日数七日可相

止候、商買相止候内ハ町屋ノ店鎖之、用分達候処可明

置候、

一 御直士、五十日月代仕間敷候、

一 足輕・御中間・一身者、日数五十日月代仕間敷候、又

者並町人・百姓等不及其儀候、

一 火用心別テ可入念旨被仰渡、

宝曆五亥七月四日

(二三五二の2)

右ニ付、

一名踊・町踊差留候条、今日ノ踊モ只今参先ヨリ早ク引^①ク

取候様、郡奉行へ被仰渡候、

亥七月四日

(二三五二の3)

(①により補、(行間朱書)

一 当十一月稻荷祭之節、御服中故、^(当日カ)当神楽迄奏候様被

仰付、鑓流馬は被召延、御服明子九月三日被仰付候

旨被仰渡、

宝曆六子四月

(二三五二の4)

(①により補、(行間朱書)

一 礼記、曾子問曰、諸侯之祭社稷、俎豆既陳、聞天子之

崩・后之喪・君薨・夫人之喪、如之何、孔子曰、廢、

○曾子問曰、大夫之祭、鼎俎既陳、籩豆既設、不得成

礼廢者幾、孔子曰、九、請問之、曰、天子崩・后之喪・

君薨・夫人之喪・君之大廟火・日食・三年之喪・齊衰・

大功、皆廢、外喪、自齊衰以下行也、

(二三五二の5)

一 薩摩守殿被致卒去、跡職^(忠洪、後重孝)又三郎殿へ被申出度、未被

仰出此時節候条、家老其外諸役人猶以入念可相勤候、

亥七月四日

(二三五二の6)

御添書

隅州様仰出謹テ承知有之、奉行頭人へ^①支配下不洩様申

渡可有之候、

亥七月

(島津入海)
主殿
(録田政昌)
典膳

一三五三

一 太守様御逝去、重キ御懐内ニ候へトモ、田地虫入多、格別ノ事故、虫踊被仰付候、

亥七月六日

一三五四

一 此節御懐ニ付、髭計来ル七日ヨリスリ可申候、其外懐ノ儀ハ先達テ申渡置候通可相心得旨被仰渡、

亥八月朔日

一三五五

一 信泡院様、子正月晦日被成御卒去候ニ付、日数七日殺生・鳴物・遊興ケ間敷儀停止、普請並鹿兒島中漁獵三日可相止旨被仰渡、

宝曆六子正月晦日

一三五六

一 於徳殿事、三月廿三日死去ニ付、鳴物・遊興ケ間敷儀

(吉貞女、島津久定室)

日数三日停止、普請ハ不苦候旨被仰渡、

宝曆六子三月廿三日

一三五七

一 千代姫様四月十二日御逝去ニ付、鳴物・遊興ケ間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

宝曆七丑五月七日

一三五八

一 紀伊宰相様ノ御簾中富宮様御逝去ニ付、殺生並遊興ケ間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

宝曆七丑六月廿八日

一三五九

一 姫君様御実母玉勝院様於京都八月廿日被成御卒去、鳴物・遊興ケ間敷儀日数五日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

宝曆十辰五月十七日

(家治室)

一三六〇

一隅州様、辰九月廿日御逝去、御慎左之通、
(継豊)

一山野ノ殺生、日数廿日、

一普請作事等、同十日、

一漁獵並諸商買且又家職(ニカ)へ付音高儀、日数七日可相止候、

一商買相止候内ハ町屋ノ店鎖之、用分達候分ハ可明置候、

一御直士、日数廿日月代仕間敷候、

一御下屋敷御方へ為相勉面々ハ日数五十日月代仕間敷候、

一足輕・御中間・一身者、日数廿日月代仕間敷候、又者

並町人・百姓等不及其儀候、火用心別テ可入念候旨被

仰渡、

宝曆十辰九月廿日

一三六一

一大御所様巳六月十二日薨御ニ付、御慎左之通、
(家重)

一普請ハ来月十九日迄可相止候、

一家職ニ付音高儀並店出候儀、来月六日迄可相止候、尤、

町屋ノ店鎖置候儀モ右同断、

一家職ニ付テ致漁獵候者、来月九日迄差留候、

一市ヲ立候儀又ハ商買ニ付大勢相集候儀、八月廿日迄差

留候、

一鳴物・遊興ケ間敷儀、山野ノ殺生、八月廿日迄差留候、

一鼈・月代立候ニ不及候、

一火用心可入念候、

右之通被仰渡候、

宝曆十一巳六月三十日

一三六二

一尾張中納言様、先月廿四日被成御逝去候ニ付、殺生・
(宗勝)

鳴物・遊興ケ間敷儀、日数七日停止申渡管候ヘトモ、

大御所様御慎内故、別達テ不申渡、普請ハ今日ヨリ日

数三日令停止候旨被仰渡、

宝曆十一巳七月廿三日

一三六三

一悟姫様(重兼女、照靈院)先月廿六日被遊御天亡候段御到来ニ付、御慎、

一 普請並鹿兒島中漁獵、今一日、

一 殺生並鳴物・遊興ケ間敷儀、日数五日可相止候、

一 火用心、此涯猶以可入念旨被仰渡、

明和元申八月十三日

明和二酉四月

一三六七

一 水戸宰相様、先月廿日被成御逝去候ニ付、殺生・鳴物・

遊興ケ間敷儀日数七日停止、普請ハ三日差留候旨被仰

渡、

明和三戌三月十八日

一三六四

一 刑部卿様、先月廿二日被成御逝去候ニ付、殺生・鳴物・

遊興ケ間敷儀日数七日停止、普請ハ不苦旨被仰渡候、

明和二酉三月廿日

一三六八

一 島津肥前守殿昨夜死去ニ付、鳴物・遊興ケ間敷儀日数

三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

明和三戌六月六日

一三六五

一 紀伊中納言様被成御逝去候ニ付、殺生・鳴物・遊興ケ

間敷儀日数七日停止、普請ハ不苦候旨被仰渡、

明和二酉三月廿日

一三六九

一 松平越中守様奥方様、申十月廿一日御卒去ニ付、鳴物・

遊興ケ間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

享保十三申十月

一三六六

一 東照宮百五十年御法会、四月十五日ヨリ同十七日迄於

大雄山御執行ニ付、殺生停止被仰渡、

一三七〇

一 照光院様、六月四日御卒去被成候旨、江戸ヨリ御到来、
享保十四酉

一三三四

(列により補、一三四五号行間朱書)

一 民部卿様(攝政)ノ御舍弟松平金次郎様、先月十四日晚被成御
天亡候ニ付、殺生・鳴物・遊興ケ間敷儀日数二日停止、
普請ハ不苦旨被仰渡、

明和六丑九月廿九日

一三七一

一 鳥居丹波守様御卒去ニ付、鳴物・遊興ケ間敷儀日数五
日停止ノ段被仰渡、

一三七五

一 松平(定頼)隠岐守様、先月廿一日夜御卒去被成候ニ付、殺生・
鳴物・遊興ケ間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰

享保二十卯五月十七日

一三七二

一 黒田(直邦)豊前守様三月廿六日御卒去ニ付、鳴物・遊興ケ間
敷儀日数三日停止、

渡、

宝曆十三年末四月十二日

享保廿卯

一三七六

一 阿部伊予守様(正右)、先月十二日ノ晝御卒去ニ付、遊興ケ間
敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

一三七三

一 堀田相模守様(正亮)、先月七日御卒去ニ付、鳴物・遊興ケ間
敷儀日数三日令停止候、普請ハ不苦旨被仰渡、

明和六丑八月十三日

宝曆十一巳三月七日

一三七七

(本文再出あり、略す)

(一三七九の?)

(⑧により補、行間朱書)

一 一条関白様、今月五日薨去ニ付、殺生・鳴物・遊興ケ
間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

明和六丑九月廿九日

明和六丑十一月廿三日

一三七八

一 菱刈藤馬殿、今月十三日於江戸被相果候間、鳴物・遊
興ケ間敷儀、心入ヲ以、日数三日可致遠慮候、普請ハ
不苦旨被仰渡、

明和六丑九月廿九日

一 阿部伊勢守様、先月十日御卒去被成候ニ付、鳴物・遊
興ケ間敷儀今一日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

明和六丑十一月二日

一三七九(の1)

一 御前様一橋、御逝去ニ付、普請並鹿兒島中漁獵ハ今日
ヨリ日数三日相止、御直士日数三日髭・月代スリ中間
敷候、其外ハ不及其儀候、

一 殺生並鳴物・遊興ケ間敷儀、日数十日停止候旨被仰渡、

明和六丑十月十九日

明和七寅八月十五日

一三八一

一 民部卿様之 御簾中様、先月十一日被成御逝去候ニ付、

殺生・鳴物・遊興ケ間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦
旨被仰渡、

一三八二

一 信解院様、昨夜御卒去被成候間、昨日ヨリ日数五日殺

生並鳴物・遊興ケ間敷儀停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

明和八卯六月九日

一三八三

一田安中納言様、(宗武)今月四日被成御逝去候ニ付、殺生・鳴

物・遊興ケ間敷儀日数七日停止、普請ハ三日差留候旨
被仰渡、

明和八卯六月廿九日

一三八四(の1)

一御台様先月廿日被遊、(家治室、心観院)薨去候ニ付、鳴物・遊興ケ間敷

儀停止、日数ハ追テ可申渡候、普請ハ日数五日、漁獵
ハ日数三日被差留候段、明和八卯九月十日被仰渡、

(一三八四の2)

一右同、鳴物・遊興ケ間敷儀、来ル廿五日ヨリ差免候旨

被仰渡、

卯九月十九日

御牌号 心観院様、

一三八五

一鍋島撰津守様ノ奥方様、先月七日御卒去、(直寛、蓮池)御前様御

姉様ニテ被成御座候ニ付、鳴物・遊興ケ間敷儀今一日
停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

明和九辰八月十九日

一三八六(の1)

一浄岸院様、(鎌倉幕末行徳)去ル五日被遊、御逝去候段、辰十二月二十

五日被仰渡、左候テ今日ヨリ御慎左之通、

一山野ノ殺生並鳴物、日数二十日可相止候、

一普請作事等日数十日可相止、

一漁獵並諸商買且又家職ニ付音高キ儀モ日数七日可相止
候、商買相止候内、①は町屋ノ店鎖之、用分相達之分可明

置候、

一御直士、日数廿日月代仕間敷候、

一足輕・御中間・一身者、日数二十日月代仕間敷候、又

者並町人・百姓等不及其儀候、

一火用心到テ入念旨被仰渡、

明和九辰十二月廿五日

(一三八六の2)

(例により補、行間朱書)

一來年頭其外ニ付、御名代 御代参之人、当日迄致月

代可被相勤候、其外御規式相掛候勤方有之面々ハ差分
居候付、月代相立ニ不及候、

安永元辰十二月廿八日

一三八七

一此節御慎ニ付、髭計来ル晦日ヨリスリ可申候、

一右同、御逝去ニ付御慎、今日迄相請候^(例)ヘトモ、御尊

骸様御着迄ノ間ハ鳴物・遊興ケ間敷儀令停止候条、人々
相慎候様被仰渡、

安永二巳正月十四日

一三八八

一萬壽姫君様、先月二十日被遊御逝去ニ付、殺生・鳴物・

遊興ケ間敷儀、今日ヨリ来ル二十四日迄日数十日停止、
普請ハ日数五日差留候旨被仰渡、

安永二巳三月十五日

御牌号 垂基院様、

(乗カ)

一三八九

一民部卿様ノ御舍弟松平鎌三郎様、先月二十四日被成御

卒去候ニ付、日数三日鳴物停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

安永二巳六月二十六日

一三九〇

一尾張中將様、先月八日被成御逝去候付、普請ハ一日、

鳴物日数五日停止被仰渡、

安永二 七月十四日

但、来ル十八日御神事能ハ有来通被仰付候、

一三九一

一徳川大藏卿様、先月八日被成御逝去候ニ付、殺生・鳴

物・遊興ケ間敷儀日数七日、普請ハ三日差留候旨被仰
渡、

安永三年十月七日

一三九二(の1)

(重豪雄室、玉鏡院)

一 御前様多賀姫様、先月二十六日被遊御逝去候段御到来候旨、未十一月十六日被仰渡、御慎左之通、

一 普請並鹿兒島中漁獵ハ今日可相止候、

一 御直士今日日鬘月代スリ申間敷候、其外ハ不及其儀候、

一 殺生並鳴物・遊興ケ間敷儀、来ル二十五日迄可相^①止候、

一 火用心、此御猶以可入念候旨被仰渡、

安永四未十一月十六日

(一三九二の2)

(①により補、行間朱書)

一 寛政八年辰六月十一日、(齊直室、芳蓮院)御前様佐竹様、御逝去ニ付、

御慎本文同断被仰渡、

七月朔日

(伊勢貞矩) 播磨

一三九三

(重豪女、蓮心院)

一 於克様、御病氣御養生不被為叶、今申刻御夭亡被成候付、今日ヨリ日数三日殺生並鳴物・遊興ケ間敷儀停止、

普請ハ不苦旨被仰渡、

但、昇リ立候儀可相止候、

安永七戌五月三日

(①行間にあり、朱書)

一 本文ニ付、五月四日御役人限伺御機嫌、

一三九四

(家治男家基)

一 大納言様、先月二十四日薨御被遊候付、殺生並鳴物・

遊興ケ間敷儀、且市ヲ立致商買候儀、日数二十日停止、

家職ニ付音高儀並見世ヲ出其外商買町屋ノ見世鎖置候

儀日数三日、漁獵ハ日数五日、普請ハ日数七日被差留

候旨被仰渡、

安永八亥三月十七日

一三九五

(定静)

一 松平隠岐守様、去月十四日被成御卒去候ニ付、鳴物・

遊興ケ間敷儀今日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

安永八亥八月十二日

一三九六

一 松平相模守様奥方様並松平右近將監様御卒去ニ付、鳴物・遊興ケ間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

安永八亥九月十日

一三九七

一 田安中納言様御逝去ニ付、来月二日ヨリノ名踊・町踊、同五日迄ハ差留、六日ヨリ十三日迄頭屋其外毎ノ通為踊、盆両日ハ相止、十六日ヨリ十七日迄可為踊旨被仰渡、

明和八卯六月廿九日

一三九八

一三九八

一 新女院様崩御付、鳴物・遊興ケ間敷儀日数三日停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

天明三卯十二月十五日

一三九九

一 民部卿様御息女庸姫様、御病氣被成御座候処、御養生不被為叶、六月二十二日^夜被成御卒去候段被仰渡、

天明三卯八月

一四〇〇

一 有邦院様御遺髪、巳四月二十二日晝高野山就 御登山、福昌寺御出立被遊候ニ付、二十一日晝ヨリ二十二日迄殺生・鳴物・遊興ケ間敷儀・漁獵鹿兎島中停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

宝曆十一巳四月

一四〇一

一四〇一

一 公方様、今月八日薨御ニ付、慎左之通、普請・鳴物・遊興ケ間敷儀可相止候、

一家職ニ付テ音高儀並見世ヲ出シ市ヲ立候商買可相止候、尤、町屋ノ見世可鎖置候、

一 惣テ殺生被禁候間、山海ノ獵仕間敷候、

一 髭・月代、末々迄モスリ申間敷候、

一 火用心到テ可入念候、

右之通、堅可相止候、日数ノ儀ハ追テ可申渡旨被仰渡、

天明六年九月二十九日

(一四〇二の1)

一 敬姫様(重妻女、淨信院) 御病氣御養生不被為叶、先月二十四日御逝去

被遊候段被仰渡、

天明八申五月十二日

(一四〇二の2)

一 右ニ付、普請並鹿兒島中漁獵ハ今日ヨリ来ル十四日迄

可相止候、

一 御直士、今日ヨリ来ル十四日迄髭・月代スリ申間敷候、

其外ハ不及其儀候、

一 殺生並鳴物・遊興ケ間敷儀、来ル二十一日迄可相止候、

一 火用心、猶以可入念候、

右之通被仰渡、

天明八申五月十二日

(一四〇三の1)

一 嶺松(継豊側室、重年実母)院様御事、御病氣ノ処(病)、御養生不被為叶、今未刻

被成御卒去候段被仰渡、

天明八申十一月二十日

(一四〇三の2)

一 右ニ付、来ル二十四日迄日数五日、殺生・鳴物令停止、

普請ハ不苦旨被仰渡、

申十一月二十日

(一四〇四)

一 島津静山殿(貴儀)、於垂水昨夜死去ニ付、昨日ヨリ明十二日

迄日数三日鳴物令停止、普請ハ不苦旨被仰渡、

寛政三亥三月十一日

(一四〇五)

一 徳川刑部様(橋治國)、去月八日被成御逝去候付、普請ハ今一日、

鳴物ハ来ル六日迄日数五日御停止ノ段被仰渡、

寛政五丑五月二日

一四〇六

一若君様、御不例御養生不被為叶、先月二十四日被遊御

逝去候段御到来ニ付、鳴物今日ヨリ日数十日停止、普

請ハ五日被差留候旨被仰候、

寛政五丑七月十四日

奉称孝稱院様、

(孝願院カ)

一四〇七

一蓮光院様、御不予ノ処、御養生不被為叶、先月八日被

成御逝去候段申来候旨被仰渡、

寛政三亥四月

一四〇八(の1)

一御縁女様有馬様御前様、御病氣御養生不被為叶、先月

二十六日被遊御逝去候段御到来、

寛政元酉十月二十二日

(一四〇八の2)

一御縁女様、此御方へ御引取被置候へトモ、御逝去ニ付

テハ御遠慮ニ不及旨申来候段被仰渡、

一四〇九

一為次郎様御実母於リエ、先月五日致死去候付、(重妻)

様日数三日御遠慮被遊旨被仰渡、

寛政三亥十月

一四一〇(の1)

一女御様(新中和門院)、先月四日薨去ニ付、今日ヨリ鳴物・遊興ケ間

敷儀令停止候、日数之儀ハ追テ可申渡候、普請ノ儀ハ

不苦候、此旨支配中へ早々可申渡也、

享保五子二月十五日

御家老座印

(一四一〇の2)

一女御様薨去ニ付、慎之義申渡置候、鳴物・遊興ケ間敷

義、明十九日迄令停止候間、此旨支配中へ可被申渡也、

子二月十八日

御家老座印

(効)により補、行間朱書)

一四二一(の一)

(承和門院)

一女院御所、去月十日崩御ニ付、今日ヨリ鳴物・遊興ケ間敷儀令停止、⑨候日数ハ又追テ可申渡候、普請ノ儀ハ不苦候、此旨支配中へ早々可被申渡者也、

享保五子三月九日 御家老座印

(二四二一の二)

(⑩により補、行間朱書)

一女院御所崩御ニ付、慎之義申渡置候、鳴物・遊興ケ間敷義、明十一日迄令停止候間、此旨支配中へ可被申渡也、

子三月十日 御家老座印

一四二二

(茶色)

一慈徳院様御遺髪、高野御登山ニ付、来ル十八日晚七ツ時客殿へ御直リ、翌十九日晚七ツ時福昌寺御出立被遊候条、十八日晚ヨリ十九日迄殺生並鳴物・遊興ケ間敷儀・漁獵、鹿兒島中令停止候、普請ハ不苦候、火用心ノ儀、尚以可入念旨、支配中へ可被申渡也、

寛延三年午四月九日 御家老座印

一四二三

一若殿様御服中ノ故、南泉院被差上候御札巻数被扣置、御服明候節、被差出候様被仰渡、

寛政九巳八月七日 取次 川上九戸

一四二四

(恭礼門院)

一女院、去年十一月三十日崩御ニ付、鳴物今日ヨリ日数三日令停止候、普請ハ不苦候、此旨支配中へ可被申渡也、

寛政八辰正月十五日 御家老座印

一四二五

(重兼女御姫)

一淨信院様御遺髪、来ル十二日福昌寺御石塔へ御納、御点眼御供養ニ付、当日殺生令停止候、此旨表方御役、⑪人与中・支配中へ可被申渡置也、

天明八申九月十日 御家老座印

一四一六

(吉黄室)
靈龍院様

一 御前様、今月五日御逝去ニ付テ、山野ノ殺生並鳴物、

来月二十四日迄可相止候、

一 普請作事等、来月四日迄可相止候、

一 漁猟並諸商買、且又家職ニ付テ音高儀モ、来ル二十五

日迄可相止候、商買相止候内ハ町屋ノ見世店鎖シ、明

リ入候迄ノ用ハ可明置候、

一 此節候間、火用心到テ可入念候、

一 御直士ノ分、月代ハ来月二十四日迄仕間敷候、髭ハ来

ル二十五日ヨリスリ可申候、又者並町人・百姓ハ無御

構候、

一 御隠居御方ノ人ハ、髭・月代来ル二十五日ヨリスリ可

申候、

一 武初田御屋敷勤ノ面々モ、髭・月代来ル二十五日ヨリ

スリ申ヘク候、

一 御本丸奥勤ノ面々、髭・月代表方同前ニ可仕候、

右之通、今二十一日ヨリノ御慎ニ候間、此旨支配中へ

早々可被申渡也、

元文四年未八月廿五日^①

御家老座印

一四一七

一 於鹿兒島並諸外城諸社神楽祭礼ノ儀、有来候旧式ノ通

可相勤之候、御慎内ニテ候ヘトモ大鼓打候テモ不苦候、

一 神事祭礼ノ旧式タリトイヘトモ御慎ノ内ハ牲狩如キノ

者又者神事ニ付鉄炮ヲ鳴シ候儀可為無用候、

一 鹿兒島ニテ御名代並^(月カ)司參相勤候人、其日迄月代スリ、

翌日ヨリハ相立候様可致候、尤、神事祭礼付テ勤ニ相

掛候面々、其当日月代スリ、翌日ヨリハ立候様可致候、

一 諸外城神事祭礼ノ節、其所ニテ 御名代勤来候所ノ儀

ハ弥 御名代參相勤、其日迄月代スリ、翌日ヨリハ相

立候様可致候、尤、神事祭礼ニ付テ勤ニ相懸候面々、

其日月代スリ、翌日ヨリハ立候様可致候、

一 御慎内ハ神事祭礼ノ節態ト市ヲ立候儀又ハ多人数相集

候儀可為無用候、

一 神事ニ付流鏑馬ノ儀ハ不苦候、

右之通、支配中へ可被申渡者也、

元文四年未八月廿五日 御家老座印

興ケ間敷儀相止、鹿兒島中ハ漁獵迄モ可相止旨、支配中へ可被申渡也、

享保十巳十月五日 御家老座印

一四一八

一来月朔日福山御馬追被仰付置候へトモ、御前様御々

一四二二

前様御逝去ニ付被差留、日限ノ儀ハ追テ可被仰渡旨、

(光久)一寛陽院様五十年御回忌ノ御法事、来ル二十七日ヨリ同

織部殿被仰付候、

二十九日迄日数三日於福昌寺御執行有之候間、御法事

元文四年未八月廿二日 有川孝右衛門

中殺生令停止候、以下略ス、

(寛保カ)享保三亥十一月廿三日 御家老座印

一四一九

一御前様御法名、靈龍院殿潜頭妙能大師、

一四二二

一御中陰御法事、来月五日ヨリ同七日迄、於福昌寺御執

(靈元)一法皇御所崩御ニ付、殺生並普請・鳴物・遊興ケ間敷儀、

行有之、

今日ヨリ十日迄日数五日令停止候、此旨支配中へ可被

未八月

申渡者也、

享保十七子九月六日 御家老座印

一四二〇

一文章院様御一周忌御法事、今月十日ヨリ十四日迄於南

一四二三

泉院御執行候間、右御法事中、殺生禁断仕、鳴物・遊

一敬法門院様、八月晦日薨御ニ付、今日ヨリ来ル十日迄

日数三日、殺生・鳴物・遊興ケ間敷儀令停止候、普請
ハ不苦候、此旨支配中へ可被申渡也、

享保十七子十月八日 御家老座印

一四二四(の1)

一 於厚様、御病氣御養生不被為叶、先月十三日亥刻、御
天亡被遊候段、御到来ニ付、今日、御役人限御機嫌伺
候様、
(重孝女、翠蔭院)
御オン被仰渡、脱カ)

安永七戌七月二日

(一四二四の2)

右ニ付、踊ノ儀ハ御神事ニ付テノ事候条、御慎内ハ頭
屋迄踊ニテ、御城下其外御寺方へ踊候儀無用申付候、
一 道大鼓不打、頭屋へ参、踊相仕廻、直ニ可罷帰候、
一 町踊ノ儀ハ御慎相請踊候様申付候条、日限ノ儀致吟味
可申出候、

以上、

一四二五

一 淨岸院様百ケ日・三拾五日・四十九日被相込御法事、
来ル十三日ヨリ十五日迄御執行有之候事、
(雜豐雜室竹姫)

安永二巳三月十日

但、明和九辰十二月五日御逝去、

一四二六

一 玉貌院様四十九日・御百ケ日御法事、今一日御執行、
(重孝雜室)

安永四年未十二月十四日

但、未十月廿六日御逝去、

一四二七

一 清水中納言様、先月八日被成御逝去候、依之、普請ハ
今日ヨリ三日、鳴物ハ七日令停止候、此旨支配中へ可
被申渡也、
(重好)

寛政七年卯八月十日

御家老座印

一四二八

(斎堂裏、芳蓮院)
一 御前様御逝去ニ付、御領國中慎ノ儀ハ別段申渡通候、

若殿様御事、御定式ノ御忌服被為請候間、御忌内ハ人々
心得ヲ以可相慎候、此旨向々不洩様可致通達候、

寛政八年辰七月

(伊勢貞矩)
播磨

御家老座印

一四三二

(信成)
一 御老中安藤对馬守様御卒去ニ付、御停止仰渡有之筈候

ヘトモ、於ラクノ御方死去ニ付、御停止別段被仰出無
之旨申来候、此旨支配中へ可被申渡者也、

(文化七年)
午六月

御家老座印

一四二九

(家治養女、紀伊治宝室、貞恭院)
一 種姫君様、御不予ノ処、先月一日被遊御逝去候段御到

来ニ付、鳴物今日ヨリ来ル十四日迄日数七日令停止候、
普請ハ不苦候、此旨支配中へ可被申渡也、

寛政六年寅二月八日

御家老座印

一四三一

(長貴)
一 丹羽加賀守様御妹於薰様御事、御病氣御養生不被為叶、

先月二十四日被成御卒去候ニ付、日数二日鳴物停止、
普請ハ不苦旨申渡答候ヘトモ、於ラクノ御方死去ニ付

慎中故、別段不申渡候、此旨支配中へ可被申渡者也、

(文化七年)
午六月二十六日

御家老座印

御勝手方

一四三〇

(家斉側室、家慶実母、香琳院)
一 ララクノ御方、病氣養生不相叶、先月二十日死去ノ段

従公義被仰渡候、依之、普請ハ今日ヨリ五日、鳴物ハ
十日停止申付候、此旨支配中へ可被申渡也、

文化七年六月二十六日

御家老座印

御勝手方

一四三三

(後松町)
一 仙洞御不予御養生不被為叶、先月三日被遊 崩御候、

依之、普請・鳴物、昨日ヨリ来ル二十六日迄日数五日
令停止候、此旨支配中へ可被申渡者也、

文化十酉十二月廿三日

御家老座印

公義

廿日 廿六日 四月廿日 十一月廿日

一八日 十日 十二日 十四日 十七日 廿日

晦日小ノ月
廿九日

御精進日

右、文化元子六月十日御用人座聞合書記之、

一四三四

太守様 齊宣公

一 毎月 十八日 十日 廿日 十一日 五日 廿六日

七日

一 御正忌日 四月廿日⑧卅 正月十三日 十一月朔日

八月五日 三月廿日 二月二日 十月廿六日

七月三日 正月廿三日 二月廿日 七月廿六日

六月十三日 五月三日 七月廿九日 三月廿三日

四月十一日 十二月廿二日 七月二日 四月十二日

七月廿日 三月廿九日 七月五日 三月七日

六月十一日

中將様

一 毎月 二日 五日 七日 十日 十一日 十八日

一四三五(の1)

一 毎月御忌日朝夕御精進日

一 得佛様(忠久)

一 淨国院様(吉豊)

一 慈徳院様(宗徳)

一 有邦院様(維豊)

一 圓徳院様(重年)

一 淨岩院様(崇中)

一 慈照院様(重孝)

一 正覚院様(重年)

一 御正忌日御精進日

一 靈龍院様(吉豊)

一 瑞仙院様(維豊)

一 智光院様(重年)

一 玉貌院様(重孝)

一 月桂院様(吉豊)

一 妙心院様(重孝)

右之通、太守様御精進日被相定候旨被仰渡、

天明七未三月

(一四三五の2)

按スルニ、御正院様ノ内 得佛様ハ 御家御開關

ノ御元祖様故、百世不遷ノ御廟ニテ、御世代ノ遠近

無構、右之通御精進日被召建候、其以下御代々様ノ

儀ハ御高祖父様御四代様マテ御精進日被召建、夫ヨ
リ以上ハ御繰越ニ御引取ニ相成候、御幾代ニ相成候
テモ御元祖様迄御五廟様迄被相究候、諸侯祀五廟ト
云、本文ニ被為依候哉ト相考候、 浄岸院様ハ格別
ノ御方故、御例外ノ由、

一四三六

一公義御精進日、当時別紙之通ノ旨申来候間、可承向々

へ可申聞置候、

寛政七卯七月

(市田教團)
勘解由

一四三七

一殿中御精進 八日 十二日 十七日 廿日 晦日

右、毎月朝夕、

一十日 十四日 廿四日 廿六日 二月廿四日朝

右、毎月朝計、

但、御祥月ハ朝夕、十月廿四日ハ朝計、六月廿四日

朝計、

朱ニテ

是ハ 孝恭院様御祥月ニ付、御台所ハ朝夕、

一九月九日

右、御祥月ニ付、朝計、

但、毎月ハ御精進無之、

一右ノ外ハ朝献上物無之、

一二月廿八日 十月三日

右、当時御精進無之、

右之通被仰渡、

寛政七卯八月

勘解由
取次
迫水善左衛門

一四三八

一四月廿四日 毎月御忌日

御精進、月次朝計、御祥月終日、御序ノ節御拜、

右、(重孝女教團) 浄信院様御忌日、御当代右之通被定置、 中将

様ニハ右御 正忌日朝御精進被遊候、

天明八申

一四三九

一圓徳院様御忌日、十六日ノ儀十一日ニ御日取被相改候、

一淨信院様御忌日、廿四日ノ儀廿日ニ御日取被相改候、

右ノ通、此節被相改候条、可承向々、可申渡候、

寛政十一未正月

(伊勢貞矩) 播磨

一四四〇

一十一日

右八、芳蓮院様御忌日、御七回忌迄ノ御正忌日、正

五九月御忌日、御下国脇年頭・盆・歳暮・御発薦前

御参詣、且又御参詣無之砌並御留守年ニハ御家老

御代参被仰付候条、此旨寺社奉行へ申渡、可承向へモ

可申渡候、

寛政八辰九月

播磨

一四四一

一六月十一日

芳蓮院様御正忌日付、御精進日被相立候、左候テ御正

忌日計御仕置ハ相除、其外ノ儀無御構、尤、月次御忌

日ハ都テ無御構候、右毎月御忌日、御七回忌迄ハ御咎

目事等不被仰付候旨申渡置候へトモ、此節右之通被仰

渡候段申来候条、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へ

可相達候、

寛政九巳正月

播磨

一四四二

一七月五日 麗珠院様

一三月七日 天苗院様

右御正忌日、御精進日被相立候、此旨可承向へ可申

渡候、

寛政九巳閏七月

縫殿

一四四三

一三月廿九日 幻住院様

右御正忌日、御精進日被相立候条、此旨可承向へ可申

渡候、

寛政十午六月 ⑥廿六日

縫殿

一四四四

一寛保十三亥十一月二十七日ヨリ同二十九日迄、寛陽

院様五十年御回忌御法事被為濟候ニ付、左之通被仰渡、

二十九日

右、寛陽院様御忌日ニテ候ヘトモ、此節御精進日ヲ被

明候条、殺生等ノ儀無御構候、以下略、

寛保三亥十二月二日

御家老座印

一四四五

一慈照院様御正忌日ノ儀、遠島以下御咎目事其外無御構、
(重妻室)

月次御忌日ハ都テ無御構旨被究置候ヘトモ、今度御家

督被遊候ニ付、御精進日等ノ儀、先達テ申渡置候通候、

依之、以来右御忌日御咎目者其外申渡事等、都テ五日・

十六日・廿日御同様被仰付候、

一十二月廿六日 覚了院様

一七月十六日 ④⑤ 達院様

右御忌日、御部屋栖内御朝夕御精進日被立置候、依之、

今度御家督被遊候ニ付テハ、御正忌日ノ分表向御精進

日被相立候、然トモ御咎目事等ハ御国政ニ相掛儀ユヘ、

遠慮ノ沙汰ニ不及候、

天明八未九月 ⑥二十一日

(島津久邦)
和泉

一四四六

一蓮心院様御忌日、二日ニ被仰渡置候ヘトモ、以来三日
(重妻女於迄)

ニ相心得、諸事致取扱候様ト事候間、福昌寺恵燈院へ
(の脱カ)

可申聞置旨、寺社奉行へ申渡、御記録奉行其外可承向

へモ可申渡候、

寛政二戌三月六日

(島津久和)
求馬

一四四七

一正月十三日

右、頼朝公御正忌日ニテ、鎌倉 御代参被仰付、御当

地ニテハ花尾山 御代参被仰付事候間、以来御精進日

被立置候、④⑤ 無屹④番々 申聞置候様被仰付候、

天明八申三月

(喜入久備) 安房

一四四八

文化六巳十月 齊興公御代

一正月十三日

右、頼朝公御正忌日ニ付、是迄之通、朝夕御精進日ニ

被立置候、

一得佛様

(忠久室)

淨国院様

(吉貴)

慈徳院様

(宗信)

有邦院様

(兼豊)

圓徳院様

一淨岸院様

(兼豊)

芳蓮院様

(兼豊)

慈照院様

(兼豊)

右、毎月御忌日朝夕御精進

(進脱之)

一貞嶽院様

(忠久室)

靈龍院様

(吉貴)

瑞仙院様

(兼豊)

智光院様

(重年)

玉貌院様

一慈光院様

(兼豊)

妙心院様

(兼豊)

嶺松院様

(兼豊)

淨信院様

右、御正忌日御精進、

右之通被定置候条、可承向々へ可被申渡候、

巳十月

(明之進) ②二十四日

安房

一三月廿九日

幻住院様

(明之進) ①殿

八月十七日

光容院様

(兼姫)

一四月十二日

寶池院様

(職之助)

九月十七日

瑞光院様

(於美齋)

右 御四靈様、 太守様御兄弟ノ御事故、御正忌日計

御精進被立置候、

一七月三日 月聴院様

(重妻女於厚)

七月廿六日

照光院様

(同於克)

六月十三日

翠黛院様

(同於信)

五月三日

蓮心院様

(重妻男)

一七月廿六日

芙蓉院様

(香樹院、同龜五郎)

三月廿三日

青林院様

(同磨之助)

七月廿九日

普樹院様

(同為次郎)

四月十一日

義光院様

(天苗院、同栗之助)

一七月五日

麗珠院様

(同蓬之進)

三月七日

天苗院様

(同豹治郎)

七月廿日

蓬窓院様

(同蓬之進)

三月三日

寶基院様

右 御十二靈様、以来御精進日被為候、

右之通、表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候、

文化六年巳十月十五日

安房

一四四九

▽④ 写 Δ

一廿八日

右、一位様御忌日ニ付、 太守様 総州様半御精進日

ノ御取持ニ候、表向御祝事御規事ハ無御構候、御着進

上又ハ御祝事ハ無之筈候、 末略ス、

寛保元酉三月二十四日

(島津久兼) 本

但、一位様御法名天英院様卜奉称候、
淨岸院様御
実母様歟、

一四五〇

文化九年申

二月二十二日 靈合院様
(齊宣男武五郎)⑦殿

右御正忌日ニ付、御精進日被相立候条、此皆可承向へ

可申渡候、

申八月⑧二十一日

(島津久備)
安房

一四五二

文化八年未

一八月十四日 香雲院様
(齊宣女於幹)⑧殿

右、同断、

未十二月

(島津久備)
安房

一四五二

一慈照院様
(重兼室)

右御正忌日九月二十六日、九月二十三日ニ被相替候、
一芳蓮院様
(齊宣室)

一 寶基院様

右御正忌日六月十一日、六月八日ニ被相替、
(重兼男約治郎)

右御正忌日三月三日、三月二日被相替、

右御靈々様御正忌日、右之通被相替候旨被仰出候段申
来候条、此旨向々へ可致通達候、

文化十一年戊十月⑨十三日 (川上久芳)
右近

御法事之次第

一四五三

一御法事ノ儀、公義仰渡ノ趣ニ準、本七日又ハ三日一

日、御法事日教誦経相減、向後左之通申付候、

本七日、衆僧百五十八人ニテ、法華千部ニ候、

一五日、衆僧百八人ニテ、法華三百部、

但、此衆僧ノ内ニ三ヶ寺⑩可相込候、伴ノ僧者相込

ルニ不及候条、御法事御賄迄ヲ可被下候、

内、三日ハ法華読経、一日ハ懺法、満散ノ日ハ施餼

鬼半齋勤行、

本三日、衆僧百五十八人ニテ、法華三百部ハ、

一日、衆僧五十八人、法華五十部、

但、右同断、

本一日、衆僧百七人ニテ、法華經百部ハ、

一日、衆僧三十八人、法華經三十部、

但、右同断、

右二行、一日ノ御法事ニハ法華・懺法・施餼鬼半齋勤

行、

右施物ノ次第

五日御法事ノ節者、

一銀一枚 福昌寺住持

一青銅百疋

但、懺法頓写御塔婆書之布施、二十五年御法事以

後拈香修行ノ節ハ外二百疋可被下候、

一錢二貫文 東堂長老一人

一同二貫文 維那

一同一貫文 御目見寺一人

一同五百文 平僧一人

一同百文 懺法役者

一同五百文 御手長僧一人

一同四百文ツ、

堂莊嚴僧一人 木魚打一人 座見僧一人

一同二百文ツ、

鐘打一人 殿司一人 頓写役者一人

右四行ハ平僧ノ内ヨリ加役ニ相勤候故、布施物二重

被下候、

一同二百文 寺役者一人

一同百文ツ、 門前大工二人

一同五百文 行脚

一日御法事ノ節ハ、

一金子二百疋 福昌寺^①住持

一錢五百文

但、懺法御塔婆書布施、

一 錢五百文 東堂長老一人

一同三百文 維那

一同二百文 御目見寺一人

一同百文 平僧一人

一同百文ツ、

懺法役者一人 御手長僧一人 木魚打一人

堂莊嚴僧一人 座見僧一人 鐘打一人 殿司一人

右一行ハ平僧ノ内ヨリ加役ニ相勤候様(故カ)、布施物二重

被下候、

一同百文 寺役者一人

一同百文 門前大工一人

一同三百文 行脚

一 五日御法事ノ節ハ、衆僧並僧苗喝食迄、御法事中三番

点心兩度被下、一日御法事ニハ一度被下候、

一 御法事中、煙草相渡来候ヘトモ、以後御法事ノ節ハ、

御名代方入用ノ分御書院方ヨリ持セ、衆僧ヘ遣候煙草

ハ向後無用申付候、

一 御靈前御道具ノ内損候品ハ膳ニテ相濟、重テ及造替ノ

節ハ金銀(港)泊磨無用申付候、

右、公義仰渡ノ格ヲ以、本七日三日(老日)ノ御法事日数

読經衆僧布施物等ノ義、右之通相改候、本五日ノ御法

事日数三日ニ相縮候段(行)、当八月御法事ノ節申渡置候、

以後御法事ノ節、御靈膳備物並聚来ヨリ滿散迄ノ法

式、又ハ出来物脇ニ献納物ノ儀ハ、御法事日数不依多

少、弥当八月申渡置候通、得其意、御法事可被取行候、

左候テ、御法事一卷ノ儀、寺社奉行所ヘ一帳認置、混

乱無之様ニ可被申渡也、

享保九年辰十二月

御勝手方印

取次 鎌田六郎太夫

一四五四

写

一 御正院様(統カ)ノ御遠祖様、御祖父様以上ノ御統ヨリ、三十

三回・五十回御忌ノ節、御法事相濟候以後、於敷舞台

御囃子・狂言ノ儀、小舞被仰付、其御法事ノ住持並御

法事ヘ相詰候出世僧・役僧ヘ拜見、御料理頂戴被仰付

候、百回以上ノ寺役御法事ノ節ハ、御執行相濟候以後、於敷舞台御能・狂言ノ儀ハ、右同断被仰付、其寺ノ住持・前条ノ僧侶へ拜見、御茶^①菓子頂戴被仰付候、

但、二汁三菜ノ御料理・御菓子・濃茶迄頂戴被仰付候、御檢約年限内ハ、香ノ物相込一汁三菜ノ御料理・

薄茶被下候、

一御囃子・御能共ニ、大御目附以上並大御番頭ヨリ聖堂奉行迄、且御目付御法事方へ相詰候、寺社方取次別紙絵図面ノ席々へ相詰、着服ノ儀ハ御寺法ニ準、大御目附格已上熨斗目・長袴着用、

一御能ノ節ハ、物頭兩人帯刀ニテ可相詰候、御囃子ノ節ハ、不及帯刀可相詰候、

一住持・役僧等拜見、御料理被下候、席別紙絵図面押札之通、

一御囃子・御能共ニ、五番ツ、被仰付^①候、御能与ノ儀ハ其席ニ吟味可申渡候、

一諸外城御寺ノ御正統ノ御遠祖様百回以上ノ寺役、御法事相濟候以後、其御寺ノ住持・役僧等へハ遠方ノ儀故、

拜見不被仰付候間、御法事方へ尋越候、寺社方取次ヲ以、於御寺住持へ銀一枚、御法事へ相詰候出世ノ僧・役僧相中へ青銅三百疋拜領被仰付候、

一御正院様御遠忌ノ儀^①ハ、衆僧三十八人ニテ、内出世僧^①十四五人ノ間ニテ可相動候、

一諸外城御寺右同断ノ節ハ、衆僧三十八人ニテ、内出世僧^①ノ儀ハ其節ノ在合人数ニテ可相動候、

右之通被仰付候旨被仰渡、

天明元年丑六月^①二十一日
(鳥澤久健) 仲

一四五五(のし)

一此節、圓徳院様三十三年御回忌相濟候以後、於敷舞台御囃子被仰付、福昌寺住持・御法事へ相詰候^(世脱カ)出僧へ拜見被仰付、住持以下出世僧へハ、一汁二菜ノ輕キ御料理・御菓子・御茶迄頂戴被仰付候旨被仰渡、

天明七年未五月朔日

(一四五五のし)

(列)により補、行間朱書)

本文之通被仰渡置候置へ共、此節ハ 中将様へ被对御

囃子を不被仰付、御料理迄ヲ被下候段、未七月九日被
仰渡、

一四五六

一 五月ヨリ八月迄ノ内御法事ノ節、御代参又ハ御寄合
ノ御名代並諸人数、御手長相勤候人、兼テ七夕・八朔
白帷子致着候面々ハ白帷子致着用、且又盆御手長相勤
候人モ白帷子致着用候テモ、向後御中陰御法事ノ節計
右通白帷子着用ニテ、御年回御法事ノ節ハ不及其儀、
染帷子致着用候様被仰付候、

安永二年巳九月四日

一四五七

一 寛政四子九月 (雜覽) 有邦院様三十三年御回忌御法事被為濟
候ニ付、於數舞台御囃子被仰付、福昌寺住持・役僧等
へ拜見被仰付、並御料理頂戴被仰付候次第、
一 住持、杉ノ間へ着座ノ上、御家老出席、御意ノ趣相
達退座、

一出席ノ僧・役僧、同断着座ノ上、御用人出席、前条同
断相達退座、

一 御囃子相濟、住持へハ、於台子ノ間御料理被下頂戴半
御家老出席、挨拶退去、

一 右同断出世僧(役僧)へハ、於竹之間御料理被下頂戴半御用
人出席、挨拶同断、

一 右畢テ、住持於松之間謁御家老、御礼申上、
一出世僧・役僧、於數舞台謁奏者番、同断申上、

以上、

右之通、御次第書ヲ以被仰渡候ニ付、御手当等諸事無
間違様可被申渡候、尤、詰御役々熨斗目・半袴、

寛政四子九月廿九日 町田孝太郎

一四五八

一 妙心院様 (雜覽側室) 嶺松院様 (雜覽側室)
右者、御正統ノ御夫人様、
信解院様 (網袋女於榮) 淨信院様 (重兼女敬姫) 御
法事ノ儀、三十三回御回忌迄御物執行、五十回(御)忌ヨリ
寺役ニ可被仰付旨、先達テ被究置候付、右 御両靈様

御法事ノ儀モ御同様被仰付、從 御兩殿様御代參ノ儀
モ三十三回御忌迄、是迄之通被仰付候、

一 嶺松院様御事、中將様ニハ格別御崇敬之趣被為在候ニ
付、三十三回御忌後ハ、御法事 御代參^{⑦等}、御一世
是迄之通、御隠居御方御構ヲ以可被成進、被仰出候、
右之通被仰付候段申来候条、此旨可承向々へ可申渡候、

寛政六年寅十月^{⑧二十四日}

^(兼刈隆宣)
大炊

一四五九

一 御正統ノ 御夫人様御年回御法事ノ儀、以前ヨリ被仰
付来候通、三十三回御忌迄ハ御物御執行被仰付、五十
回御忌ヨリ寺役被仰付候、併、五廟ノ内へ被遊御当候
御方様ノ 御夫人様ハ、為御遠忌共御物御執行被仰付候、
^(忠久室)
一 貞嶽院様御年回御法事、是迄不被為及御沙汰候へトモ、
以来御年回ノ節ハ御法事被仰付候、

一 信解院様御法事ノ儀、三十三回御忌迄御物御執行被仰付、
五十回御忌ヨリ寺役被仰付、盆御灯笼ノ儀、三十三回
御忌マテハ御番頭御使ヲ以被遊御寺納候、左候テ、年

頭其外 御代參ノ儀、三十三回御忌迄ハ是迄之通被仰
付置候、

一 淨信院様御法事ノ儀、右御同様三十三回御忌迄御物御
執行被仰付、御代參ノ儀モ其節迄ハ是迄ノ通ニテ、其
後ノ儀ハ前条御同様被仰付置候、

右之通被仰付候段申来候条、此旨可承向々へ可申渡候、

寛政六寅十月^{⑨二十七日}

大炊

一四六〇(の1)

一 圓徳院様、宝曆五年亥八月二十一日夜御葬送相濟、兩
^(重年)
日間有之、同二十四日聚来ニテ、二十五日ヨリ二十九

日マテ御中陰日数五日御執行、
一 右ニ付、御寺詰御役々、左之通、

一 大身分一人 御家老一人 大御目付一人
一 寺社奉行兩人 御番頭三人 御手長二人

御用人兩人 御近習役一人 物頭一人 御使番一人
御目付一人

(一四六〇の二)

一 淨岸院様御中陰御法事、左ノ通、

一 御法事日数七日、

一 御葬送相濟、三日間有之、四日目聚来、翌日ヨリ七日目迄御法事勤行御次第、

一 初日 暁天御茶湯・御菓子上ル、早朝御粥・諷經、五

ツ時大乘妙典、四ツ時御点心、午時御半齋、八ツ時歎

仏勝会拜仏修行、^{⑨時}晡略施餓鬼御回向、

一 二日 暁天御茶湯・御菓子上ル、早朝御粥・諷經、五

ツ時大乘妙典、四ツ時御点心、午時御半齋、八ツ時大

乗妙典、晡時対靈小参問答商^{⑩量}、

一 三日 暁天御茶湯・御菓子、早朝御粥・諷經、五ツ時

大乘妙典、晡時、^(以下欠)

一 中日 暁天御茶湯・御菓子、早朝御粥・^(風カ)風經、五ツ時

大乘妙典、四ツ時御点心、八ツ時大乘妙典、半夜頓写、

一 五日 暁天御茶湯・御菓子、早朝御粥・諷經、五ツ時

大乘妙典、四ツ時御点心、午時御半齋、八ツ時水月道

場法会、

一 六日 暁天御茶湯・御菓子、早朝御粥・諷經、四ツ時

御点心、午時御半齋、八ツ時大乘妙典、晡時宿忌邊行、

一 七日 暁天御茶湯・御菓子、早朝御粥・諷經、五ツ時

放生会大施餓鬼、四ツ時御点心、午時大拈香、同時御

半齋、晡時御立塔諷經、

右之通勤行、

但、福昌寺ヨリ申出、

一 衆僧二百五十六人 法華千部

但、此已前御年回御法事ニ八百五十八人ニテ千部ニ

テ候ヘトモ、此節ハ被相重、

一 初中日、御代参、

一 満散、御施餓鬼 御代参、

一 同日、御半齋 御代参、且又同日御寄合ニ付テ 御名

代、

一 中日ノ夜、頓写御執行先例ノ通、

一 御名代へ御菓子・御茶、有来通、

一 御前之間へ御安置^{⑪之} 御位牌、御中陰内客殿へ御遷座、

一 御法事相濟後、仮御位牌所へ御安置、

一 御門牌、御中陰内奉掛、

一 御門牌御出ノ節、堂(社カ)社殿借ヨリ東玄喚迄奉守、足輕四人上下着用ニテ奉守、御步行一人相付、奉掛候、

一 御入ノ節、最前之通ニテ、御所ノ間へ被為入、御出入

共寺社方取次玄喚迄罷出、

一 御中陰相濟、御門牌御灰塚ニテ火ニ奉安メ候、住持寺

社方取次相勤之、

一 祭文

備前殿・兵庫殿・因幡殿・若狹殿・左衛門迄被仰付候

間、被願出候様被相達、外ニ島津駿河・島津又五郎・

島津筑後・島津内膳・島津大之助・種子島左内御祭文

被差出事候へトモ、此節ハ被相除、

一 諸道具盛物・御菓子等、都テ御物御取替、

一 脇方祭文ノ儀ハ十二合水引晒調、

一 御靈膳御道具調方有之、御椀御箸銀磨キ、其外白木具、

一 祭文献納ニ付テハ、平供台右ノ人数相中二三通調置、

御椀・御箸ノ儀ハ銘々新調、盛具等新盛替、

一 祭文平供台、盛物所ヨリ盛物役持出、小番へ相渡、

御牌前へ相備、

一 御靈膳御手長ノ儀ハ銘々施主ノ御方被相勤、祭文勤ノ

内伺候、

但、祭文方御手長取次・御靈膳方取次、小番ヨリ兼

役、

一 祭文献納ニ付テハ、私領ノ寺院ヲ以回向被相務候モ有

之、脇方寺院へ被為頼モ有之候、右寺院ハ塔司ノ物立

宿申付置、回向勤宜時分見計、御法事方ヨリ問合次第

相勤、

一 右寺院へ御料理不被下、但、以前被下來候、布施物ノ儀、

東頭へ一貫文、維那読手へ五百文、伴僧へ三百文ツ、

不被下候、

一 御中陰御法事内、諷經並御經献納仕候寺院、先例ヲ以

申出候者ハ被仰付、

但、前方ハ諷經相濟、門首並大地ノ寺院へハ二汁四

菜或ハ二汁二菜ノ御料理被下、座見廻兩人ツ、被仰

付候処、先年福昌寺焼失、仮寺家ニテ座敷差廻候付

不被下候ニ付、△此節モ不被下候、

一 右布施物、門首へハ青銅二百疋、御経献納ニ付別段一

貫文被下候、能化・出世・先達ノ沙門へハ一貫文ツ、

寺持・越家・長老・維那へハ五百文ツ、御経献納代

僧ニテ差上候へハ五百文、使僧献納候へハ使僧へ三百

文、

一 御牌前諸作物、御法事方ヨリ諸向へ手当被申渡、

一 銀二両 荒川勾当

右、頓写ニ付書写ノ内、平家語被仰付、先例ニテ被下、

一 中山王ヨリ依願御折献上被仰付候、右ニ付、小番・大

番勤方、当日詰合ノ内ヨリ被仰付、

但、圓徳院様ノ節同断、

一 満散ノ日、勤行相濟、御詰衆退出後、一所持・同格・

寄合・同並諸御役人・諸士迄拜礼被仰付候、

但、諸士ノ儀、御香奠献納ニテ拜礼被仰付候、

但、慈徳院様・圓徳院様ノ節モ同断、

一 銀三枚・青銅五百疋 福昌寺へ

但、懺法頓写御塔婆書拈香布施、

右、七日御法事ノ節満散ノ日、御目録奏者番ヲ以被下

之品ハ物奉行受込、

一 衆僧布施其外門前大工行脚物へ相中へ二百疋青銅被下

候、物奉行受込、満散ノ日、住持並出世僧・維那・

御名代御家老・御法事奉行御用人於愁月之間御寄合、

但、香物込一汁三菜御料理、御菓子・薄茶、

一 侍衣副司へ於寢察之間御寄合、御料理御振廻、奉行相

伴ニテ被下之、

一 聚来ノ晚ヨリ御法事中、衆僧並僧苗喝食迄、朝粥並一

汁一菜之御賄被下候、

一 御法事中、御牌前頓写ノ夜、諸所灯方常式御法事ヨ

リ相重候、客殿正面庭廻其外諸所 御滞棺中之通、

一 諸御役々

大身分一人 御家老一人 大御目付一人

寺社奉行兩人 御勘定奉行一人 御番頭四人

御側御用人一人 御用人兩人 町奉行兩人

御近習役一人 御留主居一人 御納戸奉行一人

物頭兩人 御使番一人 御守殿添御用達

納殿役一人 申談兩人 御目付三人

一 支度、御近習役以上、熨斗目・長袴、其外直触以上御役々・御手長取次・進物番、熨斗目・半上下、

但、外様御法事ノ節ハ、大目付以上、熨斗目・長袴、

一 小番・大番勤方、例之通被仰付、盛物役者、御料理役稽古ノ内ヨリ被仰付、

一 御包丁人頭・御包丁人・御料理役等、先例ノ通勤方被仰付候、

一 御行⑧器役・御地物役其外勤人数、同断、

一 寺内見廻横目二人、付足輕二人、

一 寺内又者下知足輕六人、

但、外御方様ノ節ハ二人、

一 東玄喚番足輕兩人、

一 福昌寺門前屋敷持人体へ、御法事中一度、一汁一菜ノ

御賄被下、

一 御侍衣並詰ノ人数難迦向々へハ、御法事中有来通御賄被下、

一 張番所並勤人数、御葬送ノ節ノ通、

但、近年ハ御引取相成候へトモ、此節ハ被仰付候、

一 御進納物並脇ノ献納物略之、

以上、

一四六一

一 齡岳(氏名)様四百年御回忌御法事被為濟候ニ付、午五月二十

五日、於敷舞台御能被仰付候旨被仰渡、

天明六年五月

一四六二

一 来午六月十八日、(患心)得佛様五百年御回忌相当リ候旨被

仰渡、

享保十巳九月朔日

一四六三

一 頼朝⑧開公五百五十年御回忌御法会、延享五辰三月十三日

ヨリ同十七日迄於大乘院御執行、

一四六四

一此節、(綱貫)太玄院様百年御回忌御法事被為濟候ニ付、月次御礼罷出候面々、明後二十二日四ツ時登城、於席々相謁 御三殿様へ可奉伺御機嫌候、諸士並諸与与力ハ御帳ニ相付可致退出候、此旨向々へ可致通達候、

享和三亥九月廿日

(兼別盛色)
下総

一四六六

一圓徳院様五十年御回忌(綱貫)被為濟候ニ付、月次御礼罷出候面々、明後十三日四ツ時登城、於席々相謁 御三殿様へ可奉伺御機嫌候、諸士並諸与与力ハ御帳ニ相付可致退出候、此旨向々へ可致通達候、

文化元子六月十一日

(赤松別致)
市正

一四六五

一銀五兩

江戸・京・大坂御留主居 物頭 移地頭 御船奉行

御使番 御小納戸頭取 御広敷御用人 教授

御右筆頭、相中、

右ハ、(重年)圓徳院様五十年御回忌御法事、来ル九日ヨリ十日迄日数三日於福昌寺御執行有之候ニ付、御香奠右ノ通、御物御取替ヲ以献納被仰付候旨被仰渡候間、右ノ通御家老与ノ面々へ被仰渡、其外不洩様可被申渡候、

此段致通達候、以上、

文化元子六月

御法事掛

一四六七

一淨国院様五十年御回忌御法事、明十日迄御執行被為濟候間、月次御礼罷出候面々、明後十一日四ツ時登城、於席々相謁 御三殿様へ可奉伺御機嫌候、諸士並諸与与力ハ御帳ニ相付可致退出候、此旨向々へ可致候、

(吉貫)

寛政八辰十月(九日) (川上久致) 久馬

(宗徳)

一四六八

一慈徳院様五十年御回忌御法事被為濟候ニ付、於數舞台御雛子被仰付、福昌寺住持並御法事へ相勤候出世僧・

役僧へ拜見、御料理頂戴可被仰付候条、住持並僧侶四

ツ時早メ登城候様可被申渡旨、寺社奉行へ申渡、詰之御役々ニモ四ツ時早メ相揃、其外御手当ノ儀ハ可承向々へ可被申渡候、

寛政十年八月 ⑧八日

久馬

午八月

以上、

右畢テ、住持於松之間謁御家老、御礼被申上之、一出世僧・役僧、於敷舞台謁奏者番、同断申上候、

一四六九

一 福昌寺住持並出世僧・役僧等、於 御城御囃子拝見、

御料理頂戴被仰付候次第 (御行間「文化」年巳九月、
有持院縁五十回御忌之節、朱書之通、)

一 住持、杉之間へ着座ノ上御家老出席、御意之趣相達退座、

一 出世僧・役僧、同断着座ノ上、御用人出席、前条同断相達退座、

一 御囃子相濟、住持へハ於台子之間御料理被下頂戴半御家老出席、挨拶退座、

但、給仕表御小姓、

一 右同断、出世僧・役僧へ於竹之間御料理被下頂戴半御用人出席、挨拶同断、

但、給仕御小姓与、

一四七〇

覚

一金子二百疋

一番頭 寺社奉行 御勘定奉行 御小姓与番頭 (腰厚力)

当番頭△ 詰衆 一所持 同格 寄合、相中 (相中) ココカ

一銀三両

一同五両

御側御用人 御用人 町奉行 御側役、相中、

一銀五両

江戸・京・大坂御留主居 御納戸奉行 物頭

移地頭 御船奉行 御使番 御小納戸頭取

御広敷御用人 教授 御右筆頭 小十人頭、相中、

右ハ、^(宗色)慈徳院様五十年御回忌御法事、来ル八日ヨリ

十日マテ日数三日^{①候}、福昌寺御執行有之候間、御香奠右
之通、御物御取替ヲ以献納被仰付候旨被仰渡候間、右
之段御家老与ノ面々へ被仰渡、其外承知ノ星相掛、無
滞相廻、留ヨリ可被相返候、此旨致通達候、以上、

寛政十年六月五日 御法事掛印

一四七一

一十七回御忌御法事、是迄御執行無之候へトモ、以来其^{①外}
御年忌同様御執行被仰付候段被仰渡、

天明五巳十一月

一四七二

一青銅三百疋

一 所奉行 御勘定奉行 与頭 御番頭

一 所持 同格 寄合、相中、

一青銅二百疋

御側・表御用人 町奉行 御近習役 同並、相中、

一同二百疋

江戸・京・大坂御留守居 御納戸奉行 物頭 移地頭
御船奉行 御使番 納殿役人、相中、

右ハ、^(宗色)慈徳院様二十五年御回忌御法事、来ル八日ヨ
リ十日マテ日数三日於福昌寺御執行有之候ニ付、御香
奠右之通、御物御取替ヲ以献納被仰付候旨被仰渡^{①候間}、

右之通、御家老与ノ面々へモ被仰渡、其外不洩様可被
申達候、此段致通達候、以上、

安永二巳六月^{①六日} 御法事方印

一四七三

一 於大圓寺御法事御遠忌等ノ節、以前ニハ時々御見合ヲ
以料物被相渡候へトモ、向後ハ客殿・御靈屋御法事共
ニ御物取計被仰付、諸事左之通被相究候、

一 御靈屋廻リ諸野菜・御菓子等、御法事詰ノ横目・御包
丁人・御料理役立合、直成等細密ニ致吟味、横目方へ
取入、御包丁人・御料理役ヨリ盛物方迄兼相勤、先規
ノ通相調差上、入用ノ品ハ問合次第向々ヨリ可相渡候、

一 青銅二百疋 大圓寺

一 同百疋ツ、 出世ノ僧

一 同五百疋ツ、 長老

一 同五百文 副司

一 同二百文ツ、 平僧

右之通、客殿御法事ノ節、御布施物可被下候、左候テ、衆僧都テ五十人被相究、御国僧不足ノ節ハ右ノ内ニテ可相濟候、

一 青銅百疋 大圓寺

一 同五百文ツ、 出世ノ僧

一 同三百文ツ、 長老

一 同三百文 副司

一 同百文ツ、 平僧

右ハ、御靈屋御法事、御物調ニテ被仰付候節、同断可被下候、左候テ、衆僧二十人被相究、御国僧不足ノ節ハ右ノ内ニテ可相濟候、

一 銀五枚

右、御靈屋御法事、御内々ニテ⑨寺夜ニ被仰付候節、右之通

可被下候、御法事ノ節詰人数其外御賄菜料等、左之通、

一二汁三菜ノ料理並菓子・薄茶・吸物・銚子・小皿物・

取看一通リ、

右、御一門様方御附使者並御代香等被差越候人へ可差

出候、

一一汁三菜

右、詰合ノ諸役御役人、

但、菓子・薄茶等差出不及、

一一汁一菜

右、同断諸士、

一一汁三菜

右、副司以上ノ出家、

但、菓子・薄茶⑩右、差出不及、

一一汁一菜

右、平僧以下、

一一汁香物マテ

右、足輕以下、

右之通、早朝粥、朝夕御賄、請方調ニテ可被下候、

一 出家其外詰人数ノ内、銚子・取着等差出候儀無用、寺
役差出候儀勝手次第可有之候、

一 御施餼鬼棚入用ノ品ハ、大圓寺ヨリ申出候ハ、吟味
ノ上可相渡候、其外筆紙墨類ハ寺役可相調候、

一 御法事ノ節、御一門方様其外ヨリ被相備候御香奠ノ儀
ハ、向後住持へ三部^④、副司へ青銅百疋被下、右外ハ

都テ後年 御先祖様方御仏前廻御道具等出来方又ハ相
損候節、繕方等ノ入目料可召仕候、

右之通被仰付候条、無間違様可致首尾旨、可承御役々
へ申渡、大圓寺へモ可申聞置候、御法事ノ節諸人数ノ^(詰カ)

儀^④被相究候間、別紙ヲ以申渡候、
明和七寅六月

一四七四

一 大圓寺御法事ノ節諸人数^④、向後左之通、

- 一 御家老一人
- 一 御用人一人
- 一 御近習役一人

一 御留主居一人
一 物頭一人

一 御使番一人
一 御目付一人

一 表御小姓一人
一 御馬廻新番之間一人

一 御留主居付一人
一 御家老座筆者一人

一 御徒目付一人
一 横目一人

一 御步行十人
一 御用人座筆者一人

一 御使番役所筆者一人
一 御茶道一人

- 一 御家老与力二人
- 一 御用人与力一人
- 一 御近習役与力一人
- 一 御普請方檢者一人

一表坊主一人
一御兵具所肝煎二人
一足輕十四人
一御目付足輕一人
一御徒目付足輕一人
一横目足輕一人
一走番二人
一外番小頭一人
一御普請方付足輕一人
一御国大工一人
一外番八人
一仕坊主一人
一人足十人
一御靈膳方其外御賄方詰人数、左之通、
一御包丁人一人
一御料理役三人
一横目二人
一御行器役一人

一給仕足輕十人
一横目付足輕二人
一御食焚一人
一働夫一人
一御茶道方並表坊主方水汲夫一人
右、客殿御法事ノ節可相詰候、
一御家老一人
一御用人一人
一御近習役一人
一御留主居一人
一御使番一人
一御目付一人
一御取次番一人
一御家老座書役一人
一横目一人
一御用人座筆者一人
一広間小姓一人
一御家老与力二人

一 御使番役所筆者一人

一 御用人与力二人⑨指

一 御近習役与力一人

一 走番二人

一 御兵具所肝煎一人

一 御目付足輕一人

一 立番足輕二人

一 御靈前方其外御賄方詰人数、⑨指

一 御包丁人一人

一 御料理役三人

一 横目二人

一 行器役一人⑨御

一 給仕足輕五人

一 横目付足輕二人

一 御食焚一人

一 働夫一人

右、御靈屋御法事、御物調ニテ被仰付候節、可相詰

候、

右之通被相究候条、可承御役々へ可申渡候、

明和七寅六月

(島津久金)
左中

一四七五

一 慈徳院様三十三年御回忌御法事被為濟候間、於敷舞台(宗信)

御囃子被仰付、

天明元丑六月廿七日

一四七六

一 淨岸院様七年御法事ニ付、從 公方様・大納言様御拝(雜費雜室竹絶)

領ノ御香奠、明七日九ツ時御当地へ到着之筈候間、寺

社奉行一人寺社方取次麻上下着用、福昌寺於客殿寺社

奉行相受取、住持へ引渡、御法事迄ノ間、切封ノ儘入

念可致格護置候、

但、御目付一人麻上下着用ニテ御寺へ可相詰候、

一 通路筋、横目一人足輕召列水上迄差越、宰領人申談、

諸事可⑨致下知候、

但、通路筋掃除等可申渡候、

安永七戌十一月六日

一四七七

一大中様 (義久) 貫明様 (義弘) 松齡様 (家久) 慈眼院様

右 御四靈様御年回御法事ノ儀、御物又ハ寺役御法事、御執行日数、御不同有之候ヘトモ、已来右 御四靈様御年回被為当候節、日数三日寺役御法事被仰付、御香奠銀五枚御家老 御代參ヲ以御寺納被遊筈候、尤、右御四靈様外ニモ此已後格別ノ御功又ハ御徳被為在候御方様ハ、御六代已上ニ御世代被為移候節、寺役御法事ノ内ニテ、右 御四靈様御法事ノ儀ハ是迄ノ通御物御執行被仰付候、

右之通被仰付候条、此旨寺社奉行へ申渡、可承向々へモ可申渡候、

文化七年正月

(島津久彌)
安房

一四七八

写

一 御正統様御年回ノ節、日数五日之御法事ハ三日、御女中様同断、日数三日ノ御法事ハ二日ニ、此節被相究候間、御家中ノ儀モ、三日已上ノ法事致来候面々モ有之候ハ、右御法事ニ準、日数減少可有之候、此旨不洩様可致通達候、

明和八年九月

(小松清春)
帯刀

御法会

一四七九

一 頼朝公六百年御法会、来ル十六日ヨリ十八日迄日数三日花尾山於 御社頭御執行有之候間、御法会中殺生令停止候、且又火用心ノ儀尚以入念候様、表方御役人・与中・支配中へ可被申渡也、

寛政九已十二月四日

御家老座印

但、郡山郷ノ儀ハ同断月番御用人ヨリ可申渡候、

一四八〇(のー)

一來正月十三日 頼朝公六百年御回忌被遊御当候処、
大乘院御吉例禱等(折脱カ)ニ付差支、御取越ニテ、当十二月十
六日ヨリ同十八日迄日数三日、花尾山於御社頭、大雄
山御宮ノ通、御法会御執行被仰付旨被仰渡候付、左之
通取調申出候、

一元禄十一寅年、五百年御回忌ノ節ハ法花三昧並曼(茶羅)
供御執行被仰付候ヘトモ、延享五辰年、五百五十年御
忌ノ節ハ法花三昧ノ法式ニテ曼茶羅供ニハ不及旨被仰
渡候、此節日数ノ儀ハ被相減候テモ、五百五十年御回
忌ノ節ノ通、勤行等被仰付度候、

一三日御法会法式ノ次第

一十二月十六日 初テ法花三昧三時ノ勤行、
一同十七日 中日法花三昧、付、夜陰施餓鬼、
一同十八日 満散理趣三昧白右同ノ法用執行、
右之通、衆僧六十五人ニテ御執行可相勤旨、大乘院被
申出候、五百五十年御着ノ節(忌カ)ハ御当地門中ノ僧侶迄ニ
テハ相濟候ヘトモ、此節於花尾山御執行ニ付テハ、月

次御祈禱有之事候ニ付、兩所ニ相掛候儀①故、何レノ筋

御当地僧侶迄ニテハ難相濟候段申出候間、近郷ノ門中
被召寄、往來乗船並送人馬御賄料、御法之通被仰付度
候、左候ハ、可成長ケ減少申渡差越候①ト、屹ト追テ
可申出候、尤、差越候出家へ御賄料被成下候上、御法
会中御賄被下候へハ、二重ニ相成候ニ付、右ノ分ハ差
引方可申渡候、

一聚來ノ晚ヨリ満散迄、衆僧並僧苗喝食迄、朝粥兩度ノ
御賄被下度候、

一先年兩度於大乘院御法会ノ節ハ、御位牌御出来ニテ御
安置有之候ヘトモ、此節於 御社頭御法会ニ付テハ、
御神体御安置ノ御事候間、不及其儀旨大乘院被申出候、
一初テ御名代

一四日御名代
一同夜御施餓鬼御名代
一満散御名代
一同御寄合

右、五百五十年御忌ノ節ハ御名代、外ハ御名代被仰付

度候、尤、中日夜ノ勤行ニ付御名代御勤方無之旨被申出候、

一 御代参ノ節上リ物ノ儀、御茶・御菓子迄ヲ可差出旨被仰渡置候、

一 御折一合 詰合ノ御用人

一 御茶一対 御使者猿渡喜右衛門

一 中将様ヨリ、

一 御折一合 詰合ノ御用人

一 御茶一対 御使者中神内藏之丞

一 匠作様ヨリ、

右、五百年御法会ノ節、右之通進納有之候筋相見へ候、五百五十年御法会ノ調、当時御法事ノ節、御正統様ヨリ分テ御進納物無之候間、此節⑨之ノモ御進納物ニハ不及候、 隅州様ヨリハ、御服中ノ故、御服晴候節花尾山⑩へ 御代参ヲ以御香奠御献納ノ節申出候処、追テ白銀二両当番頭御代参ヲ以御進納物被遊候、此節 中将様 若殿様御進納物何様可被仰付哉、

一 御社頭張出並出家集会所、其外木屋調方被仰付度候、

左候ハ、見分ノ上可成程手狭ニテ相濟候様、調方可申渡候、

一 五百五十年御法会ノ節ハ、佐土原ヨリ使者ヲ以献納物ニ不及旨被仰渡候、此節モ其通可有御座候、

一 先年ハ御法会中諸人参詣無屹御免被仰付候、此節ハ御社手狭ノ場所ニテ候間、其節ハ都合次第寺社方ヨリ取計候様被仰渡候、

一 五百五十年御法会ノ節ハ、御当地ノ門首諷經被仰付候筋相見得候へトモ、此節於花尾山御執行ニ付テハ、詰人数等モ多人数入込ノ儀ニテ、立宿等差支筈、殊郷ノ儀候間、諷經ニ不及筋ニモ可被仰付哉、

一 右同断満散御寄合ノ節、二汁三菜ノ御料理被下候筋相見へ候、 東照宮百五十年御法会御寄合ノ節モ同断被成下候、当分御法事一汁三菜、御菓子・薄茶迄被下事候間、其通被仰付度候、此節ノ儀、於花尾山御執行ニ付テハ、於平等王院御寄合可被仰付哉、左候者御名代別段差越、右ニ付テハ掛役々等モ多人数差越、殊平等王院ノ儲ヲ以於大乘院被仰付筋ニモ可有御座哉、

一 役僧へ右御寄合ノ御料理於勝手御膳所頭相伴ニテ被成下度候、

一 御卒都婆ノ儀、此跡於大乘院御法会ノ節ハ、翌日厚地へ御塔婆供養被仰付候役々被差越候、此節ハ^⑧花尾山調方被仰付度候、

一 衆僧へ御布施物並御賄ノ儀、先例ノ通被仰付度候、

一 神主並衆人其外社家中へ御賄被下度候、
但、大雄山御法会ノ節ハ、詰御役々へモ御賄不被下候ニ付、衆人へモ御賄不被下筋ニテモ可有之候へト

モ、此節ハ本行ノ通致吟味候、

一 御法会ニ付諸出来物等ノ儀、先年校割ニ被渡置候品モ有之候間、可成程膳等ニテ相濟メ、不宜分新出来ノ筋被仰付度候、

一 詰御役々着服ノ儀、五百五十年御法会ノ節ハ、大目付衆以上熨斗目・長袴、寺社奉行ヨリ御使番マテ熨斗目^⑨半袴、其外熨斗目△着服ニ不及筋候へトモ、東照宮百五十年御法会ノ節、御側役以上熨斗目・長袴、物頭已下熨斗目・半袴、着服被仰付候間、此節モ其通被

仰付度候、当分南泉院御法事ノ節モ同断被仰付事ニ御座候、

但、五百五十年御法会御寄合等ノ節、配膳ノ表御小姓熨斗目ニ不及旨被仰渡候、東照宮百五十年御法会ノ節ハ、南泉院御法事ノ例ニ被準、熨斗目・長袴

着服為被仰付筋候へトモ、当分南泉院御法事ノ節ハ熨斗目・半袴着服被仰付事候間、此節モ右之通被仰付度候、

一 五百五十年御法会ノ節ハ、^⑩御手長并△御手長取次等ノ勤方被仰付候へトモ、東照宮御法会ノ節、御手長勤ニ不及、出御手長迄^⑪ニテ相勤候ニ付、此節ノ儀モ出家ヨリ御靈膳等差上候様可被仰付哉、

一 前条御法会ノ節、御小姓与ヨリ泊番五人被仰付候へトモ、東照宮御法会ノ節ハ出家御番迄ニテ相濟申候ニ付、此節モ御社頭へ相詰候出家ヨリ御番相勤候様被仰付度候、
右二行、大乘院へモ相糺候処、何ソ差支ノ儀無之旨被申出候、

一 前条御法会ノ節、張番所出来ニ不及旨被仰渡候、東

照宮御法会ノ節ハ箱番所立調方被仰付候、当分御法事ノ節ハ張番所^⑦并勤番所△其外手先番所等御出来有之事候ヘトモ、此節ノ儀ハ社頭手狭ノ場所候間、張番所マテ調方有之、物頭其外役々相詰候様可被仰付哉、

但、張番所ヘ足輕泊番有之筈候間、御社頭辺ヘ前以泊番ニ及申間敷候、

一 横目三人

一 右ヘ相付足輕三人

右、御法会ニ付、御社頭並寺内廻見締被仰付、右之内

ヨリ夜廻迄モ相勤候様被仰渡候、

但、御法会方ヘ引合相勤候様被仰渡候、

一 又者下知足輕六人

右同断ニ付、勤方被仰渡候、

一 盛物役ノ儀、御料理稽古ノ内ヨリ被仰付事候間、其通

被仰渡^⑧候、

一 町給仕ノ儀、先例ノ通被仰付度候、

一 於大乘院御法会ノ節ハ、門前人体ヘ御法会中一度御賄

被下事候ヘトモ、此節於花尾山御執行ニ付テハ、大乘

院役人・厚地村庄屋其外列越候者共ヘ、門前者格ヲ以御賄被下度候、

但、本行ノ通御賄被成下候テモ、大乘院門前人体左迄増減無之候、

一 錢二百文

右、此跡御法会ノ節行脚者ヘ被下候間、此節モ其通被成下度候、

一 御法会中、火消一組^⑨手中計人数御吟味次第勤方可被仰

付哉、

但、大乘院御法会ノ節ハ、兼テ被仰付置候御寺火消

ヨリ勤方有之、本文当座ハ諸郷火消手当被仰付置候

付テハ、右^⑩火消ニテ被相濟方ニモ可有之哉、

右ハ、頼朝六百年御回忌御法会、此節於花尾山御執行

被仰付候間、右之通得御差図申候、相洩候儀ハ追テ可

申出候、以上、

巳八月十一日^⑪

御法会奉行

(一四八〇の2)

右張紙外、都テ調ヘノ通被仰付候、

寛政九巳八月 (伊勢貞矩) 播磨

一四八一(の1)

一 頼朝公六百年御回忌御法会ニ付、左ノ通申出候、

一 御法会前、大檀原繕付、大乘院ヲ初衆僧十三人ニテ一

日執行有之、先例朝晩両度御賄御渡方被仰付候間、此

節ノ儀モ先例ノ通被仰付度候、

一 聚米ノ晩、御靈前ヘ御菓子・御茶湯差上事ニ御座候、

一 御法会初日ヨリ満散迄、御靈膳ヘ御茶湯並御粥、三番

点心御靈膳上候儀、五百五十年御法会ノ節ノ通被仰付

度候、

一 三宝御前ヘモ御靈膳⑧前同様差上事ニ御座候、

一 長押花ノ儀、此跡ノ通被仰付度旨、大乘院ヨリ被申出

候ヘトモ、東照宮御法会ノ節モ長押花無之候ニ付、

尚又吟味申渡候処、法式莊嚴ノ儀ニ御座候ヘトモ何ソ

差支無之段承届候間、不及調方筋可被仰付哉、

一 御法会ニ付、諸出来物並渡物等ノ儀、先例ノ通、請持

ノ座々ヘ可申達候間、被聞召置度候、

一 供台盛物ノ儀、三日御法事ニハ盛替ニ不及事ニ御座候、

然共痛損候ハ、寺社方取次・蔵方目付見分ノ上、盛

替被仰付事候、此節モ其通被仰付度候、

一 御法会中灯方ノ儀ハ、問合ノ上、先例ノ通可申渡候、

一 五百五十年御回忌御法会並東照宮百五十年御法会ノ節

諸御役々其外服着等無之人ヘ勤方被仰付候旨相見ヘ候

間、此節モ其通被仰付度候、

右ノ通相シラヘ申出候、何分ニモ御差凶次第可申渡候、

以上、

巳八月十二日

御法会奉行

(一四八一の2)

本文、都テ調ノ通被仰付候、

寛政九巳八月 ⑧付

(伊勢貞矩) 播磨

一四八二

一 頼朝公六百年御法会、此節花尾山於⑧御社頭無御滞被為

濟候ニ付、月次御礼罷出候面々、明廿三日四ツ時登

城、於席々相謁 御三殿様へ御祝儀可申上候、諸士並

諸与与力ハ御帳ニ相付可致退出候、此旨向々へ可⑨通

達候、

(寛政九年)

巳十二月廿二日

播磨

一四八三

一 頼朝公御法会被為濟候付、為御祝於敷舞台御能被仰付、

大乘院住持並出世僧・役僧・花尾山神主へ拜見、御料

理頂戴被仰付候段ハ、先達テ申渡置候通ニ候、依之、

来ル廿五日被仰付候条、五ツ時登 城候様可被申渡旨、

寺社奉行へ申渡、詰ノ人へモ五ツ時相揃、其外御手当

等ノ儀トモ無間違様、可承向へ可申渡候、

寛政九

十二月

播磨

島津家歴代制度卷之廿六

天明
天和

御恐悦

公辺御使者

御祝規

御願御届

御雁拝領

御着拝領

御馬拝領

伊勢家御礼

御登城御断

公辺御勤向

御恐悦

一四八四

一享保六年丑十二月十八日、
(雜書) 太守様少将御任官、

一四八五

一増上寺火ノ御番被仰渡候旨被仰渡、享保十二未四月御
到来、

一四八六

一公方様 (吉書) 日光御社参、御機嫌能被遊還御候付、御伺ノ

上、五月廿五日御一門様其外御心易御方被仰入、御料
理被進、御離子有之候段御到来、

享保十四西七月

一四八七

一享保十六亥正月四日、以宿次御奉書御鷹之鶴御拝領、

一四八八

(家重書) 一御簾中様御着帯ノ為御祝儀、御守殿へ上使ヲ以、

御簾中様ヨリ (繼尊) 太守様へ二種一荷御拝領、

享保十八丑七月

一四八九

一元文四年未十二月十一日、御城へ被為召、於御前

御元服、御一字御拝領、從四位下侍從被 仰出候、御

名 薩摩守様、御実名 宗信公ト奉称候旨被仰渡、

一四九〇

一薩州様御疱瘡、申三月十三日御酒湯被為召、御機嫌能

被遊御座候段御到来、

元文五年申三月

一四九一

一薩州様へ (徳川宗勝) 尾張様御息女様御縁与被 仰出、御名 房姫

様ト奉申上候段仰渡、 (被脱之)

元文五年申四月廿八日

一四九二

一総州様へ (吉興) 宿次御奉書ヲ以御鷹ノ鶴御拝領、元文六年酉

正月十一日御到来、於磯御頂戴、

一四九三

一寛保四子正月十五日、右同断御到来、於磯御頂戴、

一四九四

一増上寺火ノ御番被仰渡、当分 (繼尊) 太守様御病氣ノ故、出

火ノ節ハ (宗信) 薩州様御出可被成旨被仰渡、

延享元子五月

一四九五

一薩州様へ、延享二丑四月十六日、以 (宗信) 上使初テノ御暇

御給、從 (吉孝) 公方様紗綾二十卷、 (家重) 右大将様縮緬十卷 (御脱) 拜

領、同十八日為御礼御登 城、黒御書院ニテ御馬御拜

領、

一四九六

一 太守様(繼豊) 薩州様へ從 大御所様(吉宗) 延享二年 丑十月十九日於江戸

以 上使、御腰物一腰・箱御着一種ツ、御拝領、薩

州様御拝領ノ御腰物ハ丑十一月廿一日御到来、

延享四卯正月十三日

一五〇〇

一 太守様(宗信)、從四位上御官位御昇進、

寛延元辰十二月十三日

一四九七

一 將軍宣下ニ付、公方様(家重)ヨリ御三殿様へ、於江戸以上

使御拝物有之、(領脱之)

延享二丑十二月

一五〇一

一 隅州様(繼豊)、御国元へ御湯治御暇、旧臘廿八日御願之通御

給、從 三御所様被遊御拝領物候段御到来、

寛延二巳正月

但、正月四日御発駕被 仰出候、

一四九八

一 旧臘朔日、宗信公御家督御隠居ノ御礼被 仰上候段、

被仰渡、

延享四年卯正月六日

一五〇二

一 寛延二巳三月六日、尾張様御息女様(宗勝) 太守様へ御縁与

被 仰出、御名 嘉知姫様、

一四九九

一 先月十八日、太守様(宗信)被任少将候旨、御到来ノ段、被

仰渡、

一五〇三

一 寛延二巳三月十六日、松平筑前守様御嫡子修理大夫様(重政)

一 菊姫様御縁与被 仰出候段御到来、

一五〇四

一 兵庫様へ御家督御相続、御願之通被 仰出候段御到来

候間、御祝儀申上候様被仰渡、

寛延二巳十二月三日

一五〇五

一 太守様十一月廿八日 御城へ被為召、御元服、御一字

御拝領、御官位從四位下少将被 仰出、御道具御拝領、

御名 薩摩守様、御実名 重年公ト奉称候旨被仰渡、

寛延二巳十二月二十八日

一五〇六

一 旧臘四日、上使松平頼母様ヲ以、太守様へ御鷹ノ

鶴御給ノ段、御到来ノ旨被仰渡、

寛延三年午正月四日

一五〇七

一 於村様、御前様ニ御立被成候儀、御伺被仰上候処、御

伺之通被仰渡候段被仰渡、

寛延二巳十二月廿八日

一五〇八

一 島津善次郎殿御事、於江戸 太守様ヨリ今月四日御用

番様へ御嫡子ノ御届被仰上、御名御実名被進、奉称松

平又三郎忠洪様候旨、御到来之段被仰渡、

宝曆四戌八月廿四日

一五〇九

一 御手伝御普請被遊御勤候旨、太守様へ御時服五十拜

領被仰付候旨、今月十三日御老中ヨリ御名代松平河内

守様へ被仰渡候段、御到来候旨被仰渡、

宝曆五年亥六月廿九日

一五二〇

一先月廿七日、又三郎様御名代御類中御忝人西尾(忠尚)隱岐

守様御宅へ御出被成候様、前日御老中様御連名ノ御奉

書御到来、島津淡路守殿御出候処、御老中様御列座、

隱岐守様ヨリ(重孝)圓徳院様御遺領無相違御相続被仰出、

御幼年故(継忠)隅州様被添御気候様被 仰出候旨、御到来

有之候段被仰渡、

宝曆五年亥八月十五日

一五二一

一菊姫様御結納、松平筑(黒田継高)前守(物)御方御互ニ御取替被為濟

候段、被仰渡、

宝曆五年亥十一月六日

一五二二

一菊姫様、亥十二月七日松平修理大夫様(黒田重政)へ御婚姻被為整

候段、御到来、

宝曆五年亥十二月

一五二三

一隅州様、以宿次御奉書御鷹之鶴御拝領、宝曆六子二月

十五日御到来、

一五二四

一先月十九日(重孝)太守様御登城、松平越中守様御同道、

於 御黒書院(家重)公方様(家治)大納言様初テ 御目見被遊、

御退座、又(タカ)八 御前へ被為召、御懇之被蒙 上意、西

御丸へモ御上り、万端御首尾能被為濟候段被仰渡、

宝曆八寅五月十七日

一五二五

一太守様、寅六月十三日御城へ被為召、於 御前御元服、

御一字御拝領、從四位下少将被 仰出、御盃御肴御頂

戴、御道具御拝領、御名薩摩守様、御実名重豪公ト御

改被遊候旨被仰渡、

宝曆八寅七月七日

一五二六

一 御家督御祝、先月十八日御老中様御招請、首尾能相濟候段、被仰渡、

宝曆九卯十月廿一日

一五二七

一 卯十一月四日、^(重要) 太守様へ^(橋宗尹) 刑部卿様御息女 保姫様御縁与被 仰出候段、御到来有之候旨被仰渡、

宝曆九卯十二月七日

一五二八

一 今度御転任御兼任相濟候付、^(家重) 公方様 ^(家治) 右大将様ヨリ
以 上使 ^(維忠) 隅州様御拝領物、 姫君様へモ 公方様

右大将様 御簾中様ヨリ以 上使御祝物被遊候段、被仰渡、

宝曆十辰三月十六日

一五二九

一 辰四月朔日、^(家治) 右大将様へ御政務御讓、五月十三日 御本丸 西丸御移替首尾能被為濟候付、

一 縮緬十卷 塩鯛一箱 昆布一箱 御樽一荷 上様ヨリ

一 鯛一折 ^(家重) 大御所様ヨリ

一 御肴一折 御台様ヨリ

右、御移替首尾能被為濟候為御祝儀、同十五日以上使、 姫君様被遊御給候、

一 縮緬二十卷 干鯛一箱 昆布一箱 御樽一荷 上様ヨリ

一 干鯛一箱 御樽一荷 大御所様ヨリ

一 御肴一種 御樽一荷 御台様ヨリ

右、御代替ノ御祝儀、

一 干鯛一箱 御樽一荷 大御所様ヨリ

右、御隠居ノ御祝儀、

右之通、五月廿二日以 上使 姫君様被遊御給候、

一 書棚一 干鯛一箱 大御所様ヨリ

右、御隠居ノ為御祝儀、去ル二日以 上使 姫君様被

遊御給候、

一短尺御手鑑 干鯛一箱 大御所様ヨリ

右同断ニ付、去ルニ日 仰御文ヲ以 菊姫様へ被遊御

拝領候旨、御到来ノ段被仰渡、

宝曆十辰六月

右、將軍宣下為御祝儀、先月十八日(清熙) 上使市川出雲
守様、御拝領、

一鈍子十卷 干鯛一箱 御樽一荷

公方様ヨリ菊姫様へ

一長綿二十把 干鯛一箱 御樽一荷

御台様ヨリ菊姫様へ

一五二〇

一先月ニ日、從 (家重) 大御所様以 上使御腰物一腰・箱御着

一種 (維忠) 隅州様御拝領候旨被仰渡、

宝曆十辰七月七日

右同断ニ付、同日以 上使石渡(元智)四郎三郎様、御拝領被
遊候段御到来ノ段被仰渡、

宝曆十辰十月十八日

一五二二(の1)

一隅州様御病氣為御尋、宿次御奉書御給、十一月朔日到

御着来、

宝曆十年辰

(一五二二の2)

一右同断ニ付、御拝領之御着十一月四日到御着、

一五二二

一綿二百把 御着二種 御樽一荷

公方様ヨリ姫君様へ

一干鯛一箱 昆布一箱 御樽一荷

大御所様ヨリ姫君様へ

一干鯛一箱 昆布一箱 御樽一荷

御台様ヨリ姫君様へ

一五三三

一 太守様、巳四月十六日從 (家世) 公方様以 上使御国元へノ

御暇御給、紗綾三十卷・白銀百枚御拝領、同日從 (家) 大

御所様以 上使御先格之通御拝領物、同十八日為御礼

御登 城、御黒書院ニテ御腰物・御馬御拝領被遊候旨、

御到来ノ段被仰渡、

宝曆十一巳五月十九日

一五二四

一 巳二月十八日、將軍宣下為御祝、御老中様御招請、

宝曆十一巳

一五二五

一 先月十八日、以 上使 (重妻) 太守様御鷹之鶴御拝領ノ段、

御到来候旨被仰渡、

宝曆十一巳二月廿五日

一五二六

一 旧臘十五日、松平修理大夫様御息女様御七夜御祝ニ付、

公方様 御台様ヨリ (黒田重政) 浄岸院様 (黒田重政) 菊姫様へ、御銘々御

給物有之、右当日、於屋世様ト筑前守様奥方様ヨリ御

名被進候旨、御到来ノ段被仰渡、

宝曆十二年正月廿日

一五二七(の1)

一 先月六日、(十六日) 江戸芝御屋敷就御類焼、御参勤御月延ノ儀、

以宿次御奉書被仰渡、予州於津和港 太守様被聞召上、

右御奉書御拝見ノ上、直被遊御帰国候旨、御到来ノ段

被仰渡、

宝曆十二年三月十日

(一五二七の2)

一 右同断ニ付、先月十八日以宿次御奉書御尋、翌十九日

又々以宿次御奉書、四月 御参勤御用捨、当七月中

御参府可被成候、乍然御勝手次第可被成旨、御懇ノ

上意ノ趣、芸州於廿日市浦御奉書御拝見被遊、彼浦ヨ

リ被遊 御帰国候、且又先月廿三日 太守様為御名代

島津淡路守殿御登 城、於御白書院御縁類御老中御列

座、秋元但馬守様ヨリ 御守殿御類焼ニ付可被為御難

儀ト被 思召上候、依之、金二万兩御拝借被仰付候旨、

御到来ノ段被仰渡、

宝曆十二年三月

一五三〇

一旧臘三日、以上使 太守様御鷹之鶴御拝領被遊候旨

被仰渡、

宝曆十三年正月四日

一五三一

一旧臘四日、太守様御婚姻首尾能被為濟候段、御到来

ノ段被仰渡、

宝曆十三年正月四日

一五二八

一御守殿御家作御成就、先月朔日 淨岸院様高輪御屋敷

ヨリ被遊御移、^①当日御移△徙御祝相濟候旨被仰渡、

宝曆十二年十一月十四日

一五三二

一御前様御懐胎ニ付、先月廿二日御袖留並御着帶御祝被

為濟候段、^(被脱之)仰渡、

宝曆十三年未六月廿三日

一五二九

一先月朔日、從 太守様 ^(重要) 刑部卿様御方へ、御結納御祝

儀以御使者御互ニ御取替被為濟候段、御到来ノ旨被仰

渡、

宝曆十二年十二月十九日

一五三三

一先月十六日 太守様増上寺火之御番被仰渡候段被仰渡、

宝曆九年五月十二日

一五三四

一 菊姫様御懐胎ニ付、先月六日御着帯並御袖留御祝迄相

濟候段被仰渡、

宝曆九卯十月十一日

一五三五

一 於(鳥津貴備女)薰殿儀、島津(久柄)淡路守殿へ旧臘廿三日御結納、御婚姻

御祝段々被為濟候旨、御到来有之候段被仰渡、

宝曆十辰二月五日

一五三六

一 御前様先月十三日御安産、(梧姫)御女子様被遊御誕生候旨、

御到来ノ段被仰渡、

宝曆十三未十一月四日

一五三七

於梧様

一 右御誕生御祝トシテ未十一月廿二日 於(綱貴女)栄様 (維豊側)妙心院

(室)嶺松院様御本丸へ被仰入、御能有之、

一五三八

一 御鷹之鶴御拜領、申二月十五日御到来、

宝曆十四申二月

但、御礼使島津(吉實男實澄)玄蕃殿被差立候、

一五三九

一 先月廿七日 (重孝女)梧姫様御箸初御祝被為濟候段、御到来ノ

旨被仰渡、

宝曆十四申三月廿五日

一五四〇

一 申十一月十三日、(重孝)太守様へ以 上使、今度琉人被召

連候付、御先格之通御米二千俵被遊御拜領、同廿一日

御登 城、琉人被召連、御目見首尾能相濟、琉人御

取持ノ次第モ諸事御先格之通被為濟候旨、御到来ノ段

被仰渡、

明和元申閏十二月二日

候旨、被仰渡、

明和八卯六月

一五四一

一 西正月廿一日、以上使(重要) 太守様御鷹之鶴被遊御拜領

一五四四

一 先月廿三日、御老中様御連名ノ以御奉書、(重要) 太守様増

候段被仰渡、

明和二酉三月九日

上寺火ノ御番被仰渡候段御到来候、此節ハ二度目ユヘ、御祝儀沙汰不及候ヘトモ、御一門並御役人限致通達候

一五四二

一 御官位並御着城脇被成御祝、西七月廿五日、御女中様

明和九辰五月

方ヘ於御本丸御料理被進、御能被仰付候、

但、(継豊継室) 浄岸院様御不例ニ付、当分被成御免、有馬中(頼)

明和二酉

務大輔様御代被仰渡、御次渡相濟候段、安永元辰十

一五四三

一 家治公御筆御画左太公望
右伝説

二月被仰渡、同二年巳二月 浄岸院様御逝去ニ付、薩州へ人数モ多被差遣候故、直ニ被成御免候旨被仰

二 幅対、御表具無之、

渡、

右、四月廿八日、一橋御屋敷迄御老女松嶋様御持下り

一五四五

ニ付、太守様御拜領ノ段、(一橋治済御縁) 民部卿ヨリ御取伝被成

一 太守様ヘ、(継豊継室) 浄岸院様御不例ノ節、御丁寧御世話被遊

候様ニトノ御事ニテ、翌廿九日田沼能登守殿ヲ以被遣

候付、今般 御発駕御道中被遊御着候様 公方様上意

ニテ、御紋付御羽織御拝領被仰付候段、御老女松島様ヨリ被仰渡候段、御到来候旨被仰渡、

安永二巳四月十三日

一五四六

一先月十八日、御老中様御連名ノ以御奉書、増上寺火ノ御番被 仰出候段、御到来ノ旨被仰渡、

安永三年五月

一五四七

一先月廿一日、公方様御文ヲ以、大鷹鶴捉一居・雁捉一居、(重要) 太守様被遊御拝領候段、御到来ノ段被仰渡、

天明五巳五月十八日

一五四八

(又三郎忠興、後齊宣)
一若殿様初テノ 御目見七月廿八日被為濟候段、御到来、
天明六年九月八日

一五四九

一若殿様、旧臘七日 御城へ被為召、於 御前御元服、御一字御拝領、從四位下侍從^⑧被^⑨仰出、御盃御肴御頂戴、御道具御拝領、御懇ノ被蒙 上意、御名豊後守様、御実名齊宣公ト御改被成候段、御到来ノ旨被仰渡、

天明七未正月八日

一五五〇

(重要)
一中将様、御隠居後御国元へ御湯治御暇御願被仰出候付、先月廿七日御暇御願ノ通被 仰出、御拝領物被仰付候旨、御用番水野出羽守様ヨリ御白書院御縁類鯉ノ御杉^(忠志)本ノマ、(齊宣) 太守様へ被仰渡候段、^⑩被仰渡、△

天明七未三月

一五五一

(齊宣)
一太守様御儀、先月十八日 御城へ被為 召、少将二御任官被 仰出候旨、御到来ノ段被仰渡、

天明七未四月十三日

一五五二

一先月十三日、御本丸御老女方ヨリ御年寄被召呼、
(重要) 中将様今度御湯治御暇被 仰出御免駕ニ付、御召御羽
織被遊 御拝領候段御到来、

天明七未四月

一五五三

一(齊重) 太守様御元服御官位ニ付、口 宣宣旨御頂戴ノ御使京
都へ被差越、 禁裏へ御献上物御先格ノ通、口 宣宣
旨相渡、先月七日被遊御頂戴候段申来候旨被仰渡、

天明七未三月八日

一五五四

一将軍 宣下被為濟候付、先月廿三日、以 上使御奏者
水野老岐守様、(忠徳) 太守様縮緬二十卷、(重要) 中将様へ同十
卷被遊御拝領ノ段、御到来候旨被仰渡、

天明七未五月廿九日

一五五五

一先年御誕生ノ御男子 (重要男忠厚) 雄五郎様ト奉称、近々 公辺へ
御届被 仰出管候、尤、奥平富(昌徳)之進様御弟、御順ハ
明姫様御次ニ候条、此旨奉承知、御役人限並詰衆、来
ル十九日 御両殿様へ御祝儀、向々へ相謁可申上旨被
仰渡、

天明七未六月九日

(市田敬昌)
勘解由

一五五六

一先月廿八日、御老中様御連名ノ以御奉書、(齊重) 太守様増
上寺火ノ御番被為蒙 仰候段、御到来ノ旨被仰渡、

天明七未八月十九日

一五五七

一(齊重) 太守様少将御任官ニ付、口 宣宣旨御頂戴ノ御使京都
へ被差越、 禁裏御献上物御先格之通被為濟、口 宣
宣旨相渡、六月六日御頂戴被遊候段、申来候段被仰渡、

天明七未九月八日

一五五八

一 近年ノ内、琉球人被召列 御参府ニ付、増上寺火ノ御番被成御免候旨、被仰渡候段被仰渡、

天明八申正月

一五六一

一 七月廿八日、以上使川勝(広長)縫殿殿、御両殿様御鷹之雲雀被遊御拝領候旨被仰渡、

天明八申十一月八日

一五五九

一 先月廿二日、(斎直)太守様御家督初テ御鷹之鶴被遊御拝領、同廿三日、(重泰)中將様御隠居初テ御鷹之鶴被遊御拝領候段被仰渡、

天明八申二月

一五六二

一 御家督初テ御帰国為御尋、以宿次御奉書御着御拝領、寛政元酉九月三日御到来、

一五六三

一五六〇
一 先月五日、御領地御判物御先格之通御頂戴被遊候段、(知)

一 御家督 御初入部為御祝、酉九月廿七日御能有之、右ニ付、御城内勤之書役小役人已下同心等、麻袴致着用候様被仰渡、

天明八申四月

御一門以下諸郷迄御祝儀例之通、

一五六四

一 七月十九日、(以)上使浅野隼人殿、御鷹之雲雀 中將様御拝領ノ段、御到来、(長致)

寛政二戌八月

一五六五

一 太守様、先月廿五日御登 城、御参府ノ御礼被仰上、

同廿七日被為 召被遊御登 城候処、御老中様御列座、

松平伊豆守様(信明)ヨリ從四位上中將被 仰付ノ旨被仰達、

御受御礼被仰上候段御到来、

寛政二戌十二月十六日

一五六六

一 先月廿七日、以 上使山田肥後守殿(利寿)、今度琉球人被召

列候付、御先格之通御米弍千俵被遊御拜領候段、御到

来ノ旨被仰渡、

寛政二戌十二月

但、御役人限御祝儀、

一五六七

一 旧臘二日、琉球人被召列御登 城、御目見首尾能相

濟、同五日又候被召列御登 城、音楽 上覽、御暇被
下、諸事御先格之通被為濟候段御到来ニ付、月次御礼
罷出候面々限御祝儀被仰渡、

寛政三亥正月六日

一五六八

一 太守様御官位御昇進ニ付、口 宣宣旨御頂戴ノ御使京

都へ被差越、 禁裏へ御献上物御先格之通被為濟、口

宣宣旨相渡、先月九日被遊御頂戴候段被仰渡、

寛政三亥四月十日

一五六九

一 太守様(齊宣)、先月十五日以 上使戸田采女正様(氏教)、御国元へ

ノ御暇御給、御先格之通被遊御拜領物、同十八日御登

城御礼被 仰上候処、御懇之被蒙 上意、御馬御拜領

被遊候旨、御到来、

寛政三亥五月

一五七〇

一 旧臘廿一日、從 公方様 御台様歳暮之為御祝儀、以上使 御前様初テ御拝領物被遊候段、御到来ノ旨被仰渡、

寛政四子正月

一五七一

一 若君様御七夜御祝儀ニ付、從 公方様 御台様先月廿一日以 上使 御兩殿様へ被遊御拝領物候段御到来、

寛政四 八月

但、今度御誕生、(重要女茂姫)御台様被遊御養旨被 仰出、御名 (家齊男)竹千代様ト被進、御官位迄ハ、若君様ト奉称候旨、同月被仰渡、

右ニ付、席々謁ニテ御祝儀有之、

一五七二

一 太守様御参府ニ付、去ル十一日、以 上使御懇之被為蒙 上意、同十五日御登 城、御参府ノ御礼被仰上候

段御到来、

寛政四年子八月

一五七三

一 先月廿五日、御本丸御老女方ヨリ御年寄被招呼、(重要)中将様今度御湯治御暇被 仰出候付、御召ノ御羽織被遊御拝領候段御到来、

寛政四子九月廿六日

一五七四

一 竹千代様御色直御祝ニ付テ、從 竹千代様先月十九日以 上使、(重要)太守様 中將様被遊御拝領物候段御到来、
寛政四子十二月十九日

右ニ付、御一門方並御役人限御祝儀、

一五七五

一 先月四日以 上使大久保(忠修)八郎左衛門殿、御鷹之鶴 太守様御拝領之段御到来、

寛政五丑三月

一五七七

一若君様御髮置御祝ニ付、從 若君様先月十三日以上

使、 太守様 中將様被遊御拜領物候段御到来、

寛政五丑四月十四日

一五七七

一御隠居様御儀、御剃髮御願通被為濟候付、御一門方其

外月次御礼罷出候一面々、明朔日四ツ時登 城、於席々

相謁 御三殿様へ恐悦可被申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀等被申上来候面々、当日又ハ

御精進日間恐悦被申上、御女中方ヨリモ同断、尤、

江戸へ此節飛脚便、有来通可被申上候、

右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

文化元子五月廿九日

(兼別実祐)
下総

一五七八(の1)

一若殿様御元服被仰付候間、(文化元年十月) 今月四日御登 城、 太守 (寄宣)

様へモ御礼可被 仰上旨、御奉書御到来、御登 城、

太守様ニハ大廊下、

(一五七八の2)

一先月廿九日 以上使安藤大和守殿、今度琉球人参府ニ

付、御先格之通御米二千俵御拜領有之候付、御一門・

大身分・月次御礼罷出候一面々、(候脱カ) 来ル廿八日席々謁ニテ御

祝儀可申上旨被仰渡、

寛政八辰十二月

一五七九

一乘之助様、御六男ノ御届被為濟候付、御一門・大身分・

月次御礼罷出候面々、来ル廿八日於席々相謁、御祝儀

申上、且諸与与力ハ御帳相付可致退出旨被仰渡、

寛政八辰十二月

一五八〇

(齊宣)

一 太守様御儀、御改名御伺之通被為濟候旨、御一門方其

外月次御礼罷出候面々、来ル九日四ツ時登城、於席々

相謁 御三殿様へ御祝儀可申上候、已下略ス、

文化元子十月

(顯姓久齋) 信濃

(赤松則決) 市正

一五八一

一 若殿様御元服被仰付候間、今月四日御登城、(齊宣) 太守

様へも御礼可被仰上旨、御奉書到来、御登城、太

守様ニハ大廊下御休息所へ^①御通、若殿様ニ者大広

間四之間へ被遊御扣、無程△ 公方様御書院へ出御、

於 御前、御一字御拝領、從四位下侍從被仰出、御

盃御看御頂戴、御道具御拝領、御懇ノ被為蒙 上意、

御名豊後守様ニ、御実名 齊興公ト御改被成、太守

様へモ御礼被仰上、諸事御先格之通被為濟、西丸へモ

御上リ、御兩殿様共御礼無御滞被為濟候段、御到来

(之脱カ) 旨被仰渡、

文化元子十月

(顯姓久齋) 信濃

一五八一

一 近来御勝手向趣^①不如意之上、御物入等ノ儀打統、至テ

御難波ノ御時節、又ハ来年琉球人参府ニ付テハ御手当

難被行届、御頼置之趣有之、先月四日 (齊宣) 太守様為御名

代御一類様被為召、若殿様御登城被遊候処、御金

一万両・御米一万石御拝借被仰付旨、御用番青山下野

守様ヨリ被仰渡候段申来候、依之、御一門方並諸大身

分其外月次御礼罷出候面々、明後^①四ツ時登城、

御三殿様へ御祝儀、於席々相謁可被申上候、

文化二丑

一五八三

一去閏十二月廿一日、(齊宣) 虎壽丸様御髮置御祝首尾好被為

濟候段御到来、依之、御役人限明^①廿八日御祝儀、謁

御家老、

安永五申五月

(喜入久福) 主馬

一五八四

一先月十五日、(齊意) 虎壽丸様御着袴御祝首尾能被為濟候段
御到来ニ付、月次御礼罷出候面々、来ル廿八日 御兩
殿①様へ御祝儀被仰渡、

安永六酉十二月廿五日

(島津久金)
左中

一五八五

一先月十五日、(重孝文) 於厚様御髮置御祝首尾能被為濟候段御
到来候間、今月末御使①使、御当人様へ計、兼テ御祝
儀被申上来候面々、御祝儀被申上候様御通達、

安永六酉十二月廿五日

一五八六

一先月十五日、(重孝文) 敬姫様御齒黒初御祝被為濟候段御到来
候付、月次御礼罷出候面々、明廿五日御祝儀申上候様
被仰渡、

天明二寅十二月廿四日

一五八七

一先月五日、御領地 御判物御先格之通 御頂戴被遊候
段御到来ニ付、御当地之諸寺院着座有之分、来ル廿一
日九ツ時登 城、謁御家老、御祝儀可被申上候、其外
ノ寺社家ハ寺社奉行宅へ相越、御祝儀可申上候、

一諸郷寺院着座之門首ハ来ル廿一日ヨリ先キ罷越、御精
進日間登 城、謁御家老、御祝儀可被申上候、其外ノ
寺社家ハ寺社奉行宅へ相越、御祝儀可申上候、
一在番其外琉球人、同日九ツ時登 城、謁御家老、御祝
儀可申上候、

右之通、 御兩殿様へ御祝儀可被申上旨、向々へ可致
通達候、

天明八年申四月

(斐列実祐)
大炊

一五八八

一先月五日、御領地 御判物御先格之通御頂戴被遊候段
御到来候、依之、御一門方並諸大身分其外月次御礼罷
出候面々、来ル廿一日四ツ時登 城、於席々謁御家老、

御祝儀、

一 諸士・諸与与力、同日同断、

一 移地頭・諸土地頭代・抑且諸郷迄モ例之通、

天明八年申四月

大炊

一五八九

一 太守様、先月廿八日 御前髪被遊御取候旨御到来候、

依之、来月朔日四ツ時、月次御礼罷出候面々、於 御

本丸 太守様 隅州様へ御祝儀可申上候、

但、江戸へ兼テ御祝儀被申上候面々ハ、有来通来月

初御使便、御祝儀可被申上候、

右之通、表方へ致通達、御側方・御隠居御方・御勝手

方へ写ヲ以可相達候、

十月廿八日

函書
取次
堀堀右衛門

一五九〇

一 御前様御誕生日十一月三日ニテ候処、御差支ノ御日柄

二 付、御祝ハ已来翌四日被為在候旨申来候、此旨可承
向々(脱カ)可申渡候、

寛政十年午十二月

兼刈盛邑
大炊

一五九一

寛政七年卯

一 先年於御当地御出生之 御男子様、当卯御七歳御成、

虎壽丸様ト奉称、追々御丈夫被為成候付、此度 御前

様御養御嫡子御届被仰上候、右ニ付テハ無程可被遊

御出府ノ処、未御幼年ノ御事、長途ノ御旅行難被成、

暫ク御国元へ可被為入旨、御用番様へ被仰出候処、被

成御承知候段被仰渡候旨御到来候、依之、御一門方並

諸大身分其外月次御礼罷出候面々、来ル十九日四ツ時

登城、御三殿様へ御祝儀、於席々謁御家老可被申

上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀被申上来候面々、当日又ハ御

精進日間御祝儀被申上、御中途並江戸へハ今日御使

便有来通被申上、御女中方ノ儀一モ同断可被申上候、

一 諸士並諸与与力、右同日四ツ時登 城、謁御家老、御祝儀可申上候、

一 移地頭並諸所地頭代・抑ノ儀、不差支時節罷越、謁御

家老御祝儀可申上候、御当地之在合候分ハ右同日登 城、

同断可申上候、

一 諸郷ノ儀ハ、郷土年寄・与頭一人ツ、来ル十九日ヨ

リ先罷越、御精進日間御祝儀申上、御帳ニ相付可致退

出候、

右之通、 御三殿様へ御祝儀可被申上候、此旨表方へ

致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

寛政七年卯五月 (川上久致) 久馬

一五九二

一 若殿様(虎寿丸、齊興)へ松平出羽守様御息女富姫様御縁与、御願之通

被仰渡候、依之、御一門方並諸大身分其外月次御礼罷

出候面々、明後廿五日四ツ時登 城、 御三殿様へ御

祝儀、謁御家老可被申上候、諸士並諸与与力ノ儀モ同

断御祝儀可申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀被申上來候面々、当日又ハ御精進日間御祝儀被申上、江戸へハ有来通、此節御使

便御祝儀被申上、御女中方ノ儀モ同断可被申上候、

右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

寛政七卯六月廿三日 (伊勢貞矩) 播磨

一五九三

一 先月廿二日、御老中様御連名ノ以 御奉書、 太守様

東叡山火之御番被仰渡候段御到来候、此旨御一門方並

御役人限可致通達候、

但、御祝儀ノ沙汰ニ不及候、

寛政六年寅五月 (兼刈盛臣) 大炊

一五九四(のし)

一 中将様、御国元温泉 御入湯御暇御願書被差出置候段

ハ先達テ申渡有之候処ニ、先月十七日 太守様御登

城被成候様、前日御老中様御連名之御奉書御到来、御

登 城被遊候処、御白書院御縁頼鯉之御杉戸涯ニテ御

老中様方・本多弾正大弼様御列座、中將様御国元へ
ノ御暇御願之通被 仰出、御拝領物被仰付候旨、御用
番松平伊豆守様ヨリ御演達有之候段御到来候、依之、
御一門方其外月次御礼罷出候面々、明後、
(以下文)

(一五九四の?)

一 太守様先月廿一日 御前髪被為執候旨御到来候、依之、
(齊宣)
御一門方並諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明十五
日四ツ時登 城、御両殿様へ御祝儀、於席々謁可被
申上候、

但、大奥・築地御屋敷へ兼テ御祝儀被申上來候面々、
当日又ハ御精進日間御祝詞被申上、江戸へモ有来通、
此節御使便御祝詞被申上、御女中方ノ儀モ同断可被
申上候、
右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、
天明八申二月十四日
(舊入久福)
安房

一五九五

天明七未七月

(重兼男臣厚)
一 雄五郎様、御三男ノ御届被為濟候付、御一門・諸大身
分已下、御当地諸寺院、在番琉球人並諸士・諸与与力
迄、御祝儀被仰渡、
(市田教国)
勘解由

七月

公辺御使者

一五九六

一 敵有院様、延宝八年五月八日薨御之御訃音、
(家綱)
様御下向ノ節、於下之関同廿五日被聞召上、則御家老
島津甲斐久武御使者被仰付、六月八日於江戸御悔相勤
相濟_申候、
一 敵有院様御中院_(徳)之御法事ニ付、六月十九日江戸詰御家
老肝付主殿久兼御使者被仰付、御香奠銀五百枚御献上
有之候事、

一 同年七月十日、綱吉公二之丸ヨリ御本丸ニ御移徙ニ
付、同十一日御祝儀ノ御使者被差上、塩鶴一箱・昆布

一箱・御樽三荷御進上有之、御大名様方御同前ニ二ノ
九ニ相納候事、

但、右御使者名相知不申候、

一同廿二日、綱吉公御代替御祝儀、御名代御使者肝
付半三郎兼柄ヲ以、御太刀一腰長光、代金十五枚・御馬一疋代金十兩
献上有之候事、

一同年八月二十三日、將軍宣下ニ付、閏八月十三日島

津大学忠守ヲ以御太刀献上有之候事、

右ノ通、御記録ノ内へ有之候故、書付差上申候、

正徳二年辰十月廿六日

御記録所

川上平右衛門

(空白)

文右衛門

肥後仁右衛門

田中五右衛門

一五九七

一御男子様御誕生、四五ヶ月過御色直更産、直衣、同頃御箸初、

八九ヶ月過御髪置、御五才御着袴、御十二ノ頃御中刺

御鑑初、御十三ノ頃初テ之、御目見、其後御元服・御

官位、御十五ノ頃御前髪取、

一御女子様御誕生、四五ヶ月ノ頃御色直、同頃御箸初、

八九ヶ月ノ頃御髪置、御七才ノ頃御紐解更紐、帶、御十三

四ノ頃御齒黒初・御袖留、

一五九八

齊宣公御祝規

一安永四年閏十二月廿一日、御髪置

一同六年(西)申十一月十五日、御着袴

一天明四年辰九月廿七日、御家御伝来ノ御元服ノ御式

一同年十二月九日、御鑑御召初

一同六年七月廿八日、初テノ御目見

一同年十二月七日、公義御元服、從四位下侍從、御一

字拝領

御祝規

一同七年未正月廿九日、御家督御給

享保六年丑三月

一同年二月十九日、御袖留

一同年三月十八日、少将御任官

一六〇一

一同八年申三月五日、御領地御判物御頂戴

丑六月九日

一寛政元酉四月廿一日、御初入部ニ付御暇御給、同廿八

一太守様御隠居、(吉慶) 隅州様御家督、御願之通被仰渡候段

日江戸御発駕ニテ、閏六月朔日御着城

▽(吉慶) 被仰渡△、

一同二年十一月廿七日、従四位上左近衛中将御任官

享保六年丑六月廿四日

御願事御届事

一六〇二

一隅州様、御国元へ御湯治御暇、旧臘廿八日御願之通御

給ノ段、御到来ノ旨被仰渡、

一五九九

寛延二巳正月

一松平民部大輔様御息女様、(毛利吉元) 隅州様へ御縁与御願濟、(継尊)

正徳五未六月廿六日

一六〇三

一隅州様御暇、来夏迄御申次ノ御願被仰上候処、御願之

通被仰出候段御到来、

一六〇〇

一於糸様御事、(吉慶) 太守様御養妹之御願相濟、(兼女力) 於喜代様

寛延三年六月

ト御名御改ノ旨、被仰渡、

一六〇四

一隅州様御暇、来夏迄御申次御願相濟、
(継豊)

寛延四未五月

明和七寅四月十九日

(一六〇七の?)

一右同断ニ付、今月十一日御願之通被仰渡候段、被仰渡、

明和七寅五月廿八日

一六〇五

一於村様、御前様御立被成候儀、御伺被仰上候処、御
(重年継室)

伺之通被仰渡、^①候段被仰渡、

寛延二巳十二月廿八日

(一五〇七号文書に同じ)

一六〇八

一島津備中殿息女於クン殿、今度 太守様御手前ニ被成
(吉貴男黄巻)

御介抱、追テ相応之御縁与御願可被成旨、御用番様へ

御届相濟、御内々ハ 太守様御妹分被成候間、於クン

殿ト相唱、書付等ニモ此殿文字可相用旨被仰渡、

宝曆九卯三月四日

但、島津淡路守殿へ御縁与、卯四月廿六日被仰渡、
(久柄)

一六〇六

一隅州様、来々巳年迄三ヶ年程御暇御申重御願相濟候段、
(継豊)

被仰渡、

宝曆九卯四月廿七日

一六〇九

一太守様御事、刑部卿様御息女保姫様へ御縁与御願御内
(重巻)

意書、先月十九日御用番様へ被差出候由被仰渡、

宝曆九卯九月十一日

一六〇七(の1)

一於綾様御事、太守様御再縁之御願書、三月廿七日御
(甘露寺親長女) (重巻)

用番様へ被差出候由被仰渡、

一六一〇

一 於采様、来春伊勢御参宮、大坂へシハラク御休息、其

御松平(定喬)隱岐守様 御対顔ノ儀、御伺之通先月廿日被仰

渡候段、被仰渡、

宝曆九卯十二月十九日

御聞置被成候段被仰渡、

安永三年七月十一日

一六一三

一 虎壽丸様、御嫡子御届被為濟、 敬姫様 於篤様ニハ

御姉様ノ御取持被 仰出候条、人々其通承知仕候様被

仰渡、

安永三年七月

一六一一

一 太守様御事、御癩氣其上痔疾之御痛所被遊御座、向暑

氣長途之御旅行難被遊候付、暫ク被遊御保養、御快被

遊御成候ハ、早速可被遊 御発駕旨、先月廿一日御用

番様へ御届被 仰出候旨被仰渡、

明和六丑六月十八日

一六一四

一 虎壽丸様へ佐竹右京大夫様御息女於梅様御縁与御願書、

先月廿八日御用番様へ被差出候旨、御到来ノ段被仰渡、

安永三年七月廿三日

但、七月廿八日御願通被仰渡、

一六一二

一 虎壽丸様、当午御七才御成、御丈夫被為成候間、御嫡

子ノ御届被 仰上候、然処 慈照院様御実子無之、御

養子被成度由、御存生ノ内御約束被成候付、一橋へモ

御内談ノ上、五月廿九日、御用番様へ被 仰出候処、

一六一五

一 敬姫様御事、奥平九八郎様へ御縁与御願書、先月十八

日御用番様へ被差出候段、御到来ノ旨被仰渡、

安永五申十二月廿七日

一六一六

一虎壽丸様へ有馬上総介様御息女於恒様御縁与御願、右

同断、

但、先達テ佐竹様御縁女様於梅様申三月廿八日御卒

去ニ付、御再縁ノ御願ニテ候事、

一六一七

一太守様、近年御持病暑氣御障、暖氣ノ節御道中被遊御

難儀ニ付、御全快迄ノ内、已来三月中^⑧御暇、二月中

△御参府被遊度旨、御願之通先月十一日被 仰出候段、

御到来有之候段被仰渡、

安永九子九月

一六一八(の1)

一富之進様御事、御二男様ト御届被為濟候段、被仰渡、

天明六年六月廿六日

但、当十二歳ノ御届、三月廿八日被 仰出、

(一六一八の2)

一富之進様、奥平大膳大夫様御躰養子之御願、去ル二日

被差上、 已下略、

天明六年八月廿七日

一六一九

一富之進様御事、奥平大膳大夫様御願置之通、御躰養子

被仰付、御遺領無御相違被下置候旨、先月廿日被仰渡

候段御到来、

天明六年十月

一六二〇

一公方様御中陰中、御三家様・松平加賀守様御機嫌為御

伺御登 城之節ハ、松平越前守様御方へハ御先格モ有

之、御同姓伊予守様御在府付、御登 城御機嫌御伺被

成度旨、及御届候由被遊 御承知、御同席ノ御事ニモ

候間、右御同様、其節ハ御登 城御機嫌御伺被遊度旨、

御伺書御用番松平周防守様(松井廣福、老中)へ被差出候処、御留守居御

呼出ニテ、可為何之通旨、御付札ヲ以被仰渡候段、申
来候旨被仰渡、

天明六年十月

一六二二

一 太守様御隠居、侍從様御家督御願書、先月十八日御

用番牧野越中守様(貞長、老中)へ被差出候処、御受取被置候段、御

到来ノ旨被仰渡、

天明七未二月十七日

但、御願通被仰渡、御請等ノ儀ハ御礼席ノ場ニ有之、

一六二三

一 中将様、御願之通 御隠居被 仰出候付、上総介様ト

御改名被遊度旨、從 太守様(齊意)、御窺書御用番様へ被差

出置候処、御伺之通被仰渡旨被仰渡、

天明七未三月七日

一六二三

一 中将様、御隠居後御持病御勝不被遊候付、御国元へ御

相応之温泉有之候間、御入湯被遊、且御仕置等ノ儀モ

為御介助、一ヶ年程モ御暇御願被遊候、左候ハ、当

三月中御氣分次第 御発駕被遊度旨、從 太守様先月(齊意)

十八日御願書御用番様へ被差出候処、被成御請取候由

申来候段被仰渡、

天明七未三月八日

但、願(御願)之通被仰渡候儀ハ、御恐悦ノ場ニ有之、

一六二四

一 明姫様御事、今般 中将様御養女ノ御届被為濟、太

守様御養妹之御統被為入候処、公辺へノ御書付等ハ、

元文中御養弟・御養妹(女)之御願不相成趣ノ被仰渡モ

有之、此度御縁与御願書モ御妹ノ認方被仰付候付、已

来 公辺ハ勿論、表向ハ右之振合相心得、御内輪ノ儀

ハヤハリ御養妹之 御名目ニテ、諸書付等モ其通相認、

中将様ヨリハ 公辺表向共 御養女之御認振ニテ御差

障無之候間、此旨可承向々へモ可申渡候、

天明七未十二月

(兼列東祐)
大炊

一六二五

一 太守様へ佐竹右京大夫様御妹幸姫様御縁与御願書、先

月廿五日御用番様へ被差出候段御到来、

寛政二戌九月

但、御縁与御願通被仰渡候付、御名ノ文字並唱遠慮

可仕旨、戌十月廿五日被仰渡、

一六二六

一 時之丞様、御四男ノ御届被為濟候旨被仰渡、

寛政二戌十一月廿二日

一六二七

一 為次郎様御五男ノ御届被為濟候旨、御到来ノ段被仰渡、

寛政三亥五月

但、戌十二月廿一日御誕生、

一六二八

一 太守様御儀、薩摩守様ト御改名被遊度旨、御伺書被

差出候処、先月十三日御伺之通被仰渡候段申来候、此

旨可奉承知候、

右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ相達、諸郷・

私領へモ可申渡候、

文化元子十月

(願姓久壽)
信濃

但、右ニ付、御一門ヨリ御役人限御祝儀、

一六二九

一 中山王尚成、先達テ夭亡ニ付、具志頭王子尚瀬へ王跡

相統被仰付候、右ニ付、江戸へ御礼ノ使者、来々寅年

御参勤ノ節被召列度旨、先月十九日御用番戸田采女正

様へ御伺書被差出候処、同廿一日、御願之通来ル寅年

御参勤ノ節被召列候様被仰渡候段申来候、此旨向々へ

可申渡候、

但、尚成繼目御礼ノ使者、寅年被召列候様被仰渡置

候へトモ、夭亡ニ付、右使者不被差登候段、被為及

御届候、

文化元子八月

(赤松別統)
市正

寛政八辰四月

(山田有儀)
伯耆

一六三〇

(重兼男)
一乘之助様、御六男之御届被為濟候段被仰渡、

寛政八辰十二月

一六三三

(重兼)
一中将様御儀、御惣髪、柴翁様卜御改名被遊度旨、

御願書被差出候処、先月十四日御願通被為濟候、左候
テ、已来 御隠居様卜可奉称旨被 仰出候段申来候、

此旨奉承知、柴ノ字並同唱ノ文字可致遠慮候、

右ノ通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ相達、諸

郷・私領へ可申渡候、

寛政十二年申十二月

(川上久致)
久馬

一六三一

(斎藤)
一若殿様御出府御伺書、旧臘廿五日御用番様へ被差出候

処、同廿八日御伺ノ通被仰渡候段申来候、此旨奉承知

居候様、可承向々へ可申渡候、

寛政九巳正月

(兼刈隆宣)
大炊

一六三四

一中将様御儀、御惣髪 御改名、御願之通被為濟候付、

御一門方其外月次御礼罷出候面々、来ル十五日四ツ時

登 城、於席々相謁 御三殿様へ恐悦可被申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀等被申上来候面々、当日又ハ

御精進日間恐悦可被申上候、御女中方へモ同断、尤、

江戸へモ此節御使便、有来通可被申上候、

一六三二

(重兼)
一中将様御事、高輪御屋敷へ御引移被遊候付テハ、何ソ

ニ付 上使御給ノ節ハ、上御屋敷ニテ御請可被遊旨、

御用番様へ御届被仰出置候旨申来候、此旨可承御役々

へ可申渡候、

右之通、表方・奥掛・御勝手方へ通達、

申十二月

久馬

一六三五

一御隠居様年中御献上物御勤向等 (重孝) 大御隠居様御同様被

遊度旨、太守様ヨリノ御伺書御用番 (御様) へ被差出候処、

御伺通被仰渡候段申来候、此旨可承向々へ可申渡候、

文化六巳七月

(島津久兼)
登

一六三六

一此節、御隠居 御家督御願之通被 仰出候付、御 (齊)

隠居様御儀、修理大夫様ト御改名被遊度、從 (齊興) 太守様

御伺書御用番様へ被差出候処、御伺之通被仰渡候段御

到来候、此旨可奉承知候、

右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ相達、諸郷・

私領へモ可申渡候、

文化六巳七月

(島津久兼)
將監
(島津久兼)
登

一六三七

天和三年亥五月、平山勘兵衛日帳ノ内

一五月七日未明、(細田正俊) 筑前様・(台田忠實) 山城守様・(阿部正武) 豊後守様・(天久保忠) 加賀守

様・(酒井靱負佐忠盛) 靱負祐様へ御使者相勤候、此段高輪へ申上候写、

中将様ヨリ御口上、(綱貫) 同氏薩摩守在所へノ御暇例年ノ通

被成下候様ニ奉願候、御月番故加賀守様へ此旨申達置

候、可然様ニ頼存候、筑前守様御取次植松縫殿、御返

事御相応、但、御口上、御老中方へ申上候付、右之通

被仰候也、

相 (空白) 阿部豊後守様御逢被成、御返事御相応、戸田山城

守様御取次福井源藏、御返事御相応、大久保加賀守様

へ御口上、先日同氏薩摩守、在所へノ御暇奉願ノ旨頼

存候処ニ、筑前守様・御老中方へ御同前ニ可申達旨、

昨日酒井靱負祐方へ被仰聞、其上以使者申入候節モ被

仰聞候通致承達、入御念儀共忝存候、如御差図、今朝

何レモ様へ申達候、右為御礼以使者申候、御返事吉野

傳右衛門ニテ、被入御念、御使者△忝存候、被仰下候

通、昨日靱負祐殿へ申談候通、又候哉御使者ノ節、申

進候儀被聞召置、何レモへ今朝被仰進候由、得其意候、

薩摩守様御暇、定テ追付可被進ト存候由被仰候、酒井

靱負祐様へ御口上、大久保加賀守様へ同氏薩摩守在所

へノ御暇奉願候通、堀田筑前守様・御老中方へ申入、

可然旨加賀守様ヨリ御自分様迄被仰候付テ、家来被召

寄被仰下候趣、被入御念忝存候、今朝何レモ様へ申進

候、左様ニ御心得可被成候、為御礼以使者申入候、取

次加藤伊左衛門、御返事御相応、

右折、主殿殿へ以手紙右之通申上候、

御雁御拝領

一六三八

貞享三年寅十一月、平山勘兵衛日帳

一十一月十八日、下乗辺へ星野小兵衛・久野正右衛門・

入江市左衛門・日高伴右衛門其外御道具之者辻々ニ被

付置候処ニ、為上使藤掛采女殿御出被成候由、被付置

候者共ヨリ申上候、其上村山栄元長(空白、マ)其外ヨリ書付参

候、弥七ツ過采女殿御出、御門外へ私罷出候、御門中

程ニ御用人兩人被罷出、御拝領ノ雁被受取、藏人殿板

之間ヨリ可為受取御披露、御兩殿様薄縁ノ上迄被成

御座御礼、左候テ、御書院へ御通、御料理御出被成候

得共不参、御茶迄被召上候、左候テ則御立、御門番所

へ物頭右兩人・御道具ノ者其外例之通、御老中(空白)へ

御出、御老中・御用人衆兩人・留守居、ノシメ・半袴

着用、其外物頭衆・乗馬衆、フクサ物着用、為御礼

薩州様御登城、御老中御三人・牧野備後守様、其外

若年寄衆、十兵衛殿御供被相動候、松平伊賀守様・喜

多見若狭守様・御側衆御三人御出、御先番川上善太夫・

私儀、山城守様・加賀守様へ御供相動候、御城其外

十兵衛殿被相動候、

一六三九

天和三年亥三月、右同ノ内

一三月廿九日、於上御屋敷御拝領ノ雁御披、御客人松平

佐兵衛督様・同近江守様・織田内記様・同因幡守様・

松平隠岐守様・松平駿河守様・松平遠江守様・酒井右

京様・同数馬様、其外三十人余有之、御乱舞有之、太

夫保生九郎参候事、高砂・ハセヲ・猩々三番有之、後

ニ御望之乱舞、龍田・湯谷・海人、七ツ半過 薩州様

御帰館、

一御客人、佐兵衛督様御父子・織田様御父子・隠岐守様・

駿河守様・遠江守様・酒井右京様御父子・杉浦内蔵殿

迄、御老中・御用人・御留守居可罷出候、勘兵衛儀モ

御玄喚ニ罷出、御案内可申候、其外ハ御番衆間可相勤

旨、桂李之助殿(志保)ニテ承候事、

一御家老衆御兩人・御用人衆・御留守居・十兵衛・勘兵

衛、ノシメ・半袴着用、物頭衆・物奉行・役者・見廻、

フクサ物ニテ有之、奏者番衆一人モ不①被参候事、

一御用人衆・留守居同御料理被下候付、同座ニテ御座候

付、勘兵衛同断、

御着御拝領

一六四〇(の1)

一御拝領ノ御着、来ル廿八日御披御祝ニ付、御次第書等

別紙之通候条、此旨向々へ可申渡候、

申正月

(島津久備
安房)

(一六四〇の2)

文化九年申

御拝領之御着御披之御手当

一御床並御棚飾等、御数寄屋頭受持、

一御縁頬詰之面々、例之通、

一御一門方・諸大身分並直触已上之御役々、着服熨斗目・

半袴、

但、御書院へ 御出座之節、最初御配膳ノ御小姓

長袴、

一御城内勤之御役人、着服麻袴、

一御着頂戴之面々、為御礼当日於席々謁有之、

以上、

御拝領之御着御披之御次第

一 御書院御上段へ 御出座、御熨目御半袴、御先立、

但、御刻限四ツ半時、

一 御拝領之 御着 御皿ニ盛、御八寸ニ請之、

右、御頂戴、

一 島津山城殿・島津兵庫殿・島津長門殿・島津又八郎殿・

島津玄蕃殿

右、御相伴、畢テ被退座、

一 御着御三方ニ盛、御前へ差上之、

一 島津左衛門・島津首令・島津図書・島津筑後、^②御家

老・若年寄・大目付、^①

^②右、御着△御手自銘々被下之、畢テ御着下之、

一 御着二通同断、御上段御闕ヨリ下へ六疊目、左右ニ置

之、

大番頭・寺社奉行・御勘定奉行・御小姓与番頭・当番

頭・詰衆・無役・家督・大身分

右二人ツ、罷出、御着頂戴、御家老勉之、畢テ御着同

七疊目ニ同断置之、

御側御用人・御用人・町奉行・御側役・家督・寄合並・

御留守居已下御右筆頭迄

右同断、順々頂戴相濟、御着下之、

畢テ、

一 御吸物

島津山城殿・島津兵庫殿・島津長門殿・島津又八郎殿・

島津玄蕃殿

右、再出座、御相伴、

一 御盃 但、五通り、

一 御押

一 御盃被召上候節、小ウタヒ謡之、御着山城殿被差上之、

御加有テ其御盃御上段御闕涯ヨリニ疊目ニ置之、三疊

目ヨリ山城殿頂戴、御着被下之、又一通りノ御着被召

上、御着兵庫殿被差上之、御加有テ其御盃同断兵庫殿

頂戴、御着被下、長門殿・又八郎殿・玄蕃殿ニモ同断

頂戴有之候テ、右五通之 御盃同五疊目ニ置之、

一 島津左衛門・島津首令・島津図書・島津筑後、御家老・

若年寄・大目付

右順々御通りニテ於六疊目頂戴之、畢テ其御盃同七疊目ニ置之、

一大番頭・寺社奉行・御勘定奉行・御小姓与番頭・当番頭・詰衆・家督・大身分

右同断、順々八疊目ニテ頂戴之、畢テ其御盃同八疊目ニ置之、

一御側御用人・御用人・町奉行・御側役・家督・寄合並・御留守居以下御祐筆頭迄

右同断、九疊目ニテ頂戴之、畢テ末席ヨリ御盃持下ル、右畢テ 御入、

一於御座之間、掛之御家老へ御盃被下之、

一掛ノ御用人・御側役・御納戸奉行へ、御吸物・御酒於奥被下之、奥向ノ面々へモ取肴・御酒被下之、

以上、

一六四一

天和三年亥三月廿九日、平山勘兵衛日帳ノ内

一於上御屋敷御拜領ノ雁御披、御客人松平左兵衛督様・

同近江守様・織田内記様・同因幡守様・松平隠岐守様・松平駿河守様・松平遠江守様・酒井右京様・同数馬様、

其外三十人余有之、

一^御乱舞有之、太夫保生九郎參候事、高砂・ハセヲ・猩々

三番有之、後ニ御望ノ乱舞、龍田・湯谷・海人、七ツ半過 薩州様御帰館、

一御客人、佐兵衛督様御父子・織田様御父子・隠岐守様・駿河守様・遠江守様・酒井右京様御父子・杉浦内藏殿

迄、御老中・御用人・留守居可罷出候、勘兵衛儀モ御女喚ニ罷出、御案内可申候、其外ハ御番衆間可相勸旨、
(忠保) ⑧ニテ

桂奎之助殿ヨリ承候事、

一御家老衆御兩人・御用人衆・御留守居・十兵衛・勘兵衛、鬨斗目・半袴着用、物頭衆・物奉行・役者・見廻、
フクサ物ニテ有之、奏者番衆一人モ不被參候事、

一御用人衆・留守居同御料理被下候付、同座ニテ御座候

付、勘兵衛同断、

以上、

一六四二

一 御家督初テ就 御帰国為御尋宿次御奉書御着御拝領、
 明後十九日御到来、被遊御頂戴管候、依之、当日諸大
 身分其外月次御礼罷出候面々登 城、 御三殿様へ御
 祝儀、謁御家老可被申上候、 両御隠居様へ御一門方
 ヨリ同断御祝儀^⑧可被申上候、△
 ▽但、江戸へ兼而御祝儀△被申上来候面々ハ、有来通
 御祝儀被申上、御女中方ノ儀モ同断可被申上候、
 右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、
 文化八年末十月十七日 (島津久備) 安房

御馬御拝領

一六四三

貞享三年寅四月、平山勘兵衛日帳之内

一 四月十四日七ツ過、戸田山城守様御使者加藤助太夫^⑨ニ
 リテ 御拜領ノ御馬御牽セ被遣候、則十兵衛殿・私罷出、

挨拶仕候、泡盛・菓子・シメ物等出申候、左候テ、
 中將様^(光久)於御書院御逢被成御口上被聞召候、則御玄喚へ
 御出、御馬栗毛伊瀬知半左衛門被相請取、 中將様御
 手自御手綱御取御頂戴、於御玄喚右御使者へ御礼有之、
 御返事被仰聞候、此已前、山城守様御家来衆へ以手紙、
 今七ツ時御拜領ノ御馬被遣候由被申越候、御厩ヨリモ
 半左衛門方ヨリ頼置人被付置候付申参候、山城守様へ
 御口上、一昨日於 御前拜領仕候御馬、御使者被相添
 御牽セ被成下、見事成御馬ニテ別テ忝仕合奉存候、為
 御礼以使者申達候、私相勤申候、御取次福井源藏、御
 返事御相応、紗綾五卷、山城守様御使者加藤助太夫へ、
 御口上、先刻ハ拜領之御馬御牽セ候付、為御使者御出
 太儀ニ存候、為御礼以使者申入候品迄目錄之通進之候、
 右^⑩ 使者所へ罷出可申達候間、御案内被仰付度旨、源
 藏へ内談仕候処ニ、源藏被申候ハ、助太夫致他出候、
 私承置可申聞セ被申ニ付、御口上申達候処ニ、罷帰次

第具ニ可申聞、拜領物ノ儀ハ何方ヘモ御断可申上旨、

山城守被申付置候間、私前ヨリ御礼ノ儀可然様ニ御家

老中迄可申上候、拜領物受用不仕ノ由被申ニ付、再三

断申候ヘトモ、右之通ニ被申候ニ付、伺其意候、御馬

御拜領被成、則高輪ヘ御帰館、

一六四四

天和三年亥五月、右同

一五月十三日、渋谷周防守殿ヨリ、明日御馬御拜領可有

之候、諏訪部(文カ)又九郎殿ヘ被遣物、御中間ニ被下物、御

馬牽セ候テ被遣候御老中ヨリノ御使者ヘ被遣物等、

御前ニ被伺候処ニ、可然由 仰出之書付一通並未酉ノ

年ノ先例覚書被遣候間、見届、我々了簡ノ通可申上旨、

手紙ニテ承候付、 仰出之御書付ノ通可然奉存候、自

然今些考仕、存寄モ御座候ハ、明日従是可申上旨、致

返答候、被下物ハ御書付左ニ記ス、

一上布二十疋 一匣肴

文九郎殿

一銀五枚

從御老中様御馬被為牽候御使者

一銀一枚

御中間ヘ

右之通可被下由 仰出之書付、川野三太夫ヨリ周防殿

ヘ遣候ヲ此方ヘ被遣候、

一十六日今朝五前、御月番加賀守様ヨリ御使者片桐平左

衛門ニテ御拜領ノ御馬為牽候、薩州様御玄喚迄御差

出、薄縁ニテ御手綱御取御頂被成候、厩別当財部作右

衛門御馬請取、手綱取申候テ差上、右之通御頂ニテ候、

依之、右使者為挨拶可罷出ノ旨、桂柰(忠候)之介殿ヨリ承、

罷出相勤申候事、

伊勢家御礼

一六四五

口上覚

家来伊勢兵部事、代々自分継目之御礼申上、御目見

被仰付候筋目ノ者ニテ御座候、依之、兵部事当年御当地へ召列申候、先例之通、自分継目之御目見被仰付

被下候様ニ奉願候、以上、

(宝永三年カ) 七月

松平蔭摩守 (吉良)

一六四六(の1)

当伊勢兵部親伊勢兵部事、先年継目之御目見之願申上

候節之由緒書、

御代々様へ伊勢兵部 (貞昌) 御目見仕候覚

一 権現様へ度々 御目見仕候、

一 台徳院様上意ニテ 西御丸へ被 召出、御能見物仕、

御料理ヲモ被下候、其節土井大炊頭様・井上主計頭様・

永井信濃守様ヨリ御奉書被成下候、

一 大猷院様へ度々 御目見仕候、

一 御当地へ妻子共数年相詰申儀奇特成儀ト 上意之旨、

御老中様ヨリ兵部へ被仰聞、米五百俵宛拜領仕候、兵

部死去仕迄拜領仕候、

一 大猷院様御鷹之雁拜領仕候、土井大炊頭様御取持ニ

御座候、

一 御暇被下候刻、御小袖・白銀拜領仕候、御馬拜領仕候

儀モ御座候、

一 兵部死去仕候刻、御香奠拜領被仰付候、伊勢兵部殿召

出頂戴候、上意ノ旨、阿部豊後守様被仰聞候、

正月八日

(一六四六の2)

右之通、延宝七年未正月八日、以書付申上、親兵部事、

同年二月十五日自分継目之御礼申上、御太刀・銀馬代・

御時服二献上仕、御目見被 仰付候、支度長袴着仕

候、以上、

七月

(一六四六の3)

一 八月廿七日、御老中 御奉書出ル、

一 同廿八日、於 白御書院 公方様 大納言様へ 御目

見、披露御奏者番、御太刀・銀馬代・御帷二・御熨斗

目一、

右相濟、西之丸へ罷上り、大納言様へ献上之御太刀・

銀馬代相納、御当番之御奏者番へ相納之、④也

(一六四六の4)

右一卷帳之奥ニ、

右ハ御方事、戊八月 公方様 大納言様へ 御目見被

仰付、自分継目之御礼被申上候、

右一卷ノ儀、御書付被下度候旨被相願、達 貴聞候処、

家之規模ニモ罷成事候間、書付渡置候様ニト 御意候

間、後年為見合如此候、以上、

宝永五年子四月六日

島津中務印(久柳)

伊勢兵部殿(眞榮)

御登城御断

一六四七

貞享元年申二月、平山勘兵衛日帳ノ内

一二月十四日、明十五日御登 城為御断、阿部豊後守様(正武、老中)

へ罷出候、御取次中村深右衛門、

二月十五日、今朝御登 城為御断、御城へ罷上り、笠

原長門殿ヲ以、御目付衆中根主税殿へ申上、被聞召置(正和)

候由被仰候、此旨高輪へ申遣候、

一三月二日、明三日御登 城為御断、御月番戸田山城守(忠貞、老)

様へ罷出候、御取次福井源藏、此旨高輪へ申上候、(中)

一三月三日、御城へ御断御使者相勤、御目付衆小倉半左(正伴)

衛門殿へ申上、被聞召届、後刻御老中方へ可被仰上ノ

由承候、此旨高輪へ申上候、

一六四八(の1)

天和三年亥四月、同人日帳之内

一中将様ヨリ加賀守殿へ御伺ノ御使者、今朝相勤候、委

細左ニ記、

覚

今朝大久保加賀守様へ御使者相勤候、御口上、月次出

仕之儀、持病之筋痛行步難成故、勤罷成間敷候、依之、

御断ノ儀、時々御月御老中へ申上、両御城御目付衆へ(番脱力)

モ御断可申上候哉、為差知病氣ニ御座候へハ、御月番迄御断申上可相濟哉、御差図之通可仕由、右御返事、入御念候御口上、具ニ致承達候、月次ノ御出仕、御持病ノ筋痛申候故、御行步御不自由ニ付テ、御勤難被成候由、御断ノ儀、已下キレ、

(二六四八の2)

覚

一今度御在府中、例月ノ御出仕難御成御座候ハ、其段大久保加賀守殿へ、キレ、御差図次第、御城並御月番之御老中へ御使者相勤候様ニ留守居へ^{①可}申付候哉奉伺候、以上、

四月廿七日

肝付主殿^(久兼)

(二六四八の3)

朱書ニテ達 貴聞、弥以右之通可然候間、留守居へ御使者相勤候様ニ可被申付旨、上意之事、

卯月廿七日

御使
平山久馬

(二六四八の4)

右之通、同役中へ被仰渡候、廿八日ノ儀、日光ヨリノ参向、公家御馳走御能被仰付候故、御登 城ニ不及旨、御奉書参候付テ不及御断、

一六四九

天和三年亥五月、右同ノ内

一五月晦日、明朝日御登 城ノ御断為御使者、御月番加賀守様へ罷出候、御口上、明朝日登 城ノ儀、持病之筋痛ノ上、忌中ニ御座候ニ付テ、為御断御使者申入候、^{①以}来月ノ御月番様へモ可申上哉、御差図次第可仕旨伺候処ニ、御取次垂井九右衛門ニテ御返事、入御念候御断委細致承知候、^{①之}来月御月番へノ御断及間敷候、明朝私ヨリ可申達候由被仰候事、

公边御勤向

一六五〇

貞享二年丑十一月、平山勘兵衛日帳之内

十一月廿六日、日光山 正遷宮、去ル廿四日ノ晚相濟

御並之御衆、以御使者、御月番松平日向守様(信之、老中)へ御勤御

座候付、(光久)中將様ノ御使者相勤候、取次山元與七郎御

留守居申上置候、此段高輪へ申上候、

一同十六日、今日本田仲兵衛殿春之御機嫌伺之御使者被

相勤候、(伊勢貞良)十兵衛殿案内、御献上物御箱着一種、御老中

迄被相勤、(牧野成貞、御用心)備後守様其外ハ別御使者如例被遣候、

二月廿八日、増上寺方丈隠居被仰付、去ル廿四日後往

飯沼之弘経寺古岸被 仰出候、依之、御勤有之間敷哉

之旨、フクヤ助左衛門殿ヨリ申来候付テ、同役致相談

候処ニ、御近付ニテ無之候へハ御勤無之旨、相良仁右(備前)

衛門被申候付、此旨芝へ申上候、

三月十四日、今日歳暮之 御内書、十兵衛殿登 城ニ

テ御渡、如例御時服頂戴ニテ候、御請之御使者島津主

計殿被為勉候、御使者へ御時服(律領)之御礼ハ前(御)使者ニ

テ被遣候、

一六五一

天和三年亥三月、右同ノ内

三月三日、御使者被仰付、今日ノ為御祝儀、御老中へ

御使者相勤候、

一六五二

貞享三年寅四月、右同ノ内

一四月五日、今日ノ雷雨ニ付 御機嫌伺ノ儀、芝ヨリ被

仰越候、内々御並御留守居衆へ申談置候者、御勤可有

之時分ハ互ニ知セ可申候(之)由申談置候、今日ノ儀ハ何方

ヨリモ何分不申来候、併御並御留守居衆へ承合、何分

可申上也、御返事則陸奥守様・長門守様御衆へ承合候

へハ、御勤ハ無之由申参候、為御心得聞合手紙両通、

芝へ差上候、

島津家歴代制度卷之二拾七 天和

御内書式

御奉書式

御連署式

女文式

目録式

御招請

入御

御内書

一六五三(の1)

平山勘兵衛日帳ノ内、貞享元子二月廿三日

一歳暮ノ御内書御渡可被成候間、今日四ツ前ニ御家来可

被差出ノ旨、御奉書参候ニ付テ、キレ、五ツ過登

城、於柳間戸田山城守様御出、御内書御渡、御時服

二、内、熨斗目一、フクサ物一ツ拝領之、御奏者番水

野右衛門大夫様御渡、一番松平加賀守様御留守居伴源

兵衛被罷出、二番私罷出候、左候テ、順々四品以上ノ

御国持大名衆十五人ノ御衆被罷出候、御服右同断、

御内書高輪へ持参、主殿殿へ相渡候、右之御請ノ御

使者筑前守様へ被遣候、私へ御時服拝領ノ御礼使御書

山城守様へ被遣候、

一御城ヨリ退出、直ニ山城守様へ御並ノ留守居同道ニテ

御礼ニ参上仕候、

一昨廿二日御奉書御請候、如例、我々同役ヨリ不相勤候、

(一六五三の2)

御内書留

為歳暮ノ祝儀、小袖五重到来懔覚候、委曲堀田筑前守
可述候也、

十二月十六日

家綱

薩摩
中将殿

一六五四(の1)

貞享元年子七月廿三日、右同日帳ノ内

一 イツレモ支度ノシメ・半袴ニテ五ツ過登 城、四ツ過

於柳間豊後守様御出、御内書御渡、御奏者番石川美(兼)

作様ヨリ御手付御時服三拜領、内、単物一ツ、黒色カ

メヤ地、御国持大名衆廿五人、一人ツ、罷出候、一番

加賀守殿衆津田半太夫、二番、私罷出候、段々ノ儀、

去ル二月廿三日歳暮ノ 御内書御渡ノ節同断、

一 右御礼ニ豊後守様御宅へ陸奥守様衆浅江彦五郎殿(致)同

道罷出申上置候、

一 御内書高輪御屋敷へ参上、甲斐殿へ可申上旨、中務殿(島津久義、久馬)

任御下知罷出、甲斐殿拜見、相良主税殿ヲ以 薩州様(長清)

へ被仰上候、

(一六五四の2)

御三人家并加賀・越後・越前へ御内書ノ写

為歳暮ノ佳儀、小袖五被相贈之、歛然候、猶酒井雅楽
頭可述候、謹言、

十二月廿八日 家綱

尾張中納言殿

紀伊中納言殿同前、

(一六五四の3)

為端午ノ嘉儀、帷子単物袷敷五到来、歛入候、委細酒

井雅楽頭可述候、謹言、

五月三日 家綱

水戸宰相殿

甲府・館林同前也、

(一六五四の4)

為重陽ノ嘉祥、小袖二重到来悦覚候、猶酒井雅楽頭可

述候、謹言、

九月七日 御字

越後三位中将殿

(一六五四の5)

為蒲節ノ嘉儀、小袖三重到来歛覚候、委曲酒井雅楽頭

可述候也、

五月三日

御墨印

加賀中將殿

越前少將殿

(一六五四の6)

御内書被相渡候節ノ御奉書、左之通、

〔朱書〕
「御在国ノ節^⑦は朱書ノ通、」

明何日何時、端午 重陽 歳暮ノ御内書可被相渡之候

間、留守居一人 御城へ可参候、以上、

〔朱書〕
〔阿 豊後〕
〔但、御老中様誰様ニテモ御一人御名前ニテ〕

月日正七十一

戸田山城守

阿部豊後守

大久保加賀守

〔朱書〕
「松平大隅守殿」

松平大隅守殿

〔朱書〕
「御留守居中」

⑦ 薩州様より右之儀ニ付御勉無之、△

御奉書

一六五五(の1)

尾張 紀伊 水戸 同前

甲府 館林 同

其許弥無為鷹狩可被有之ト 思召候、然ハ為上使以石

川美作守御菓子御着被遣之候、御詫ノ趣美作守守委細可

為演説候、此由宜有洩達候、恐々謹言、

十二月朔日

水野对馬守殿

成瀬隼人正殿

中山備前守殿

(一六五五の2)

御書致拜見候、公方様益御機嫌能成御座、珍重被
思召ノ由、得其意存候、將又為 上使ノ御札被差越ノ
処、御前へ被 召出、其上時服被下之、御満悦ノ由、
尤ノ御事候、御念入候趣及 台聞候、此旨可有洩達候、
恐々謹言、

十二月三日

室賀下総守殿

(一六五五の3)

御札致拜見候、為歳暮ノ御祝儀、御小袖被献之付テ、
被成下 御内書、殊使ハ綿衣^{の緒}拜領ノ趣相達、忝被存候
由、尤ノ御事候、被入御念ノ通可及上聞候、恐々謹言、
月日 拜領

松平越後守殿

松平加賀守殿

(一六五五の4)

御札令拜見候、公方様御機嫌能成御座、恐悦ノ旨、
得其意候、猶以御様体被承度付テ、被差越使者候、益
御勇健御事候間、可御心易候、随テ御看一種被差上候、
右之趣各相談、遂披露候処、一段ノ御仕合候、恐々謹
言、

月日

松平越前守殿

一六五六

天和三年亥四月、平山勘兵衛日帳ノ内

一四月三日、北郷惣次郎殿ヨリ、先頃ヨリ御奉書ノ儀、

以前ハ拜見書ニテ去年ヨリ御披見書ニ成候、御並ノ衆
承合、書付ヲ以可申上旨、伊勢十兵衛殿・私^(貞以)へ被仰聞
候、依之、先日伊勢十兵衛殿宅ニテ寄合ノ刻承究ノ通、
覚書ノ留、

松平陸奥守様 松平土佐守様

松平長門守様 藤堂和泉守様

松平淡路守様 有馬中務少輔様

先月廿五日、十兵衛所ニテ右御留主居衆其外御城坊主

山田清葛寄合ノ節、御奉書御拜見書ノ儀承合候処、去

冬並テ御披見書ニ御改ノ由、何レモ被申候、公義御

祐筆ヨリモ右ノ旨慥ニ承リ候旨、山田清葛殿被申候、

右之通承届ニ付、書付如此御座候、以上、

伊勢十兵衛

平山勘兵衛

御連署

一六五七(の1)

天和四年子二月、平山勘兵衛日帳ノ内

一上切捨リ

春ノ御機嫌伺ノ御使者芦谷内藏殿、從 (綱寛) 薩州様被差越、

私案内被仰付候ニ付テ、内藏殿へ万端申談候、二月十

三日致案内、御月番豊後守様^⑨、参上、御取次甲斐外記

ニテ御口上被申達、片匏一種箱看同目錄ニテ申上候処

ニ、御逢被成、御直ニ、キレ、可被猷旨被仰聞、

御城へ罷上リ御城、キレ、頭大森永寿ニテ御側衆朽

木和泉守殿へ、キレ、首尾^⑩為相納候、

但、御連署ハ御月番故、豊後守様へ差上置候、御老

中方・堀田筑前守様^(正俊、大老)・牧野備後守様^(成貞、側用人)・若年寄衆御三

人・喜多見若狭守様^(重政、側用人)へ案内、御口上御書内藏^⑪ヨ

リ被差上候、イツレモ首尾好相濟候、御書ノ案文左

ニ記之、

(一六五七の2)

改年ノ御慶賀重疊不可有尽期御座候、先以 公方様益

御勇健被成御座、年始ノ御規式如御嘉例段々首尾好相

濟可申ト恐悦至極奉存候、猶以御機嫌ノ御様体為可奉

伺之差上使者申候、依之御看一種献上ノ仕度候、可然

様御差図所仰御座候、恐惶、

正月三日

大久保加賀守様

阿部豊後守様

戸田山城守様

人々

(一六五七の3)

陽春ノ御吉慶猶更不可有尽期候、先以公方様益御勇健被成御座、年始ノ御規式如御嘉例首尾能相済可申卜奉恐悦候、猶以御機嫌ノ御様体為可奉伺之、御老中迄差上使者①申候、可然様御差込所仰御座候、貴様弥々御堅固可為御越年珍重存候、猶期後喜之時候、恐惶、

正月三日

堀田筑前守様

人々

(一六五七の4)

改年ノ御慶重畳不可有尽期候、先以公方様益御勇健ニ被成御座、年始ノ諸御礼如御佳例首尾能相済可申卜奉恐悦候、猶以御機嫌ノ御様体為可奉伺之、御老中迄差上使者①申候、乍序如此御座候、貴様弥御堅固可為御

越年①ト被珍重存候、猶期永日候、恐惶、

正月三日

堀田筑前守様

牧野備後守様

秋元摂津守様

稲葉石見守様

堀田对馬守様

喜多見若狭守様

人々

一六五八

天和三年亥三月、右同ノ内

一三月十一日

一公方様、正月四日西ノ御丸へ渡御、

一若君様、正月三日御本丸へ入御、

右、御機嫌能還御為御祝儀、從①光久中將様御飛札堀田筑前守様并阿部豊後守様・戸田山城守様①忠昌・大久保加賀守様へ被遣候、私持参可申旨十兵衛殿被申候付テ、致相

談、今日四ツ過罷出候、

一堀田筑前守様御留主御取次木村為右衛門殿、是ハ御老
中方へ飛札ヲ以被仰候ニ付、御状被遣申候也、

一阿部豊後守様御月番、依之、彼御宅へ持参、御留主取
次鷲野太郎左衛門殿へ渡置有之、①申候右御両所ノ御取次ヨ
リ御帰宅ノ節見セ可申旨被申候、請取置ニテ候、此旨
高輪御日帳ニ可被留置由申越候事、

一三月廿四日、御書①啓ノ通從 中将様堀田筑前守様へ被遣
候、取次熊谷太郎左衛門、

一右同一通御連署從 中将様大久保加賀守様・阿部豊後
守様・戸田山城守様へ被遣候、是レハ去ル正月廿四日
公方様増上寺へ御仏詣還御、御機嫌能恐悅被思召上候
由、以飛脚被仰遣候、先月廿二日右飛脚罷立候、豊後
守様御月番故、彼御宅へ持参、取次甲斐外記、

一六五九

右同四月、日帳ノ内

一四月廿五日、昨日戸田山城守様御直ニ被仰候者、先日

御中途ヨリ日光山御法事首尾好相濟、上野へ御参詣、
御機嫌能 還御ノ旨、以御使札被仰越候、入御念儀各
申談及 高聽候、此旨奉書ニテ可被仰候へトモ、最早
御参府被成候ニ付、右之旨、口達ニテ被仰之旨承候、
末略ス、

一六六〇

貞享三年寅二月、右同ノ内

一二月廿二日、旧冬廿一日地震ニ付テ、御老中方へ從
薩州様御連署被遣候、福屋(兼貞)助左衛門殿ヨリ岩松久兵衛
ヲ以被遣候、

一二月廿六日、昨朝御月番加賀守様(大久保忠朝)へ旧臘廿一日地震ニ
付、從 薩州様御連署差上候、御奉書当御屋敷へ大沢
吉太夫御使者ニテ被遣候、取次諏訪銀左衛門①右、則芝へ
差上候、

女文

一六六一

一 女性方へノ文ノ事、内証ノ儀候ニヨリ相極タル書札雖
無之、粗書付候、

一 筆申上参ラセ候、——様イヨク御機ケンヨク
御座ナサレ候ヤ、恐ナカラ御様体ウケタマハリタク存
タテマツリ候、サテハ——シン上イタシ候、此旨
ヨロシク御ヒラウ頼入参ラセ候、カシク、

月日

マツ田

ワカ狭

御ツボネ

人々申玉^{①胎}へ

マツ田ワカ狭ヨリ

上包

御ツボネ

裏メ

是ハ遠所へノ文ナリ、同在所ニテ捻ノ類遣候ニハカナ
ラス日付スヘカラス、尤、名乗ハイツレニテモナク候、

諸目録

一六六二

御経 一部	香奠折紙ハ料紙一枚タルヘシ、 幾色ニテモ以上書ヘカラス、 亡者ノ男女ニヨラス同趣調ヘシ、口伝、 御ノ字向ノ位ニヨルヘシ、式法算妙典 トモ書也、
御香奠白銀十枚	
ウラニ	
名乗官計	

一 右、献上折紙ノ外此方ノ名有ヘカラス、

一 近年ハ名字名^{①ラ}リ押札ニ仕候、押所ハ裏ノ引返シニ仕候、

口伝、

一 折紙ニ付札カキ時ハ台ニ附札イタス、古法ニ無之儀也、

御招請

一六六三

一 宝永二年酉二月十三日、御継目ノ御祝、御老中様御

招請ノ覺

一 御老中 小笠原佐渡守様・稲葉丹後守様・秋元但馬守

様・本多伯耆守様

一 若御年寄 加藤越中守様・井上大和守様・稲垣対馬守

様

一 御奏者番衆

安藤長門守様

朽井山城守様

田村因幡守様

松平宮内少輔様

松平兵庫頭様

松平弾正忠様

一 大御目付 朽井淡路守様

一 御留守居 大久保玄蕃守様

一 御作事奉行 松平安房守様

一 御普請奉行 水野権十郎様

一 日光御奉行 稲葉河内守様

一 大坂町御奉行 大久保大隅守様

一 長崎町御奉行 別所播磨守様

一 伊勢町御奉行 堀隠岐守様

御囃子

高砂 観世太夫

(三郎右衛門
清六郎)

(左吉
又三郎)

東北 寶生太夫

(市郎兵衛
新九郎)

(正兵衛
彦五郎)

祝言 九郎

(助九郎門
長右衛門)

(惣右衛門
彦五郎)

御勝手御取持ノ御衆

松平隠岐守様

酒井靱負佐様

松平越中守様

松平因幡守様

鳥居右近様

酒井縫殿助様

島津淡路守様

小笠原彦太夫様

石野八兵衛様

大岡次右衛門様

小笠原拾右衛門様

島津八郎右衛門様

島津八郎兵衛様

薬師寺宗仙院老

増田寿齊様

永倉珍阿弥老

大嶋栄阿弥老

村山自伯様

佐渡彦六郎様

福田六郎左衛門様

原金右衛門様

平田甚左衛門様

田嶋宗永

野村休清

山田清高

山田清喜

星野道喜

高嶋道伯

鈴木一齊 倉田三碩

中村道務 吉田長傳

村山清林 小谷最筑

御囃子

福田 九郎 (小十郎 長右衛門) (惣右衛門 彦五郎)

芦刈 觀世太夫 (三郎右衛門 清六郎) 正兵衛 (權八郎 又三郎)

祝言 喜内 (助九郎 市郎右衛門)

一同日御出無之御老中様方・若御年寄・御側御用人へ、

以御使者御提重鮮鯛三枚・御茶三箱宛被進之候事、

一酉二月廿二日御客人

松平越前守様 松平隠岐守様

酒井靱負佐様 本多若狭守様

秋田伊豆守様 秋月長門守様

秋田信濃守様 秋月河内守様

酒井縫殿様 本多市左衛門様

天野弥五右衛門様 向井将監様

天野佐左衛門様 秋月式部様

近藤五左衛門様 木下主計様

鳥居織部様 谷主水様

川勝藤右衛門様 蟻川新右衛門様

桑嶋孫六様 小栗主水様

薬師寺宗仙院様 橋隆庵様

井上(空白、傳力)庵様 増田寿徳様

吉田宗三様

一同御勝手御見廻

京極対馬守様 酒井右京亮様

小笠原彦太夫様 小笠原(空白、拾力)右衛門様

丸岡治右衛門様 宮崎甚右衛門様

小笠原頼母様 石野左右衛門様

小野助九郎様 柴崎十郎右衛門様

小野次郎右衛門様 松平彦太夫様

村山自伯様 島津淡路守様

増田寿針様 増田寿春様

村山清林 星野休悦

三谷休甫 鈴木團栄

高橋休齊 星野圓寿

山田清葛

中村道務

御能与

翁 三番三 仁右衛門

高砂 觀世太夫 新次郎

(三郎右衛門
長右衛門)

左吉
彦五郎

田村 三十郎 理兵衛

(兵右衛門
市郎右衛門)

忠次郎

東北 實生太夫 利右衛門

(市郎兵衛
新九郎)

正兵衛

紅葉傳 九郎 源七

(三太郎
權九郎)

(十三郎
忠次郎)

祝言 喜内 理兵衛

(兵右衛門
市郎右衛門)

(傳七
弥吉)

一 同日、御城坊主衆・御玄喚番・狩野絵師被召寄候、

狂言

末広カリ 仁右衛門 スワフ落 傳右衛門

福ノ神 八拾郎

一 二月廿三日御客

織田越前守様 松平因幡守様

織田美濃守様 松平三郎助様

織田齊宮様 京極大膳様

金森左京様 佐野信濃守様

本多市正様 小出主計様

逸見八左衛門様

米津梅干之助様

荒川八郎兵衛様

鳥居数馬様

鳥居權之助様

鳥居主税様

鳥居久太夫様

鳥居大学様

田村主馬様

山村七郎右衛門様

川村新五兵衛様

宮崎源次郎様

三洲縫殿様

杉田八郎左衛門様

本田清兵衛様

桃井主馬様

玉置半助様

須原清庵様

▽^① 井上傳庵様△

一同御勝手御見廻

京極對馬守様

小笠原彦太夫様

石野八兵衛様

山村十郎右衛門様

松平彦太夫様

大岡次右衛門様

三枝右近様

宮崎甚右衛門様

小野次郎右衛門様

小野助九郎様

島津八郎右衛門様

島津八郎兵衛様

竹中通庵^{①老}

御能与

翁 三番三 八拾郎

難波 九郎 権右衛門

(小十郎
権九郎)

(惣右衛門
又五郎)

兼平 喜内 理兵衛

(重次郎
助次郎)

弥吉

芭蕉 金春太夫 彦太郎

(市郎兵衛
清次郎)

又六

羽玉(衣カ) 七太夫 茂右衛門

(三太郎
長右衛門)

(又右衛門
長藏)

乱 寶生大夫 七郎兵衛

(市郎兵衛
清五郎)

(三郎左衛門
又三郎)

アハフ 八右衛門 トネ市 仁右衛門

入間川 弥太郎

一同日、百人組与力同心衆 公義御用達ノ町人被召寄候、

一 三月朔日御客

秋月長門守様 相良志摩守様

織田美濃守様 堀田豊前守様

青木民部様 逸見八左衛門様

大久保弥右衛門様 三浦監物様

神善與七郎様 大原市左衛門様

加藤右近様 桃井内藏之丞様

小栗五太夫様 遠山金右衛門様

山村七郎右衛門様

山村権之丞様

後藤又市郎様

山本縫殿様

小笠原三左衛門様

吉田一庵様

一同御勝手御見廻

金森左京様

三枝右近様

小笠原彦太夫様

石野八兵衛様

小笠原十右衛門様

山村十郎右衛門様

松平彦太夫様

小野次郎右衛門様

志村金五郎様

志村助九郎様

島津淡路守様

島津八郎右衛門様

増田寿徳様

村田常庵様

増田寿針様

増田寿春様

増上寺源寿院

上野端寶院(瑞カ)

鎌倉相承院

三田曹溪寺

芝大圓寺

相休護摩所

九戸カ⑬
一一二

同御能与

翁 三番三

傳右衛門

氷室 金剛太夫 休右衛門 (弥三郎彦次郎)

八嶋 造酒丞 十郎兵衛 (助九郎權兵衛)

井筒 寶生太夫 又七郎 (市郎兵衛清次郎)

船弁慶 八左衛門 新次郎 (小十郎長右衛門)

祝言 五郎太夫 勘左衛門 (孫七正左衛門)

三本柱 八十郎 ハナコ 仁右衛門 (彦次郎權六)

イクヒ 傳右衛門

一 同日、御並組・芝組ノ諸留守居被召寄候、

入御

一六六四

一 宝永六年己丑五月十三日 近衛左大將(家久)様入御ニ付、御

取持ノ次第

一 入御ノ朝、島津帶刀御使ニテ弥被為成被下度旨被仰上

候事、

一 川野喜平次・町田權左衛門・鎌田源右衛門御供、御玄

喚右ノ方石垣櫓所ノ方(形)ヘツクハヒ可申、麻上下着、御腰物持可罷出事、

但、屏子御門外迄 太守様御狩衣御着用被遊、御迎

ニ御差出、御先達テ御輿寄ノ御脇ニ御待請被遊、御

輿戸ヲ被為明、御書院御上段ニ御案内被遊候事、

一 御二献上候、御跡ニテ御進上被遊候、御道具大小 太

守様御持參、御直ニ被進候、山口五太夫右之御道具持

參仕、御座末ニテ可差上候、御道具ハ諸大夫衆ヨリ被

納之候様ニト前以帶刀ヨリ被致内談候事、

一 左大將様、十三日四ツ時芝御屋敷へ被遊入御候、御公

家衆交野宮内卿様(時番)・櫻井少將様(氏教)御出ニテ候、左大將

様入御ノ節ハ白キ御乗物ニ被召、御門ヨリ屏子御門ノ

様被遊入御、借リノ御玄喚出来候、

左大將様ヨリ被進候品々

一 御太刀・金馬代

一 縮緬十卷

一 昆布一箱

一 干鯛一箱

- 右、太守様へ
- 一 綸子十端紅白
- 一 昆布一箱
- 一 千鯛一箱
- 一 御樽一荷
- 右、御前様へ
- 一 御太刀・金馬代
- 一 昆布一箱
- 一 千鯛一箱
- 一 御樽一荷
- 右、又三郎様へ
- 一 綿三十卷
- 一 千鯛一箱
- 右、陽和院様へ
- 一 千鯛一箱
- 右、信證院様へ
- 一 耕作図一卷 櫛笥中将隆成朝臣筆
- 一 御蓑(若カ) 蓑入十ヲ
- 右、太守様へ
- 一 豹香炉(豹カ) 一箱
- 一 御筆一箱
- 右、御前様へ
- 一 御キレ籠(印籠カ)一箱
- 一 音羽焼香作り物一箱
- 右、又三郎様へ
- 一 折枝
- 一 御香ノ具一箱
- 右、陽和院様へ
- 一 歌仙色紙一箱
- 一 御柏扇本ノマ、(袖扇カ)
- 右、信證院様へ
- 一 御硯箱一箱
- 一 御歌書一箱 御自筆
- 右、関白様㊦より太守様△へ
- 一 单帷子二
- 一 銀拾枚

(島津仲休)
帶刀へ

一 単帷子二

一 銀五枚

(種子島伊時)
彈正へ

一 単帷子二

一 銀三枚

(比志島範房)
隼人へ

一 銀三枚ツ、

菱刈新兵衛(新五兵衛カ、重格)、三雲新兵衛(定垣)

衛門 後醍院喜兵衛 森川利右衛門(武宣) 市来次郎左(家賢)

相良李之助 若松彦兵衛(久龜)

一 紗綾五卷

陽成院様御附 尾雲野局(和カ)

一 銀五枚ツ、

表御局 奥御局

一 銀二枚ツ、

又三郎様御附 淺野 沢井

陽和院様御附 梅野 野村 竹野

一 左大将様供奉ニテ被參候諸大夫衆其外ヨリ進上物

一 御太刀・馬代一通ツ、

一 御着一種ツ、

進藤刑部大輔 今大路治部大輔 進藤修理 齊藤左京

一 扇子一箱

高木英淳

一 御太刀・銀馬代

木村隼人佐

右之通、 御兩殿様へ進上、又三郎様御方へハ御着一

種木村隼人佐ヨリ進上也、

一 扇子一箱ツ、

吉野安尉 佐藤織部 松井主殿 吉見靱負 吉村喜内

木村主税(磨カ)

右六人ヨリ進上也、

但、御兩殿様御方へ

交野様・櫻井様ヨリ進上物

一 御太刀・銀馬代

一 干鯛一箱

一 歌書二箱

右、太守様へ進上

一 御太刀・銀馬代

一 千鯛一箱

▽^⑧ 一 布袋一箱△

右、又三郎様へ

左大將様へ此御方ヨリ被進候品

一 御太刀備前行包

一 御脇指来国俊

一 掛物二幅対 鶏ノ絵
瀟景絶筆

一 唐御屏風 鐘馗絵
雪舟筆

右、從 太守様

一 白綾拾端

一 白練拾端

一 箱肴二種

一 御樽代千匹

一 銀 キレ
(釣香炉カ)
香炉

右、從 御前様

一 御太刀・金馬代

一 唐絵巻物

一 唐人形

右、從 又三郎様

一 羽二重拾匹

一 箱肴二種

一 御料紙箱 一 御硯箱 一通

右、從 陽和院様

一 羽二重拾匹

一 箱肴二種

一 唐籠飯

右、從 信證院様

一 銀二拾枚ツ、

諸大夫衆五人へ

一 同拾枚ツ、

木村隼人佐へ

一 金千匹ツ、

御近習九人へ

一 五百匹モ有、三百匹迄ニテ候

茶道衆 医者衆^{⑧師} 御料理衆

一 入御被遊候ニ付、御台様ヨリ上使堀源左衛門様御出、
(正勝)

御拝領物

一 御提重一組

一 鯛一折

一 品川庄五郎様ハ御勝手ニ御詰被成候、
⑦七

一 白木大三方、敷紙御熨斗

大器御皿^{カスノコ} ミカンユベシ 御雑煮^{串柿} 山イモ^{モチクシ} 大ヘキ^鮑

一 御吸モノ 鯛ヒレ

一 御肴 鯛サシミ

一 焼 タイラキ青串

御本膳

酒ヒテ 塩鯛^{同鮑} 唐海月
塩引鮑子^込 クリブシ

御汁 鶴花^{ナス} 初竹^皮 皮午房

小角 香ノモノ^{ナラ} ナラ漬
朝ツケ

糸目 鯛白^{同差} 漬松露^ミ
大カキ

御飯

御二

丸杉箱鉢子 出シ鮑^{赤貝} 岩竹^{ワサヒ} ミン

御汁 鱸^{山カ} 青小升^カ

コノ桶鮓 鯛鮓^{車海月} 老カ^カ

小茶碗 小鴨^{小寶島} 割小升^{山カ}

御三

春寒 丸半^{ヘン} 串子^子 竹ノ子^{セミ} バカリ^{キンナン}

御汁 モツク^{クリ} ハシ^樽 山升^{カサイ} ノリ

中皿 焼交 味噌漬鱒

御四ツ目

指身 鯉ノ子付 カキ鯛 イリ酒 サヨリ

カラシ酢 ワサヒ 糸花貝敷

御五ツ目

大皿 サヌキ小鯛

引テ杉重焼鱒 色付フリ塩

右同焼鳥パン

右同甘鯛一日干

御肴皿デンカク

島台押御熨斗

御吸物 雪タマゴ コヘヒ クコ

御菓子 翁餅

御附後段 砂糖 葛切カラシ

御後菓子 筋水 龍鬚 ビワ

間々御菓子 玉水カン ケビ焼 ユスモチ

覆盆子 マスレカン クスマンヂウ

湯取モチ (麦カ) 青粉 イモノコ

御吸物 ヒラキ鯛 コミル

御吸物 鮫 ミヤウガ

御肴 和麩 梅干 花カツラ

御後段 花アシ 焼ノリ 小チラス
焼味噌 トウカラシ シホカケ

御吸物 藻 ⑨血

御肴 湯引ヒサ 味噌酢

御能与

翁 三番三 千歳 面箱 仁右衛門 嘉六 清助

難波 丹三郎

八嶋 喜内

檜垣 観世太夫

御中入、御本膳上り候、 太守様御本膳御上ケ、 御

湯ノ時分ニ御座下ニテ御コ、ロミ御上ケ、御膳スヘリ

申時御下ケ、

道成寺 寶生太夫

祝言 喜内

狂言

(性カ) 三本松 仁右衛門

(比丘真カ) 比ヲ貝 八右衛門

道成寺ノ間 仁右衛門

八嶋那須間 八拾郎

一入御被遊候為御礼、御旅宿へ同十四日 太守様被遊御

見廻候事、

一左大将様十六日ニ被遊御立、御泊り神名川迄被進物

一御干菓子一箱

一御肴一折

右、從 太守様、御使者諏訪市右衛門、

一砂唐漬

一泡盛

但、甘焼酎、

右、同断山御越三嶋宿伺御機嫌、御使者中村早太、

一葛センヘイ一箱

一千キス一箱

右、同断金谷宿迄御飛脚、

一御干菓子一箱

一粕漬匏一桶

右、御前様湯元ヨリ小田原へ被進候、

但、御前様其時分箱根湯治へ御越被遊候ニ付、御対

面無之候、

一千鱈一箱

櫻井少将様へ

右、表方ヨリ

一氷砂糖一曲

右、御前様湯元ヨリ被進候、

一左大将様御帰路⑨ニ付、京都へ御使者伊地知善兵衛ニテ被進物、御当地廿日ニ出足、

一御太刀・金馬代

一二種一荷

右、太閤様 関白様 左大将様へ被進候、

一二種 キレ 匹ツ、

右 御三人様へ、 御前様 又三郎様ヨリ被進候、

一二種五百匹ツ、

右同、陽和院様 信證院様ヨリ被進候、

島津家歴代制度卷之廿八

天明
貞享

御家督

一六六五

写

一 今度就 御家督、何レモ是迄ノ通相勤、猶又入念候様
被 仰出候条、難有可達承知候、
(奉カ)

天明未三月
(七年)

(島津久保)
豊前

(善入入福)
安房

(養別家祐)
大炊

(川上久益)
頼母

(島津久健)
仲

(二階堂行且)
主計

(宮之原通直)
主膳

一六六六

一 今度就 御家督、何レモ是迄ノ通相勤^②、猶又入念△候
様被 仰出候条、難有可奉承知候、

右之趣、書役・小役人へ支配頭ヨリ申聞候様致通達、

奥掛・御勝手方へハ写ヲ以可相達候、

未三月十五日

(喜入久徳)
安房
(二階堂行具)
主計

一六六七

一今度就 御家督、何レモ是迄ノ通相勤、猶又入念候様

被 仰出候条、難有可奉承知候、

右之通、与力同心其外へ向々支配頭ヨリ可申聞旨、可

申渡候、

未三月十五日

安房
主計

一六六八(の1)

一昨十五日、別紙ノ通被仰渡候間、御用ノ□ニ五日中大

御目付以上御宅へ可致御礼廻旨被仰渡候、尤、病氣・

別勤等ニテ昨日承知相洩候人々、追々種子嶋雲治へ御

届申出、承知有之候上、別条ノ振合ヲ以可致御礼廻旨、

是又右同人ヨリ致承知候間、此段致通達候、以上、

但、書役・小役人等ノ儀ハ奉行頭人へ御礼相廻候筋

可致旨、是又右同人ヨリ致承知候、

三月十六日

御目付

(一六六八の2)

別紙ノ通被仰渡候間、致通達候、以上、

三月

種子嶋雲治

一六六九

一今度就 御家督、何レモ是迄ノ通相勤、猶又入念候様

被 仰出候、一往ノ儀ハ御通達ヲ以被仰渡候間、別紙

写ヲ以差遣シ、右ニ付、奉行頭人ノ儀ハ大御目付以上

御礼廻イタシ、江戸詰ノ大御目付以上へハ書状ヲ以御

礼申上候様、役人・小役人ノ儀ハ奉行頭人へ致御礼廻

候様被仰渡候間、最初役儀被仰付候節、御船奉行ヨリ

直ニ申渡候分ハ同様直ニ仰渡候様申渡筋可然申談、藏

役人・御大工頭・大工主取其外船頭以上ハ於御座直申

渡、我々宅へ御礼廻イタシ候様ニ申渡、小船頭・定水

手ノ儀ハ藏役人ヨリ申渡、是又々銘々御礼廻イタン候

様申渡候間、其元役人其外ノ儀モ右振合ニ可被申渡候、

左候テ、御大工頭・主取大工・藏役人・定船頭以上ノ

儀ハ御自分へ御礼申出、我々方へ銘々書状ヲ以御礼申

遣候様有之、小船頭以下ハ御方へハ銘々直ニ御礼可申

遣候へトモ、我々方へ藏役前ニテ承届取束、書状ニテ

役人ヨリ御礼申遣方ニテ可宜候、勿論、御船頭・脇船

頭・仮脇船頭・御大工頭四役ノ儀ハ、麻袴[㊦]着用ニテ

御受等申遣事御座候間、着服△右通ニテ御礼迄モ申出

候様可被申渡候、此段申遣候、尤、御方儀ハ別紙仰渡

ノ趣ニテハ、御帰宅ノ上種子嶋雲治へ届被申出、屹卜

承知ノ上、御礼廻且江戸へノ御礼等被申遣候可有之候、^(據脱之)

此段申遣候、

但、其元詰書役ノ儀モ仰渡ノ趣被申渡、御礼為申出、

我々方へ銘々書状ヲ以、御礼申遣候様可被申聞候、

此元書役中ニモ宿本振ニテ致御礼廻候、此段申遣候、

未三月二十五日

御船奉行

久見崎詰御船奉行

一六七〇

一寛永十五年戊寅五月十三日 光久公御家督御礼被仰上、

御家中 御目見ノ衆

光久弟島津又八郎^(忠朗)

御家老

島津下野守^(久元)

伊勢兵部少輔^(貞昌)

島津弾正大弼^(久應)

鎌田出雲^(政統)

御用人

頼娃長左衛門尉

喜入休右衛門尉

相良李之助

新納右衛門頭

一六七一

一貞享四年丁卯七月二十六日 綱貴公御登 城、御家

督被 仰出、八月七日 御家督ノ御礼被仰上、

御目見ノ衆

綱貴公一門

島津頼母^(久記)

御家督^(老九)

島津中務(久輝) 島津縫殿(久当)
種子嶋藏人(久時) 肝付主殿(久兼)

御用人

相良主税(長清) 大山主馬(綱通)

野村太左衛門(広實) 鎌田太郎右衛門(政高)

一 光久公御隠居ノ御礼使、河田淡路

但、淡路 御目見無之、

一六七二

宝永元

一 宝永元年甲申十月十九日、吉貴公土屋相模守御宅ニ

テ稻葉丹後守(正通)・秋元但馬守(喬朝)・本多伯耆守(正志)・小笠原佐渡

守(仙石丹波守久尚之)・大目附丹後守御列座ニテ 薩摩守遺領無相違被下

ノ段被仰渡、

一同十一月十二日、吉貴公明十三日四ツ時繼目ノ御礼

可申ノ旨、御老中様五人ヨリ御奉書ニテ被仰渡候、御

切紙ニ、家来九人 御目見可被仰付候間、召列可被罷

出ノ由、是又被仰渡、同十三日四ツ時御登 城被遊、

繼目ノ御礼被仰上、御家中 御目見被仰付候事、

一門島津周防(忠実) 一門島津内匠(久近) 家老島津大藏(久明)

家老島津勘解由(久当) 家老島津帶刀(忠雄) 番頭入来院主馬(重矩)

用人相良権太夫(長規) 用人平田清藏(清右衛門) 用人家村平八(純旨)

吉貴公御献上左之通

一 御太刀一腰

一 文字金十枚料紙

一 御時服五十

一 銀子千枚

右、公方様へ

一 銀子五十枚ツ、

一 縮緬五十卷ツ、

一 箱肴一種ツ、

右、御台様 一位様(家光御室、桂昌院)

一門・家老ヨリ左ノ通

一 御時服三ツ

右、公方様へ

番頭・用人ヨリ左之通

一 御時服五ツ

右、公方様へ

右之通、御献上相済候、尤、御奉行様方へハ自分御礼、

御讓物

一六七三

光久公ヨリ 綱貴公へ御讓国ノ覚

一 貴殿事、家督始テ入国ノ儀、別テ悦入候、先祖代々

家祿別録ノ表令讓渡ノ状如件、

貞享五年八月十二日 中将光久御判

少将殿

一六七四

重物ノ目錄

一系図

一文書五帖

一 卷物数十軸

一 記録百八拾九冊

一 源氏重代膝丸ノ御太刀一腰 (改カ) 紋小十文字光世作

一 頼朝公御太刀一腰 大十文字無銘

一 同五指量愛染明王一体 弘法大師作

一 劍一振 弘法大師作ノ由

一 小和泉甲一頭

一 手鍔一本 城州長吉作

一 一本杉馬印一本

一 太刀一腰 (正カ) 貞利作

一 鷹ノ巢脇指 宗近作

右先祖伝来ノ重宝、此節讓渡候間、被秘藏可相伝子孫

万代無疆候、仍如件、

貞享五年八月十二日

一六七五(の1)

覚

一 御太刀一腰 光世作

源氏御重代膝丸ノ御太刀ニテ候由、從 頼朝公 忠久公へ御拝領被遊、小十文字ト御改候、

一 御鑑一領

忠久公御召ニテ候、御太刀 御鑑ハ先日 御嫡家御代々御相統ノ御什物ニテ、明^(空白、徳カ)四年 元久公へ御使者

ヲ以被仰遣候ハ、御家督御^{⑦相}伝小十文字ノ御太刀 忠

久公ノ御^(空白、徳カ)元久公へ可被成御附属候、元久公固御

辞退被遊候へトモ、御家鎮護ノ御宝物ニテ候間、被成

御受用、国家ヲ御治候儀專要々ト再三依被仰遣候御同

意、撰吉日、川邊兩城ノ間田ノ中ニテ、伊久方ヨリ相

渡候役、御太刀阿蘇谷周防^{⑧頭}・御鑑石塚大和守、此方

ヨリ請取候役、御太刀山田右京亮・御鑑伊地知民部少

輔請取之、納御宝藏、御家珍ト被成、御一族他家ノ御

規式奉^(空白、ママ)元久公ヲ奉 主君ノ御威光増、実相ニ罷

成候、

一 御太刀 大十文字 一腰 無銘

頼朝公ノ御太刀、忠久公御拝領、被号大十文字候、

一 御脇差 丸作 一腰 無銘

頼朝公御守刀、忠久公御拝領被遊候^{⑨御什}物ニテ候、

一 五指量愛染明王一本 弘法大師一刀三拜ノ御作

大師依 嵯峨帝ノ勅命、以谷渡藤御作被成候間、谷渡

愛染ト被号候、

一 御太刀一腰 兼永作

当分御拵御腰差ニ御座候、二代忠時公承久三年ノ兵乱

ニ関ケ原方ニテ宇治川御渡ニ成、敵七人御打取被成候

時御帶被遊、此軍功ニヨリ伊賀国長田郷地頭職御給、

夫ヨリ御代々御讓被遊候御什物ニテ御座候、

一 御旗二流

一流ハ時雨ノ御旗、一流ハ白旗、二流トモ^{⑩二}貴久公御

実名御座候、

時雨ノ御旗ハ天文十四年 貴久公御定被遊始テ御出陣

ノ時被成御指セ候御吉例ノ御旗、御什物ニテ御座候、

一 御太刀一腰 青江恒元作

一般若ノ劍一腰 波平行安作

大夫判官家久公御袖刀ニテ候、忠王島津判官袖刀^{⑪ト}銘

有、

一御太刀一腰 宗近作

一御劍一腰 弘法大師作ノ由

右四行、御家代々ノ御什物、藤野忠世ヨリ差上候、

一御甲一頭 小泉

文禄四年、御領国ノ御目錄可被遣候間、御帰朝可被成旨、高麗へ御朱印御到来候ニ付、御帰朝被遊候処、於伏見從 太閤、平野肩衝ノ御茶入・此御甲 義弘公御拝領被遊候、於高麗御渡海、慶長三年十月朔日、泗川ノ御一戦被得大利被遊御軍配候節、始テ被為召候、

一御手鏝一本

元龜三年五月四日、伊東ヨリ加久藤ノ城抑詰可打取ト仕候時、 義弘公飯野ノ城ヨリ御出ニテ於木崎原御鏝ノ合戦、敵ヲ御抑崩シ追被成、小村岡塚原ニテ柚木崎丹後ヲ被成御打取候時ノ御道具ニテ候、

一一本杉御馬印一本

於高麗 義弘公被成御作、泗川ノ御一戦初テ御持セ、被得大利、其已後此御馬印ニ御定被成、別テ御吉例ニテ候、

一御太刀一腰 真利作

一御脇差一腰 宗近作 鷹ノ巢

天正十五年 太閤秀吉公ヨリ 竜伯公於大平寺被遊御拝領、名物ノ御脇差ノ由、 竜伯公ヨリ 家久公へ被進候、 家久公御病中ニ愛染明王ノ御本尊ト右真利ノ御太刀・宗近ノ御脇差ヲ平田清右衛門ヲ以 中將様へ御讓被遊候、此外光忠ノ御腰物・摩利支天御本尊被遣候旨相見得候へトモ、光忠ノ御腰物ハ平松中納言様へ被進ノ由、

右御道具ノ御由緒、御文書相見得申候通知斯御座候、

以上、

辰八月十二日

右此一冊御代々ノ御家珍也、

(一六七五の?)

故録別記

一御琴一面 遠廬

一御尺八二管 一管ハワシ 一管ハカ、ミ

右琴・御尺八、元和三年 將軍家御参内、 家久公被

遊供奉候時、後陽成院ヨリ御拝領被遊候、

一 衛府御太刀一腰 貞真作

寛永三年丙寅秋、後陽成院ヨリ 家久公御拝領、

一 御鞍一口 御鐙 梨地高蒔絵、紫ノ大綱虎皮泥障

同年八月十九日、家久公從三位中納言御昇進ノ日、

後陽成院ヨリ御馬御鞍置ニテ御拝領ノ時ノ御馬①道具ニ

テ候、

一 御旗一流 八幡大菩薩ノ文字有之

頼朝公御旗、文覚上人筆、康次作、

一 御太刀一腰 康次作

天正十二年九月四日、將軍義照公ヨリ 義久公御拝

領、

一 御脇差一腰 包平作 当時ハ御短劍御拵①刀

天正十五年五月八日、於大平寺從太閤 義久公御拝領、

一 御腰物 正宗作

寛永七年四月廿一日、(秀忠カ)秀吉公江戸櫻田ノ御屋敷へ御

成ノ時、(家久カ)忠久公被遊御拝領候、

一 御腰差一腰 貞宗作(脇カ)

(正保)正徳四年十一月十三日、於江戸王子原犬追物 上覽ノ時、從 家光公御拝領被遊候、

一 御鐙一領 日新様御召料

一 御太刀一腰 正恒作

寛永四年四月十八日、家光公江戸櫻田御屋敷へ①御

成之時、家久公被遊△御拝領候、

一 御旗一流 義久公御実名有之

一 御腰物一腰 吉房作

右、龍伯様秘藏被遊候由、申伝候、

一 御鐙二領 義久公御召料

一 御鞍一口 御紋猿金具

御鞍ハ從 龍伯公御吉例ノ御鞍ニテ候間、(家久カ)実久公へ

被進候、

一 御鞍一口 御鐙有 黒塗御金具

伊東家御誅罰ノ節御佳例ノ御鞍ノ由ニテ、從 義弘公

家久公へ被遣候、①進

一 御轡一間 正宗作ノ由

惟新様被遊御秘藏ノ由、

一 御鎧一領

於高麗慶長三年十月朔日泗川御合戦、家久公モ御手
自敵六人御討取被遊候、家久公モ御肩御手疵被為負
候時被為召候、

貞享五辰八月十二日

御初入部

一六七六

文化七年午

一 島津安房殿(久備) 島津仁十郎

右ハ、来春 御初入部御用掛被仰付候、此旨可承向へ
可申渡候、

午四月

(顯桂久備)
信濃

一六七七

一来春 御初入部可被為在旨被 仰出候間、御手当相掛

儀トモ取シラへ申出候様、可承御役々へ可被申渡候、

(文化七年)
午四月

(島津久備)
安房

一六七八

一新納内蔵(久命)

右ハ、来春 御初入部御用掛被仰付候、此旨可承向々

へ可被申渡候、

(文化七年)
午四月

(顯桂久備)
信濃

一六七九

一来春 御下国ノ節、御行列ハ別冊ノ通被 仰出候、御

備先ノ儀ハ 御発駕当日御泊ノ 駅迄被召列、御道中ハ

御着城前晚ノ御泊宿迄御迎ニ被差越候段被 仰出候条、

御馬其外一御泊ノ所迄被差越候儀トモ、都テ別冊ノ趣

ヲ以、御手当所無取違様可申渡候、

(文化七年)
午六月

(島津久備)
安房

一六八〇

一 島津安芸殿

右御名代島津玄蕃殿、来年 御初入部為御迎出府有之候様被仰付候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

午六月

(島津久備
安房)

御婚姻

一六八一

一 佐々木新三郎様(秀白、表仁峯組頭)へ御書御案文ノ儀ニ付御祐筆差越候処、

御婚礼トハ御例式ニ相懸タル事ニテ候故、公方家計

ノ御用ニテ宜候、脇々ハ御三家ニテモ婚姻ト書調候間、此度モ刑部様御婚姻ト可書調旨、致承知候段申来候、

右ノ段ハ御記録奉行・御右筆寛居候様被 仰出候間、

右之趣ヲ以可申渡候、

寛保二戊十二月

(種子島時成、後北条時守)
織部

一六八二

一 来春⑨年中御婚礼可被為調旨、先達テ被 仰出候処、京都

火災後御造管未御取掛リモ不被為在砌、且御国用御繁多ノ御時節候間、旁御遠慮ノ御旨ヲ以、来年御婚礼ノ儀可被為召延旨 御沙汰ニ候、然処、御趣意ノ旨御尤

ノ御事ニハ候ヘトモ、御年頃ニモ被為在候間、御婚

礼被為調候様ニト、御三家様方ニモ被仰上、猶又御老

中様方ヨリモ御同様御願ニ付、浅宮様家綱公御台所

御入輿御内祝ノ御例ヲ以、此度モ右ニ被為準、来二月

中御婚礼可被調旨被 仰出候段、御到来候旨被仰渡、

天明八申十二月

一六八三

一 太守様御事、御年頃ニモ被為候間、(近親之)来年 御参府ノ上、

御婚礼可被為整旨御内定候、然処、御婚礼ノ儀格別御

大礼ノ御事候ヘトモ、公边ニモ御内祝ニテ被為濟候

御儀候ヘハ、⑩御響合モ被為在候付、御縁女様御双方

被仰合、(重要)中將様御方へ御引取被置、追テ御婚姻被為

整度旨、先月九日御願書被差出候処、御願通被仰渡候、

且又当時御滞留ノ御事故、表向御引越ノ不被為及御沙

汰候、当分ノ通被成御座、右通御引取被仰渡候付テハ、

同二十五日御内祝被為濟候段、御到来ノ旨被仰渡、

寛政元酉三月廿八日

但、諸士并諸組頭・与力同断、

享和元酉正月十七日

(伊勢貞矩)
播磨

一六八六

一今般(寄重) 太守様御婚姻被為濟候ニ付御礼等ノ儀、御伺ノ

上、今月朔日御登 城御礼可被仰上旨、御老中様御連

名ノ御奉書御到来、御名代秋月山城守様御登 城、

公方様 大納言様 御台様へ御献上物被遊、御礼無相

滞被為濟候段御到来候、依之、御一門方・諸大身分其

外月次御礼罷出候面々、明後廿八日四ツ時登 城、

御三殿様へ御祝儀、於席々相謁可被申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀被申上来候面々ハ被成来候通

被申上、江戸へモ有来通、追テ御(空白、使便カ)ヨリ被申上、

御女中方ノ儀モ同断可被申上候、

右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相渡候、

寛政十年午五月 (養川隆昌)
大炊

一六八四

一先月廿七日 (重妻美女)
(忠持 佐土原) 明姫様島津淡路守殿御結納ノ御祝物御取

替、則日御婚礼被為整、同廿九日上御屋敷へ被為入御

三日ノ御祝且御婚姻被為整候、同晦日 (寄重) 太守様御名代

以有馬佐兵衛佐様御礼被 仰上、御献上物被為濟候段、

御到来ノ旨被仰渡、

(元年) 寛政酉六月廿六日

一六八五

一若殿様へ(池田齊邦、島取) 松平相模守様御妹 弥姫様御縁与、御願ノ通

被仰渡候、依之、御一門方并諸大身分其外月並御礼ノ

面々、明後十九日御祝儀、謁御家老、

一六八七

一 御縁女様御事、御婚姻御当日ヨリ 御前様ト奉称候様
被仰出候、

右之通表方へ致通達、 末略ス、

但、諸郷・私領ノ儀ハ地頭・領主・大番頭ヨリ可申

渡候、

寛政十年午五月

(川上久致)
久馬

(菱刈隆色)
大炊

(伊勢貞矩)
播磨

(高橋權次)
縫殿

(名越恒篤)
右膳

(右膳)

(右膳)

(右膳)

(右膳)

一六八八

一 御前様御婚姻後御祈禱向ノ儀、江戸・御当地トモ 太
守様御同様被仰付候旨、被 仰出候段申来候付、可承
向々へ可申渡候、

午五月

大炊

一六八九

一 若殿様へ松平出羽守様御息女富姫様御縁与、御願ノ通
被仰渡候間、 御縁女様ト可奉称、御願ノ儀ハ 若殿
様御次ニ被仰出、且御結納被遣候迄ハ此様ノ字被相用
候旨、是又被仰出候、

一 右ニ付、御名ノ字并同唱ノ名付居候者可相改候、

右之通、向々へ不洩様可申渡候、

寛政七年卯六月

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

(伊勢貞矩)
播磨

同十四日、今日五ツ目御祝ニ付島津式部殿へ為御名代

町田式部殿島津大藏殿御事也御出候、依之、伊勢十兵衛殿相勉候、

一六九一

文化九年申

一若殿様へ(音彬)一橋民部卿様御息女 英姫様御縁与、御願

ノ通被仰渡候、依之、御一門方并諸郷大身分(マツ)其外月次

御礼罷出候面々、来月朔日四ツ時登 城、於席々謁御

家老、御祝儀可被申上候、

但、江戸へ兼テ御祝儀被申上来候面々、有来通来月

朔日中急便ヨリ被申上、御女中方ノ儀モ同断可被申

上候、

一諸土并諸与与力、同日四ツ時登 城、謁御家老、御祝

儀可申上候、

一御当地ノ寺院着座ノ門首ハ、右同日九ツ時登 城、同

断御祝儀可被申上候、其外ノ寺社家ハ寺社奉行宅ニ於

ヒテ御祝儀可申上候、

一詰合ノ琉球人、同日九ツ時登 城、謁奏者番、御祝儀

可申上候、

一諸所移地頭并地頭代・抑ノ儀、不差支時節罷越、謁御

家老御祝儀可申上候、当時御当地へ差越居候面々モ候

ハ、来月一日四ツ時登 城、同断御祝儀可申上候、

一諸郷寺院着座ノ門首来月朔日ヨリ先罷越、御精進日間

登 城、同断御祝儀可申上候、其外ノ寺社家ハ其所御

仮屋又ハ地頭仮屋、私領ハ領主於仮屋御祝儀可申上候、

一諸郷ノ儀ハ、来月朔日ヨリ先、郷士年寄・与頭一人ツ、

罷越、御精進日間御帳ニ相付御祝儀可申上候、

但、差支候節ハ寄役ノ内一人可罷越候、

右之通、御三殿様 若殿様へ御祝儀申上候様、向々

へ可致通達候、

申九月

(島津久備)

安房

取次

伊東仙太夫

御入奥御式

竹姫君様御入輿ノ御式

一享保十四年酉十二月十一日 竹姫様御入輿被遊候間、

同月三日ヨリ五日迄 御本丸ヨリ御道具被遣、右三日

ハ御留守居番戸田喜右衛門様芝御屋敷御守殿へ早朝ヨ

リ御出、御道具一日ニ兩度ツ、参候、於 御守殿御使

者ノ間御熨斗・御茶上リ、一番御道具参候テ御本宅ノ

様ニ御越被成、大御書院三汁十菜ノ御料理上候、御相

伴御先手衆ニテ候、御目錄ハ平岡内匠殿 御守殿ニテ

被受取候、三日トモニ同断、

一初日、喜右衛門様御本宅御披被成候テヨリ、御一門様

其外御安心御旗本衆御出、右同前ノ御料理上リ、御ハ

ヤシ有之候、

一同七日・八日・十日ニモ段々御道具被遣候、此節ハ喜

右衛門様御越ハ無之候間、彼ノ衆被参候、

一九日御先女中頭外ノ衆六人、末々ニ女中百人余被参候、

一十一日四ツ時過御入輿被遊候、御供ニハ御老中松平左

近将監、栗色 御監様・酒井讚岐守様、御輿ノ御先ニ長上下早持筋御

着ニテ、御モ、タチ御取歩行ニテ左右ニ御ナラヒ御供

被成候、若御年寄本多伊予守様ニモ 御輿ノ御跡ニ御

歩行ニテ御供、其外御留守居様・大目付・大番頭ヲ初

御役々大勢御供ニテ候、 姫君様御長柄白木ニテ松竹

ノ絵書、御供女中ニモ長柄又ハ白木乗物・常々乗物段々

ニテ候、御持セ道具様々ニテ候、

一御供女中ノ内ニトワケト申候テ、ヒタヒカミヲ左右ニ

ワケ、マロクヲユヒ候テ、髪ハシマダノ様ニヨリ候テ、

イシキヌハカリヲ左右ニ持、乗物ニテ一々御先ニ参リ、

御座ノ間ニテ御規式相濟候内ハ御三ノ間ニ扣申候由、

是ハ悪磨ヲ払故ニテ候、

一御貝桶・御輿御渡、御守殿御使者ノ間ニテ讚岐守様

御貝桶御渡、島居丹波守様御受取、左近将監様御輿渡、

島津但馬守殿御受取被成候、直ニ 御守殿御座ノ様ニ

御貝桶・御長柄ノ御輿被為入候、御玄喚ハ御入口

一カワヲ鈍子マン幕ニテシトミ申タル事ニテ候、

一右御受取渡相濟候テ、直ニ御老中・若御年寄御本宅ニ

御越、大御書院、ヒレノ御吸物上、御酒上リ、則御披

被成候、引統ニテ段々御役々、大御書院又ハ表御書院
其外ノ座々ニテ、右同前ノ御取持ニテ相済候、都テノ
御心安衆ハ二百人余モ有之候半ト存候、拙者トモへ、

御入輿ノ節ハ、御守殿御門前ノ御家老・御用人・御近
習役御居一列ニ相詰、御入輿被遊候テヨリ所々ノ張
番所モ罷出候、御入輿ノ節、都テ人払ニテ一人モ御目
通ニハ不罷居、我々トモ迄ニテ候、

一御一門様・御心安御方様、御本宅へ御越候へトモ、御
老人も△ 御目通筋ニ御出候事不罷成事ニ候、御道筋
ハ 御本丸ヨリ虎ノ御門・赤羽根筋ニテ候、御道具ノ
道筋モ同断ニ候、

一其当日ハ、御通筋御大名様其外ノ屋敷御門ヲ閉候テ立
番被出候、是ハ 公義ヨリノ仰渡ニテ候、

一御入輿即晚、御守殿へ給州様ヨリノ御使者拙者、益
之助様御使者ハ本殿、大御前様御使者ハ内匠殿、一所
ニ相勉候、御使者ノ間ニテ、御口上御目録付ノ御用人
金山久四郎殿ト申へ申達候テ、竹姫君様被聞召上候、
御返答御奥御座所ノ御頭御広敷へ三人トモ被召通、御

供ノ大上臈ヲトミノ御方ト申御女中ヲ以被仰聞、左候
テ、御礼被来候テ、御目録ヲ以、縮緬三巻ツ、三人へ
致拝領候、

一御入輿則日右通御使者相勉候処、段々難有 御意ヲモ
蒙リ、拝領物被仰付候段、不存寄儀難有仕合奉存候、
兼テ承存候ハ、別テ重キ御事ニテ、御奥様へ拙者トモ
被召通候儀、且又御供ノ御上臈・御年寄・女中様へ対
面ハ曾テ無之由候処、右式ノ次第候へハ、如何様以前

加賀守様御方ノ御様子トハ諸事相替、公方様ヨリノ
仰付モ有之候ヤト申事ニ候、翌十二日ノ晚モ拙者へハ
御使者被仰付相勤候へハ、又々御奥へ被召通、ヲトミ
ノ御方・御局・御女中・年寄被出合候テ、御意ノ趣致

承知拜候、御守殿ノ勉晴々敷事ニテ、右通相勉候ハ
御鎖口ヨリ御座ノ間ニテ御供女中衆左右ニ、相詰居候
中を通り参り候、御座ニても御座之左右ニ△二三十人
計ツ、女中衆ヨリ被詰居候、其座中ニ罷出、御老女中
致対面、何かト哉ニテ相応ニ申達事ニ候故、何トモコ
マリ事ニテ候、如何様先ノ折節右通候半ト存候、御家

老衆何レモ御コマリニテ候、十二日ニハ五百八十ノ餅御拝領、此御方ヨリモ御献上候テ、拙者御使者相勉候、上使ノ御方戸田喜兵衛様御越ニテ候、途中ニテ上使へ参合候テ、御互ニ於途中千秋万歳唱、御式対仕罷通候、道筋ハ赤羽根筋ニテ有之候、

一御城内櫻田辺ヨリ御献上ノ品通り筋ヲ一通リ明候テ、人弘ノ体相見得、下馬内ハ一筋捧突セ罷在候テ、常ノ通りト御献上物ノ通り筋ハ格別ニ致候テ、不込合様致下知、左候テ 公方様ヨリモ遠見ヲモ被付置候、

一拙者支度早持筋出口ニテ候、其当日ハ 御入輿ノ御祝儀惣出仕ニテ候故、下馬下乗ノ儀ハ扱々ヲヒタゞシキ事ニテ、皆弓鉄炮ヲ飾、其頭々御番所ヲ堅被成候、

一御献上ノ品ハ、餅カマケ二十五ヲ、長持ヲ直ニ台ニイタシ、十二御肴十種ノ釣台十ヲニ候、右ニ^{⑧相}付候才領人等ニ至、二百人ノ人数ニテ候、右品ハ 御城御玄喚前左脇ニ有之屏中門ヨリ被通候テ、大広間御縁ヨリ柳ノ間ニ被差通候、御步行衆被^⑨運候△、

一御献上ノ品ヲ柳間ニ被備候テ、無程右柳ノ間ニ被召通、

左近將監様柳ノ間御座中敷居ヨリ上ニ御出席、以奏者番丹羽式部少輔様敷居内へ御詰被成候、拙者ニハ御座末ヨリ御目録料参、式部少輔様へ差上候処、直ニ御目録ヲ式部様ヨリ左近様へ御申上候節、左近様御前九尺程モ御近ク相進ミ候テ 太守様ヨリノ御口上ヲ直ニ左

近様へ申上候処、可被達 上聞旨御挨拶ニテ、扨居候へハ、ヒワノ間ニ可罷通旨御目付大森半七様・石川正^(半七郎時長)相様ヨリ被仰聞付、御坊主案内ニテ罷通候処ニ、ツバ^(ツカ)シカ^(シカ)ヲノ間ニテ御吸物・御酒被下候条罷通候様ニト御目付

様ヨリ御差図ニ付、ツバヲノ間ニ罷出候処ニ、小十人御給仕ニテ、白木八寸ニテ御吸物被下、御酒御土器ニテ二篇被下、御肴二種、其時御留守居様御一所ニ御出御挨拶被成、御酒三篇頂戴、御吸物下方候テ、又御両所御出御アハシラヒニテ候、御末ニ披居候様ニト被仰聞候故、御座末之ツイ立ノ外ニ扨居候処ニ、可罷出旨御差図ニテ罷出候へハ、左近様御ツ、ヲノ間御上座ニ御出席候ニ付御礼申上候処、是へト被仰聞候間御近ク罷寄候処、 御入輿ニ付御目録ノ通被献之候、遂披露

候付被仰聞御礼仕(空目、ママ)込御座末ニ御目通、脇ニ退座致

候節可罷出旨御差図有之、罷出候処、式部様広蓋ニ卷

物五卷御受被成、御座、是へト被仰聞候付相進ミ候へ

ハ、拝領ト被仰、御渡被成候付頂戴仕、下リ、則又罷

出御礼申上候節、式部様ヨリ御取合有之、致退座、勉

方首尾能相濟御城退出致シ候、誠ニ以不存寄儀難有次

第奉存候、拝領ノ間(品カ)ハヒカキ紗綾五卷々々被下候、

一 今月十五日 御入輿ニ付御礼被仰上候付、(難意)太守様御

登 城被遊候、其朝五ツ時ニ 公方様ヨリ水野和泉守(忠之)

様 上使ニ御出、段々御拝領物有之、其節御家老四人

一同ニ和泉守様御前ニ被召出 公方様ヨリ拝領物被仰

付段被仰渡候由、四人一紙ニ名書被認候由、覚書ヲ以

紗綾五卷ツ、拝領被仰付、右覚書ハ我々罷出御渡被成

候ヲ受取頂戴仕、左候テ引統(家惠)大納言様 一位様 右(田)

衛門督様 小五郎様(八重姫、水戸吉亭) 養仙院様上使被遣、段々ノ御拜

領物ニテ候、 総州様 益之助様 大御前様(所)ヘモ 公

方様御拝領被遊候、何レモく 上使直ニ御守殿ヘ御

越被成、扱々御賑々敷事トモニテ無申計候、

一 則日御登 城被遊、本殿・我等モ 御城ヘ罷登候テ、

黒書院ニテ 公方様ヘ兩人一同ニ 御目見被仰付、段々

難有次第奉存候、今度不存寄難有御事ト奉存候、

一 御同日 竹姫君様ヘモ 御城ヘ被為 入、 夜入候テ

御帰御ニテ候、御供行列ヲヒタ、シキ事ニテ、御通筋

ハ人留ニテ候、 公方様ヨリモ御留守居様ヲ初大勢御

供被遣候、御女中モ御迎ニ参ニテ候、

一 御上リノ御供表御局佐川メシツレラレ候テ、 公方様

御目見被仰付、直ニ此節ハ目出度トノ 上意ニテ、御

普請モ能出来候由、家老トモ働故早々出来目出度トノ

上意ヲ蒙リ候通、佐川ヨリ申聞セ候、誠以難有事トモ

ニ奉存候、此節ノ儀何篇ニ付宜敷候テ致安堵候、

西十二月 右一卷、島津中務殿ヨリ又七殿ヘ被遣候写ニテ候、

一六九三

一十二月三日、從 公方様 竹姫君様ヘ被進物

一 御掛物 常信 三幅対

一御掛物 峯信 三幅対

一大横物 探幽

一軸物 洞元

一軸物 洞春

一銀丁子御釜

一料紙御硯箱

以上、

一同日朝巳ノ刻 晚未ノ刻

一同四日朝辰ノ刻 晚午ノ刻

一同五日右同断

右三日ノ間、竹姫君様御道具被遣候、

一十二月十一日 御入輿御道筋内櫻田ヨリ外櫻田御門松

平淡路守屋敷通、御門通、藤堂伊豆守屋敷・相良遠

江守屋敷脇ヨリ新下(空白、ママ)久保通、飯倉町赤羽根橋ヨリ

有馬中務大輔屋敷前ヨリ松平土佐守屋敷脇松平大隅守

御守殿へ被為入、

一御貝桶渡 老中酒井讃岐守

右請取、島津但馬守、

一御輿渡 松平(乗色)左近将監

右請取、鳥居丹波守、(忠藤)

一上使水野(忠之)和泉守 公方様ヨリ 竹姫君様へ被進物

一御太刀一腰 三条吉家 代金十五枚

一御太刀一腰 和州包永 代金二十枚

一御小脇差 盛景 代金十五枚

一御茶壺二 衆明空井

一御伽羅一貫目

一紗綾五拾卷

一縮緬五拾卷

一餅米五百俵

一御銀子三千兩

以上、

一上使安藤(信友)对馬守 大納言様ヨリ 竹姫君様へ被進物

一綿百把

一源氏物語一箱 公家衆寄合書

一御肴一種

以上、

竹姫君様へ

一 御屏風五双

右、尾張殿ヨリ被進候、

一同 五双

右、紀伊殿ヨリ被進候、

一同 三双

右、水戸殿ヨリ被進候、

右ノ外、諸大名五拾四人并御役々献上物略ス、

御入輿ノ節御飾

一 御床御掛物 三幅対 中寿老人 両脇鶴

中ニ花瓶水ヲタ、へ台左右立花台、

一 御棚

軸物二卷 盆 香炉 香合 香匙火箸 御文台

御硯箱 [▽]④ 封算 [△]

御化粧ノ間御飾

一 御床御掛物 寿老人

一 御棚

三部 文鎮 御料箱 硯箱

御寢所御飾

一 御床御掛物 寿老人 立松台

一 御棚

軸物 盆 重沈 香炉 香合 焚カラ入 香箸

御料紙箱 硯箱

御客座御飾

一 御床御懸物 二幅花鳥 立花二台

以上、

十二月十二日

一 松平大隅守使者 島津中務 ^(久寛)

右、五百八十餅被差上候付、柳ノ間ニヲヒテ松平左近

将監ニ謁候、躑躅ノ間ニヲヒテ [▽]④ 御吸物・御酒被下、

其席ニおゐて [△] 卷物拜領ニ候、

一 大隅守へ 上使戸田喜右衛門ヲ以五百八十餅・十種被

遣候、

同日

一時服十 松平左近将監

一同五 本多伊予守 ^(忠統)

右、御用相仕廻候付拜領之、

同十五日、大隅守御礼有之候ニ付月次御礼無之、

一白銀百枚

一巻物三拾

一御太刀一腰 備前正恒 代金十枚

右ハ、御黒書院ニヲヒテ 松平大隅守献上ノ御礼申上、

御奏者番披露之、御太刀目録引之、 大隅守御次へ退、

進物引之、

一金十枚

一巻物二十

一綿五十把

右ハ同所ニヲヒテ (上総介、吉實) 松平下総守名代阿部伊勢守ヲ以テ

御礼申上、献上ノ次第同前進物引之、(空白、重カ) □テ 大隅守出

座、御下段御右ノ方ニ着座、御三献ノ次第有之、 大

隅守退座、

一銀馬代 島津但馬守

右、御礼御太刀目録御奏者番披露、退座、

一銀馬代 大隅守家来 島津中務 島津全(久兼)

右次第同前、退座、

御次ノ間ニ於^④テ、④拜領物ノ儀老中^⑤ニ渡之、重テ一同出座、

御礼申上候、退座、

一大隅守家来 島津中務 島津全

右一同出座、 御目見、御奏者番披露、畢テ 入御、

御白書院縁類ニヲヒテ老中列座有之テ、

一御太刀 正宗 代金二百枚

一御脇指 来国行 代金百枚

右、大隅守拜領之、

一御脇指 来国光 代金百枚

右、上総介拜領之、

右御道具、進物番無地熨斗目通シ小紋ニテ無之、着長

袴、持出之、老中取之、御道具被下旨名代阿部伊勢守

へ申達渡之、則頂戴、退出、

一益之助(宗信)

右、被下候御道具進物番持出ノ次第同前、伊勢守へ老

中渡之、則頂戴之、

一紗綾五卷ツ、 島津但馬守 島井丹波守(居)

右拝領物、進^①番持出之、一人ツ、頂戴之、退座、

一上総介

右、御太刀^①・御脇差献之、伊勢守出座、御奏者番持出

之、披露之、老中挨拶ニ及ヒ引之、

一益之助

右、使者ヲ以献上物、檜ノ間ニヲヒテ老中ニ謁候、

一大隅守

右、御礼ノ節、三献ノ御祝儀有之ニ付、

一御盃 水谷出羽守

一御吸物 阿部出雲守

一御捨土器 柴田但馬守

一御肴 青山丹波守

一御酌 松平伊勢守

一御加 松平佐渡守 代リ戸田土佐守

一同十七日 大隅守杜家有之候、

一同十六日 大隅守中将被 仰付之、

一同十八日 大隅守官位ノ御礼申上之、

一同十九日 於 御城 御入輿御祝儀トシテ御能有之、

翁 三番三 高砂 八島 東北 張良

祝言 呉服

狂言 末広カリ イクイ

一去ル十五日 竹姫君様 御本丸へ御上リ被遊ノ由、且

又 竹姫君様唯今迄御座へ罷成候御屋形松平下総守へ

御預^①有之候由、

一同廿一日 大隅守宅ニヲヒテ老中招請有之候節、

翁 三番三 高砂 東北

祝言 養老

狂言 末広カリ 跡ニテ鶴亀

祝言 養老

一同廿二日 大隅守手前祝義有之候由、

翁 三番三 老松 八島 江口 橋弁慶 乱

八島ノ間那須与一

狂言 二本松 ハナコ

上様御名称

一六九四

宝曆十辰六月十五日

一 延享二丑九月廿五日 御本丸西丸被遊 御移替、御

本丸へ 御移替当日ヨリ 上様ト奉称、^⑧將軍宣下当

日より 公方様と奉称△ 西丸へ 御移徙当日ヨリ

大御所様ト奉称候様被仰渡、

延享二丑

宝曆十辰九月廿二日

一六九七

一 隅州様辰九月二十日 御逝去ニ付、^(繼體別室、宗信実母)於嘉久様御事妙心

院様、^(繼體別室)ヲトメ御事嶺松院様ト御名御改被成候段被仰渡、

一六九五

一六九八

一 大納言様、旧臘朔日御婚禮被為候テ、^(家治) 姫宮様御事^(五十宮倫子)

一 右同断ニ付、^(繼體繼室)竹姫君様御名浄岸院様ト奉称候旨被仰

御簾中様ト奉称候旨被仰渡、

渡、

宝曆五亥正月

宝曆十辰十一月二十二日

一六九六

一六九九

一 辰五月十三日 ^(家重)公方様・^(家治)右大将様・^(家治室)御簾中様 御移替

一 若君様、今日ヨリ 大納言様ト奉称候、向後 大納言

被遊候事、

様 御台様ト申御順ニ候間、四月七日被仰候由、明和

右大将様御移徙当日ヨリ 上様ト奉称、將軍宣下当

三戌五月七日 仰渡、

日ヨリ 公方様ト奉称候事、御簾中様御移徙当日ヨ

リ 御台様ト奉称旨被仰渡、

一七〇〇

一 徳川右衛門督様御事、田安中納言様ト称可申旨、先月十五日御廻状ヲ以被仰渡候段、江戸ヨリ申来候旨被仰渡、

明和五子六月十三日

一七〇一

(一七〇〇号行間朱書)

一 民部卿様御二男松平慶之丞様御事、田安家御相統被仰出、徳川ト可被称候、田安領拾万石其儘被遣候旨被仰出候段、一ッ橋へ御留守居被招呼、御用人衆ヲ以御吹聴被仰進旨、申来候段被仰渡、

天明七未八月五日

一七〇二

(宗武女)

一 田安種姫様御事、先達テ 公方様^御御養女被仰出、種姫君様ト奉称候付、種ノ字名ニ用候儀并同唱迄モ遠慮被仰渡、

安永五年十月十四日

一七〇三(一)

(重孝女)

一 於陽様御事、陽姫様ト唱、御内輪ニテハ書付等ニテモ可相認候、左候テ、以来 御嫡女様 御末女様トモ姫ノ字相用、御両敬ノ御方様へハ姫ノ字相用候様被仰付候、 公辺向又ハ表立候節ハ有来通、

安永八亥正月

(一七〇三の二)

陽姫様後ニ牧姫様ト御名被進候、

安永九子二月三日

一七〇四(一)

(橋治清男)

一 徳川豊千代様御事、 御養君被 仰出、 若君様ト可奉称候、 御殿西丸へ被仰出、種姫君様御弟ノ御統候旨被仰渡、

天明元丑六月十五日

(一七〇四の二)

(行間朱書)

一 若君様御名家齊公ト奉称候旨被仰渡、

天明二寅正月

(一七〇四の3)

(行間朱書)

一若君様今日ヨリ 大納言様ト可奉称旨、天明二寅四月

三日從 公義被仰渡候間段、(マ)同五月十二日被仰渡候、

一七〇五

一虎寿丸様御事、先月廿七日於大御書院 太守様御加冠、

御 伝来ノ御元服ノ御式有之、御名 又三郎様ト御改、

御実名 (後、齊宣) 忠堯様ト奉称旨被仰渡、

天明四辰十二月廿九日

一七〇六

一又三郎様御伝来ノ 御元服ノ御式且御鎧御召初被為濟

候付、被相混、旧臘廿七日御祝被為濟候段被仰渡、

天明五巳正月廿七日

一七〇七

一又三郎様ト御名ヲ奉称来候ヘトモ 若殿様ト可奉称候、

後年御任官被為在候節ハ其(御)官ヲ可奉称旨被仰渡、

天明五巳二月

一七〇八

一此節御任官被為在候間、向後 侍従様ト奉称候様被仰

渡、

天明七未正月八日

一七〇九

一今度就 (七〇五号行間朱書) 御隠居 御家督、 太守様御事 中將様、

侍従様御事 (齊宣) 太守様ト奉称、 御名順 太守様 中将

様ト申上、書付等ニモ其通可仕候、

右之通、諸向ヘ可致達候、(通脱之)

天明七未二月 (書入久福) 安房

一七一〇

一 (家治) 公方様、九月八日薨御ニテ候、

一 (家齊) 大納言様御事、先月九日ヨリ 上様ト奉称候段、御到

来候旨被仰渡、

天明六年十月

一七一一

一上様御事、將軍宣下御当日ヨリ 公方様ト可奉称旨從
公義被仰渡、先月十五日 將軍宣下ノ御規式相濟候段
御到来候、此旨可奉承知候、
右ノ通被仰渡、

天明七未五月十九日

一七一二

(重妻側室、茂姫(東母))
一御内証様御事 御部屋様
(重妻側室、齊宣(東母))
一於千萬様御事 御内証様
右ハ、思召被為在、右ノ通被 仰出候条、此旨表方へ
致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

寛政元酉八月

一七一三

(一七二二号行間朱書)
一今度 若君様御誕生、
(家齊(室茂姫))
御台様御養被遊旨被 仰出、

御名 竹千代様ト被進、被遊 御官迄ハ 若君様ト奉
称候旨、被仰渡候段御到来ノ事、

寛政四子八月

一七二四

(治濟)
一民部卿様、此節被任中納言候付、向後一橋中納言様ト
可奉称旨、被仰渡候段申来候、

寛政三亥四月

一七二五

(重好)
一宮内卿様、被任中納言候付、向後清水中納言様ト奉称
候旨、從 公義被仰渡、

寛政四子四月

一七二六

(一七二五号行間朱書)
一萬次郎様被遊 御元服、
(家重男、清水(重好))
徳川宮内卿様ト御改被遊候
旨被仰、

宝曆九卯十一月二日

一七二七

一 敏次郎様御事、
(家慶)
御台様 (齊室茂姫) 御養被仰出候旨、被仰渡候

段御到来有之、

寛政五丑十月

大御前様卜可唱上旨被仰渡、

享保七寅十二月十八日

一七二二

一 又三郎様御名 薩摩守様御改、奉称 薩州様、御実名

宗信公卜御改被遊候旨被仰渡、

元文四年未十二月

一七二八

(一七二七号行間朱書)
一 今度御出生ノ

御男子様、松平敏次郎様卜奉称候旨、
從 公義被仰渡候段申来候、依之、敏次郎卜申名又ハ

同唱モ遠慮被仰渡、

寛政五丑六月

一七二二

一 恒姫様、向後 御縁女様卜可奉称候、 御順ノ義ハ
(齊室)

敬姫様御上被 仰出候段申来候、
(重華女)

天明六年午十月四日

一七一九

一 敏次郎様御事御弘有之、 若殿様卜可奉称旨、被仰渡

候段被仰渡、

寛政五丑十月

一七二三

一 長福様御儀、 若君様卜奉称候旨被仰渡、
(家重)

享保九辰十二月廿六日

一七二〇

一 御新造様御事、 御前様卜可唱上、高輪 御前様御事、

一七二四

一 小次郎様御義、徳川右衛門督様ト御改被遊候段被仰渡、
(吉宗男、田安宗武)

享保十四酉閏九月晦日

寛政十三酉正月

一七二八

一七二五

一 今度西丸御誕生ノ 御若子様、 御名 竹千代様ト

家治公奉称候旨被仰渡、

元文二巳三月

一 御縁女様御事、御婚姻御当日ヨリ 御前様ト奉称候様
被仰出候、
右之通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、
但、諸郷・私領ノ義ハ地頭・領主・大番頭ヨリ可申

渡候、

寛政十午五月

一七二六

一 先月廿七日、 太守様御(齊意)納御婚姻首尾能被為濟、
(空百、緒カ)

幸姫様御事、御当日ヨリ 御前様ト奉称候様被 仰出
(佐竹義和妹)

候段被仰渡、

寛政三亥三月

(川上久致)
久馬

(斐刈隆臣)
大炊

(伊勢貞矩)
播磨

(高橋權次)
縫殿

(名越恒篤)
右膳

(一六八七号文書に同じ)

一七二七

一 若殿様へ松平相模守様御妹 弥姫様御縁与、御願通被
(齊興)
(池田齊邦、鳥取)

仰渡候間、御縁女様ト奉称候付被仰渡、
(御旨)

一七二九

一 此節 御隠居 御家督ニ付、 太守様御儀 御隠居様、
(齊宣)

若殿様御事 太守様、高輪 御隠居様御事ハ 大御隠
(齊興)
(重兼)

居様ト奉称候、末略、

文化六年巳七月

(島津久泰)
将監

御名順ノ場可見合、

一七三〇

一 総州様御事、此程入道様ト申上、書付ニモ仕候ヘトモ、
(吉黄)

向後ハ 総州様トモ申上、書付ニモ可仕候、且又 御
前様御事、大御前様トモ申上、書付等ニモ其通仕来
候ヘトモ、且又 御前様トモ可仕旨被仰渡、

享保廿年卯

一七三一

一 此節 御入輿以後 竹姫様御名御唱ノ儀、
(継豊) 太守様ヨ

リハ 公義并ニ他所トモニ奥掛ト御唱被成候、書面ニ
モ奥方ト被相調、節々御使者ノ御口上等ハ 竹姫君様
ト奉唱管候、
(吉黄) 総州様ヨリハ御口上・御書面トモニ

竹姫君ト御唱被遊管候、此旨承知仕候様御役人限可申
聞置候、

享保十四年酉十二月

一七三二

一 御縁女様御事、御婚姻当日ヨリ 若御前様ト奉称、
(吉黄室勢姫)

御順ノ儀ハ 御前様御次被 仰出候、

右之通表方ヘ致通達、御勝手方ヘモ可相達候、

但、諸郷・私領迄、

文化六年巳五月

(島津久泰)
将監
(頭姓久喬)
信濃

一七三三

元文五年申

一 又三郎様御名薩摩守様ト御改被遊候間、薩州様ト奉称、
(宗信)

書付等ニモ其通可仕候、末略、

申正月

(頭姓久周)
左京

林権次ノ字之次第 附、殿文字

一七三四

一 禁裏 公方様 大納言様

右、向後様ノ字可相用候、

一 太守(重妻)御前(重妻) 虎寿丸(奇重)

右、当分迄此様ノ字相用來候へトモ、公辺向御帳留

其外トモ 公方様 大納言様此ノ様ノ字被相用由候間、

向後此御方 御三方様ハ右様ノ字相用候様被仰付候、

敬姫(重妻女) 於篤(重妻女) 妙心院(重妻) 嶺松院(重妻)

右ハ、公辺向 御部屋様 御女姓様トモ右様ノ字被

相用由候間、向後此様ノ字相用候様被仰付候、

当分此方(御)ニテ 御部屋様ハ無之候へトモ、以来此様

ノ字相用候様被定置候、

一 真舎院(重妻女) 右御同様ノ管候へトモ、格別ニ被 思召御

事候間、御前様御同様此様ノ字相用(御)様被仰付候、

一 淨岸院(重妻)ニハ格別ノ御事候へトモ、此様ノ字相用候様

被仰付候、公辺向御書 御文等難被相替候間、有来

通ニ候、

右之通被仰出候間、御元祖様ニモ右ニ準シ候様被仰

付候条、諸書付ニモ其通相認候様被仰渡、

安永三年(奇)卯五月九日

一七三五

一 公辺御用向 公方様此様ノ字被相用由候間、此御方ニ

テモ右ニ準、此様ノ字被仰渡置候処、間ニハ自分御祝

儀伺御機嫌等申上候節モ同様相認候モ有之由候、心得

違ニ候間、御用向ノ外 御両殿(重妻女) 茂姫(重妻女) 真舎院(重妻女)

へハ以前ノ通此様ノ字相用、御姫様并御女中様方ノ

儀モ当分ノ通可相心得旨被仰渡、

安永七年戊六月 (小松清香) 帯刀

一七三六

一 先年御様ノ文字ニ相定候、是ハ御用向ニ相用候節ノ義

ニ候、然ルヲ自分事ニモ押並候ハ公私ノ無差別心得違

ノ儀ニ候、仮令ハ此様相用候 御二男様 御女中(御)様

ニテモ、伺 御機嫌等ノ自分事ニテ候ハ、其向ノ振

合ニ応シ御文字已上ヲモ可相認事ニ候、

一五ノ取替ニモ、支配頭又ハ右同前カ格別重キ向ヘハ、

心入次第応ニ入候亦以上ノ文字随分相用可申事ニ候、

一御家老等ヨリ格別輕キ向ヘ直書遣候節ハ、書法ハ無之

候ヘトモ、夫レ夫レノ心得可有之、無役迎モ家柄ノ向々

右ニ準シ夫々心得可有之事ニ候、

右ノ通、屹ト(被脱カ)仰出儀ニテハ無之候ヘトモ、右通可相

心得旨申来候段被仰渡、

午閏十月

主膳

但、拙者トモヨリ格別輕キ向ト有之候儀ハ、書役・

小役人・御小姓与ナトノ儀ニテ可有之旨申来候、

一七三七

正徳三年巳九月

一版 御一門方

一版 独礼ノ面々、御城代・御家老・大目付迄

一版 寺社奉行以下諸奉行迄

一版 諸士

一七三八(の1)

一ヲカク事、此節(宗徳)御若子様御誕生ニ付、(繼豊)文字相付候

様被仰渡、

享保十三申六月廿七日

(一七三八の2)

一ヲカク殿、只今迄ハ草ノ殿文字書来候ヘトモ向後此殿

ノ字可相用旨被仰渡、

享保十五戌三月七日

(一七三八の3)

一於須磨殿此程ハ殿文字ニ唱候ヘトモ、(繼豊)鍋三郎様御事

モ追々御盛人、満君様御事モ最早御縁与相濟事故、

屹ト為被仰渡儀ニテハ無之候ヘトモ、御家老中相談ノ

上、様ト唱有之事ニ候旨被仰渡、

宝永四亥四月十一日

但、但書ハ五月廿一日被仰渡、表方屹ト仕タル書付

ニ者殿ノ字ヲ書候様被仰候段被仰渡、

一七三九
(一七四〇号行間朱書)

一於須摩様 御実母様御取持ニ被遊度旨、從 隅州様(蘇豊)

太守様(吉實)へ被仰上、此節ヨリ 御実母様ノ御取持被遊候

段、隅州様 御意ノ段、江戸ヨリ申来候旨被仰渡候、

正徳五未五月廿八日

一七四〇

一堤前中納言(空白、代)長卿御娘(重豪側室)ヲチマノ方へ於江戸御男子様御

誕生被遊候、依之、向後於千萬殿ト唱、書付等ニモ可

致旨被仰渡、

安永二巳十二月廿九日

一七四一

一徳川大藏卿様先月八日被成御逝去候、殺生・鳴物・遊

興ケ間敷儀日数七日、普請ハ三日差留候旨被仰渡、

安永三年十月七日

(行間朱書)
一本文場違、御国忌ノ場ニ入筈ナリ、

一七四二

一於千萬殿事、今日ヨリ様ト相唱、書付等ニモ認候様被

仰付候旨被仰渡、

安永四未六月六日

(山岡久澄)
市正

一七四三

一御内証御方、此節 茂姫様一橋へ御縁与被 仰出候付、

格別ノ御取扱、一橋ヨリ御移リノ趣モ有候故、御内証

様ト相唱、此様ノ字相用、御名順於千萬様御次被 仰

出、御高千六百石被遣置候、御門通ノ節下座於千萬様

御同様被仰付候、

安永五申八月

一七四四

一正覚院御事、格別ノ 御方様故、以来諸書付等右之

通字文字相認候様被仰渡、

安永六酉九月

一七四五

御側衆 御高家衆 伏見御奉行衆 駿府御城代衆

御留守居年寄衆 大御番頭衆 交代寄合衆

右御役外ノ御旗本衆（地方）、江戸・御国元トモ御内輪ニテ

御前へ申上候節ハ、書付・口達トモ殿文字ニテ申上、

諸帳面并御家中ニテ互ノ唱モ右同断可相心得旨被仰渡、

安永三卯九月（午カ）

（島津久金）
左中

一七四六

一於御領内ハ自分ノ支配頭他ノ支配頭無差別様文字相用

来候ヘトモ、以来ハ右差別可致候、仮令自分ノ支配頭

姓名ヲ他ノ支配者ヘ向候テ申述候節ハ、何某ケ様ニ申

候扨ト、様・殿文字ヲ相用申間敷候、下役等モ其頭役

ノ義同断可申候、尤、頭役中一（空目、所カ）持ノ支配下ニテ候ハ、

一統右之通可相心得候、何某組何某支配誰ト一人ツ、

別段ニ相分リ居候向ハ、其頭一人ヲ右ノ通可相心得候、

但、大目附以上儀ハ是迄ノ通可相心得候、

右之通、向々へ可申渡候、

天明七未八月

（菱刈善色）
大炊

一七四七

一大御目付ヨリ何ソ申渡儀有之候節、殿文字不相付管心

得候由候、御前へ申上候節、書付等ニハ殿文字不相

付管候、其外ニテハ殿文字相付候様、向後相心得可申

候、此段為達 貴聞事候、以上、

右之通被仰渡、

享保五子五月

（島津久家）
左

一七四八

（藤島開室行庵）
一姫君様 御安座 御女子様御誕生、

享保十八年丑五月朔日

但、菊姫様ト御名被進候、屹立候書付ニハ於菊様、

自分書付ニハ菊姫様ト書調候様被仰渡置候ヘトモ、

表達テ菊姫様ト奉唱候様、同六月廿九日被仰渡、

一七四九

一 富之進様御事、奥平大膳大夫様御願置候通、御躰養子
(重豪勇昌高)
被仰付、御遺領無相違被下置候旨、天明六年九月廿日
被仰渡候、右ニ付、左ノ通被仰渡、

一 御内輪様方并御両敬ノ御方様へ御使御口上等ニ富之進

様御名相唱候節ハ様ノ字、御両敬外ノ御大名様方へハ

殿文字相用可申候、御役人様方へ御役場ニ付テノ節ハ

殿文字モ不相用等候、尤、他所へノ書通等右ニ準候様

被仰付候旨申来候条、此旨可承御役々へ可申渡候、

天明六年 十月

(書人久福)
安房

一七五〇

一 交代御寄合ノ儀、様ノ字相用候様安永三年申渡有之候、

右ハ表御礼衆ノ分計ニテ、其外ハ交代御寄合迎モ御旗

下方同様、御内輪ニテハ殿文字相用候様申来候条、此

旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

寛政十二年申六月

(兼刈隆信)
大炊

一七五一

一 若殿様へ、松平相模守様御妹、弥姫様御縁与、御願通
(音興)
被仰渡候付、御(空目、マ)被進候迄此様ノ字相用候旨被仰渡、
寛政十三年正月

一七五二

一 玉仙院及 心鏡院及

右、向後此殿文字相用候様被 仰出候条、此旨申渡可

承向へモ可申渡候、

寛政九巳五月

(兼刈隆信)
大炊

一七五三

一 於トメ殿、此殿文字相用、於トメ殿ト唱、書付等ニモ
(継豊側室、重年実母)

可致候、

右之通被仰渡、

寛延四年未閏六月一日

但、重年公御家督ニ付、

主膳

一七五四(の1)

一 松平但馬守様御兩敬被仰含候、依之、何ソニ付彼御方

御惣方様被仰遣候節、書付等ノ儀ハ此ノ様ノ字、此御

方御惣方様ニテ此様ノ字相認候様被仰付候、此旨可承

向々へ可申渡候、

寛政八年辰三月

(市田教國)
勘ケ由

(一七五四の2)

本文ニ張紙

御側御用人 御側役(江戸・京) 御留守居 御船奉行

御使番 御記録奉行 御右筆頭

御役々承知、

一七五五

一 瑠妃殿御事、此御方ニテ是迄殿文字御用被来候へトモ、

此節ヨリ様文字相用、諸書付等ニモ右ニ準相認、御順

ノ儀ハ(空白、マシ)姫様御次ニテ、御座席ノ儀ハ其節ノ御都合次

第可為在候、

右之通被 仰出候段申来候条、此旨可承向々へ可申渡

候、

文化六年巳六月

(巖姓久齋)
信濃

一七五六

一 上様御名且又此御方様御名、御一門様方御名、様ノ字

ノ書様字画段々不相並候間、此節被相定候、

上様御名、様ノ字一紙ニ書候ハ、左之通様ノ字画ニ

相用可申候、

一上様

姫君(竹姫) 太守(藤豊) 総州(吉豊) 又三郎(忠顯、後宗信) 御前(吉貞室)

菊姫(藤豊女) 信證院(綱貴側室) 於須磨(吉貞側室) 於栄(綱貴女) 於喜代(吉貞養女)

御一門様方 上様御名一紙無之時ハ、左之通様ノ字相用可申候、

一 姫君様ヨリ菊姫様迄御六人様略ス、

信證院様 於須磨様 於栄様 於喜代様 御一門様方

右之通、様ノ字ノ字画、向後被相定候条、無間違様可

相心得旨、本殿ヨリ被仰渡、

元文元年辰六月十四日

一七五七

落穂集

一足鞋・御小者・中間等待へ殿ノ字付ニ申由不可然候、
 惣体士中ニハ様付ニ可申候、乍然御步行抔ノ内ニハ内
 縁等有之、様付ニハ難申人体モ有之候ハ、夫ハ格別
 ニ候間、殿文字ニテモ苦ケ間敷旨被仰渡置候、然処ニ
 先年江戸詰ノ節、右之御格式相乱、表御番所ニテ承候
 へハ走番トモ参リ、御馬廻・新御番衆トモ殿ノ字付ニ
 申、物奉行・御勘定所小頭衆⑧杯役ニモ其座々渡居候走番
 トモ殿文字付ニ申、御目付又ハ御側御小姓衆ナトニハ
 皆様付ニテ、一座ニ罷在候節、右差引有之候様、聞耳
 モイカ、ニテ候間、殿文字ニテ濟事ニ候ハ、我々ニモ
 其通ニ可有之事ニテ、何比右之通罷成候哉⑨と。物頭衆へ
 申達候へハ、尤ノ儀ニ候、可相糺由被申、肝煎トモへ
 被致吟味候へハ、惣体様付仕候儀、為究竟無之由申候
 付、仰出帳ヲクラセ候へトモ無之由申候旨承候間、宝
 永三戊年江戸ヨリ被仰出候、於御国月番御用人座ニテ
 被仰渡、能覚罷在候間、右年間ノ仰出帳ヲ繰可被見ト

申達、右年間ノ帳面見合候へハ、成程我等⑩寛ノ通有之

候通⑪之、扱々物覚強キ生付ノ由肝煎トモ申候由、物頭ヨ

リ承、則其ヲ以被申渡候、皆々様付ニ罷成候、然トモ

頃日ハ又如本罷成タルニハ有之間敷哉、是ハ昔ヨリ乱

安キ事ニテ有之候、

一七五八

写

一於八百(齊宣側室)

右、殿文字相用候様被仰付候、

右之通被 仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝

手方へ可相達候、

辰八月 文化五年歟

将監

一七五九

一寛二郎殿御事(齊宣男忠念)

(重賞家)

此節島津若狭殿養子被 仰出候付テハ、

此已来御同列方御同様、諸書付其外何篇殿文字ノ筈候、

此ノ旨諸向へ為心得可申聞置候、

文化七年四月

(島津久備)
安房

元文四年未四月

御名順

一七六〇

一 御名ノ御順・様文字、左之通、

一 御名ノ御順・様文字、左之通、
〔分題〕
一 姫君林 太守林 隅州林 御前林 菊姫林
(重年室) (重年室) (重年室) (重年室) (重年室)
(綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室)

〔分題〕
一 姫君林 太守林 隅州林 御前林 菊姫林
(重年室) (重年室) (重年室) (重年室) (重年室)
(綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室)

右之通表方へ致通達、御側方・御勝手方へハ写ヲ以相達、与中并諸外城へモ不洩様可申渡候、

寛延三年午四月

(權山久初)
主計

一七六一

一 信證院様 於須磨様 於栄様 於徳様
(綱貴側室) (吉貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室)
(吉貴側室) (吉貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室)

右、御前様ヨリ 於徳様ヲ 御妻子ニ被成度旨被 仰遣、去廿四日於磯 於徳様へ御直被遊 御意候、向後

〔分題〕
一 信證院様 於須磨様 於栄様 於徳様
(綱貴側室) (吉貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室)
(吉貴側室) (吉貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室)

一七六一

一 於敬様御名御順ノ儀、
(重年室) (重年室) (重年室) (重年室)
(綱貴側室) (重年室) (重年室) (重年室)

被成御用候へトモ、以来ハ真合院様御次ニテ此御ノ字御用候様被 仰出候旨被仰渡、

明和八卯八月廿四日

一七六三

一 於千萬様御名御順ノ儀、
(重年側室) (吉宣実母) (重年側室) (重年側室)
(綱貴側室) (吉宣実母) (綱貴側室) (綱貴側室)

方名順ノ儀、心鏡院殿次ニ被仰付候段被仰渡、

安永四年未六月三日

(島津久備)
仲

一七六四

一 於篤状御事、
(重年室) (後) (家齊) (後) (家齊)
(綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室) (綱貴側室)

拜領候付、一橋へ被对格別御取持被相改、御順ノ儀ハ 太守御 茂姫御 虎寿丸御ト被 仰出、此様ノ字被遊 相用候様被仰渡、

安永五年申八月七日

一七六五

一御内証様
(重妻御室)

右、被為対 西丸、御取持 御前様御同様ニテ、御名

順 (重妻女) 牧姫様御次、此様ノ字相用候儀ハ只今ノ通被仰付

候旨、被仰出候段被仰渡、

天明三卯正月廿一日

一七六六

一御内証様御事 御部屋様

一於千萬様御事 御内証様

右ハ、思食被為在、右之通被 仰出候条、此旨表方へ

致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

寛政元酉八月

(一七二二号文書に同じ)

一七六七

(重妻女、佐土原島津忠持室)

一明姫様、御婚姻以後迎モ御格式等其外、此御方ニテハ

是迄ノ通可相心得候、三田ニテ御内輪ノ儀ハ彼御方御

仕向ノ通可有之候旨被 仰出候段、申来候旨被仰渡、

寛政元酉六月

一七六八

(齊宣) 一太守様 中将様 御前様

(重妻男忠厚) 雄五郎様 (重妻男久能) 時之丞様 御部屋様

右之通、御名ノ順被仰渡、

寛政亥四月 (三年カ)

一七六九

(継豊) 一太守様 (吉慶) 総州様 (宗信) 御若子様 御女子様方

右ハ、何ソニ付 御名書、右之御順ニ相認可申候、御

使ノ節 御勇健状等ニモ右ノ通相認可申候、

一江戸ヨリ御使ノ節、勇健状ノ儀モ 御若子様ノ御名ノ

順ニ書認可申候、

一 御若子様御方御役人ハ、総州様御方御役人ノ次ニ書載可申候、

右之趣、月次御礼罷出候面々へ可致通達候、以上、

享保十三年申七月

(島津久實)
中務

一七七〇

一 諸家ノ内へ、御入興等ニ被為入候御女子様、御名順被

究置候儀無之候ニ付、表向ハ家格ノ無差別、御出座ノ

御順通被仰付旨被 仰出候条、此旨向々へ可申渡候、

享和二年戊七月

(赤松則決)
市正

一七七一

一 若殿様へ (齊興) (池田齊邦、鳥取) 松平相模守様御妹 弥姫様御縁与、御願通

被仰渡候付、御縁女様卜奉称、御順ノ儀ハ、若殿様

御次ニ被 仰出候旨被仰渡、

寛政十三年酉正月

一七七二

一 淨岸院様 (繼豊繼室竹姫) (重妻) 太守様 御前様

右之通被仰出、其外様御名順相替儀無之旨被仰渡、

明和七寅六月

一七七三

一 於トメ殿 (繼豊御室、重年実母)

右、座席連名於巖殿上ニ被仰付候、

寛延四年未閏六月

主膳

但、重年公 御家督ニ付、

一七七四

一 公方様 御台様 若君様 (家治養女、紀伊治宝室) 淑姫君様 (家齊女)

右之通御順候旨、被仰渡候段申来候条、可承向々へ可

申渡候、

寛政四年子八月

(島津久視)
求馬

一七七五

一御名御順ノ儀、 太守様 御隠居様 御前様 若殿様

ト相認来候ヘトモ、 公辺・他所向ヘ相掛候節ハ、

太守様 若殿様 御隠居様 御前様ト 御名順相認候

様被仰付候、尤、御内輪ニテ者是迄ノ通被仰付候条、

此旨可承向ヘ可申渡候、

文化五辰三月十日

(顯姓入庵)
信濃

一七七六

一太守様 御隠居様 若殿様 御前様

右之通、 公辺向・他所・御内輪トモ 御順被相定候、

一七七七

一太守様 御隠居様 御前様 若殿様

但、御幼少ニテ御官位無之内ハ右之通ニテ、御位官

被為在候ヘハ 御前様ヨリ頭ノ御順ニ被相定候、

一大御前様 御前様 若御前様

右、御夫人様ノ御事故、向後ハ右之通被相定候、

右ハ、御名御順ノ儀、先達テ申渡ノ趣有之候ヘトモ、

向後右之通被相究置候、

文化五年辰六月

(鎌田政興)
典膳

一七七八

一虎寿丸様御名御順、 御前様御次被 仰出候事、

(齊直)
安永三年午五月

一七七九

一寛二郎様御名御順、^(空目、マゴ)御次ニ被仰出候条、此旨表方

ヘ致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可相達候、

寛政十一年未五月
(川上久政)
久馬

一七八〇

一御縁女様御順、 中将様御次被仰出、向後此御ノ字相

認候様被 仰付候旨申来候条、向々ヘ可致通達候、

寛政九巳五月
(兼別唐色)
大炊

一七八一

一 雄五郎様御妾服ニ先達テ御女子御出生、於禮様卜御名

被進、今般松平但馬守様御養女御届被仰上、先月二十

九日彼御方へ御引越無滞被相濟候段申来候、

一 御名順ノ儀、(斎宣女) 操姫様御次、書付等ニモ其通相認候様

被仰付候、

一 御名(文)字ノ儀、人々心得ヲ以可致遠慮候、

右之通、不洩様可致通達候、

寛政八年辰三月

(市田教因)
勘ケ由

一七八二

一 公方様 御台様 若君様 種姫君様 淑姫君様

右之通御順候旨被仰渡候段申来候条、向々へ可申渡候、

(重孝) 中将様 御前様 (忠厚) 雄五郎様 (久肥) 時之丞様 御部屋様

右之通、御順等ノ儀、以来書付等ニモ相認候様申来候、

此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

但、諸郷ノ儀ハ、地頭・領主・大番頭へ可申渡候、

寛政三年亥三月

(島津久親)
求馬

(比志島範重)
要人

(伊勢貞矩)
播磨

一七八三

一 此節 御隠居 御家督ニ付、太守様御儀 御隠居様、

若殿様御事 (斎興) 太守様、高輪御隠居様御事ハ (重孝) 大御隠

居様卜奉称候、左候テ、御内輪ニテハ 太守様 大御

隠居様 御隠居様 大御前様卜 御名順被 仰出候段

申来候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へ可相達

候、

文化六巳七月

(島津久泰)
将監

一七八四

一 写

今度 御隠居 御家督御願ノ通被 仰出候間、薩州

様ハ、(太守様卜脱力) 太守様ヲ隅州様可奉称候、御名御順ノ儀

ハ、(宗信) 太守様 (吉寛) 総州様 (維豊) 隅州様卜申上事候、書付等ニ

モ其通可仕候、末略、

寛保三年亥十二月十一日

(島津久郷、後主鈴久品)
右平太

御機嫌伺

一七八五

天和四年子二月、平山勤兵衛日帳ノ内

一二月廿日、上野へ 公方様御参詣 還御、御伺御機嫌

御使者相勤候、御城御目付衆宮城主殿殿へ申上、御

逢被成、御機嫌無御別条候、後刻御側衆迄被伺 御

機嫌候段可被仰達由承、此旨高輪御用人衆迄申越候、

一七八六

天和三年亥五月廿四日、右同

一地震以ノ外御座候付、諸大名衆ヨリ為^(伺脱カ) 御機嫌御使者

両御城下へ被差上候、四品迄ノ御衆ハ 御城へ、四品

以下ノ方ハ御月番御家中御宅へ使者参由候、此節ノ儀

御忌中ニテ候ニ付 御城へハ御遠慮候付、大久保加賀^(忠朝)

守殿御宅へ伊勢十兵衛・私罷出合ノ旨、角数馬へ申達
候、^(光久) 中將様御使者十兵衛殿、^(綱重) 薩州様御使者勤兵衛
相勤申候、

一七八七

天和三年亥閏五月、右同ノ内

一閏五月十三日、若君様御不例ニ付テ諸大名衆不残西

ノ丸へ御登 城、御月番豊後守様へ御使者^(相) 勉候、

御口上、若君様御不例ノ由、御登 城仕、可奉窺

御機嫌儀ニ候へトモ、持病ノ筋痛申候付テ以使者奉伺

候、最早御登 城ニ付テ取次池川八郎兵衛へ申達候処、

早速 御城へ可申越旨被申候、

一七八八

貞享三年寅二月、右同ノ内

一二月廿八日、去ル二月八日 公方様上野へ 御参詣、

御機嫌御伺ノ御飛札一通從 薩州歟 御老中方へ 御

連署ニテ参候、助左衛門殿ヨリ使来ノ日数相考可差出

旨、手紙相添五代納右衛門ニテ被遣候、

一七八九

右同

一二月十六日、今日本田仲兵衛殿表ノ御機嫌伺ノ御使者

被相勤候、(伊勢貞良)十兵衛殿案内、御献上物御箱着一種御老中

迄被相勉、(牧野成貞、側用人)備後守様其外ハ別御使者如例被遣候、

一七九〇

貞享三年寅四月、右同

一四月二十日、四ツ時 公方様上野へ 御仏⑧参還御、伺

御機嫌ノ御使者御城へ罷上リ候テ相勤、此旨芝へ申上

候、

一御手紙致啓達候、今日上野 御仏詣ニ付、還御已後窺

御機嫌ノ御使者御月番戸田山城守様(忠昌)へ罷出相勤候、松

平加賀守様・松平伯耆守様何レモ御並ノ(空白、マ)衆御使者同

前ニ御逢被成、 御機嫌御別条無御座旨可申上旨被仰

候、以上、

四月廿日

平山勘兵衛

喜入次(久恵)兵衛殿

村田為左衛門殿(経忠)

福屋助左衛門殿(兼忠)

名越主水殿

御献上物

一七九一

天和三年亥十二月、平山勘兵衛日帳ノ内

一十二月十八日、今未明 御城へ罷上リ御献上ノ御小袖

松平因幡守殿御当番ニテ相勤候、御台様へ御献上物(信興、奉者番)

首尾能御座候、御広敷番頭松平所左衛門殿(次倫)へ星野小兵

衛ヨリ相渡候、

一御小袖十ヲ 御目錄有

右、公方様へ為歳暮ノ御祝儀、

一白銀十枚 御目錄有

右、御台様へ同断、

一七九二

貞享三年寅二月、右同ノ内

一後西院様御一回忌ニ付、御香奠ノ儀方々承合候へトモ

不相知、高輪御日帳 法皇様御一回忌ノ御時ノ儀可有

之ト申越候へハ、右同帳ニ無之由、次兵衛殿ヨリ承候

ニ付、昨日松平土佐守様へ留守居仙石猪太夫殿宅ニテ

何レモ請候処、^{⑨談}法皇様御一回忌候時御香奠無之候ニ

付テ、此節弥以無之由、何レモ被申候、此旨高輪へ申

上候、

御進覽物

一七九三

天和三年亥十二月、平山勘兵衛日帳ノ内

一御樽代千匹

一箱着一種ツ、

右、堀田筑前守殿(正俊、大老)・大久保加賀守殿(忠朝、老中)・戸田山城守殿(忠昌、老中)・

阿部豊後守殿(正武、老中)

右口上、歳暮ノ為御祝儀目録ノ通致進覽候、御返事御

相応、

一七九四

同寅正月、右同ノ内

一御樽代五百匹

右、年首ノ為御祝儀被遣候、

一御樽代五百匹

右、歳暮ノ為御祝儀被遣候、

旧臘態ト不被遣、年首御同前ニ被遣候、

右両条、^(水戸吉亭室、八重姫)養仙院様へ御口上、年首ノ御祝儀歳久御祝

被成被進候、歳暮ノ御祝儀年内可被進候へトモ、何ソ

ニ付被仰儀モ祝候テ同前ニ被遣候由、取次神野三右衛

門殿、御返事御相応、歳暮ノ御祝物ノ儀、何方へモ御

断被仰候付、御請不被成候由被申候ニ付、相受取、其

首尾渋谷周防殿へ申達、御日帳留置、物奉行所引付ニ

テ御蔵へ相納候、進物付御道具ノ者兩人被召置候、本ノマ、

一千鯛一箱

一御樽代五百匹

右、松平若狭守殿御奥方様へ年首ノ御祝儀以使者被仰候品迄被遣候、取次岩田戸左衛門殿、御返事御相応、

一御太刀・金馬代十両、年首ノ御祝儀ニ被遣候、

右両条、伊勢兵庫殿へ御口上右同断、取次今来次兵衛①成

御返事御相応、

一御太刀・金馬代十両、年首ノ御祝儀

一箱肴、干鯛、御樽代五百匹、歳暮ノ御祝儀

右、松平隠岐守様へ御口上右同断、取次山元瀬兵衛殿、

留守申置候、請取有之、

一千鯛一箱ツ、

一御樽代五百匹ツ、

年首ノ為御祝儀、島津式部殿・島津万吉殿へ被遣候、

一千鯛一箱ツ、

一御樽代五百匹ツ、

右、歳暮ノ為御祝儀、右御両所へ被遣候、口上右同断、

取次村田八右衛門殿、

一二月十八日、御使者被仰付相勉候、

一空白、ママ
□□二箱

一赤貝空白、ママ
□物一壺

一砂糖漬曲物一

一琉球泡盛一壺二十五盃入

右、酒井鞆負祐様へ御口上、其後御物遠ノ至候、御堅忠盛佐

固ニ可有御座珍重存候、来廿一日御老中様方御招請目

出度奉存候、依之、目錄ノ通致進入候、其節御勝手ニ

参り候ニテ旁可得御意候由ナリ、取次加藤①源五左衛門

殿、御返事御相応、弥廿一日御老中様方申入候、必御

勝手ニ御出可被下旨、御日帳ニ留置ナリ、

一七九五

貞享三年寅二月、右同ノ内

一酒井遠江守様、大切ノ御病氣ニ付、鞆負様御暇被仰上、忠盛

今日御立ニ付テ、御羽織等被遣候、若狭へハ御飛脚被

遣候、薩州様へ御中途迄右御気色ノ通被仰越候、

一七九六

右同

二月朔日、有馬左衛門佐様御妹、昨日治左衛門様へ御婚礼相済申候、御祝物二種一荷、左衛門様へ被遣候、

御拝領物

一七九七

天和三年亥四月、平山勘兵衛日帳ノ内

一四月十二日、大久保加賀守様ヨリ、明朝五ツ前為上使(志願)

戸田山城守様御出ノ管ニ候、上御屋敷へ薩州様御(綱貫)

入被成、御待請可被成候、此旨 御城ヨリ為被申越由

候テ右家来衆ヨリ手紙参候、依之、芝高輪へ伊勢十兵(貞以)

衛方ヨリ早速被申上候、同十三日六ツ過、戸田山城守

様御家来福井源(空百、ママ)并歩行士衆十人ニテ御拝領ノ御時服

五十持参、此方ノ歩行衆罷出、右ノ台并長持請取、於

使者ノ間台ニ時服右ノ十人ノ人数ヨリ撰被申候へトモ(御讀)

早々埒明不申候ニ付、手伝頼ノ由源(空百、ママ)被申、騎馬ノ衆

ヨリ手伝被仕候、左候テ則右ノ家来衆被罷帰、山城守

様五ツ前御入、則御帰宅、五ツ半 薩州様山城守様へ

為御礼御見廻、御供相勤候テ、則島津図書殿(久竹)從 中将

様ノ為御使者被遣、勘兵衛御案内仕候、薩州様御儀

直ニ 御本丸へ為御礼御登 城、相良仁右衛門ハ御供

相勤ラレ候、図書殿儀ハ御厩衆齋藤兵右衛門所へ御寄

勘兵衛モ立寄ニテ、後 西ノ丸へ上リ、薩州様御供

仕、御下リノ時分加賀守様・牧野備後守様・堀田对馬(成貞)

守様へ 御遣被成候御供迄相勤候、渋谷周防殿ヨリ御(重悠)

馬御拝領可有之候、諏訪部文九郎殿へモ遣物、御中間

ニ被下物、御馬為牽候テ被遣候、御老中ヨリノ御使者

へ被遣物等 御前ニ被伺候処ニ、可然由仰出ノ御書付

一通并未酉ノ年ノ先例覚書被遣候間見届、我々了簡ノ

通可申上旨、手紙ニテ承候、 中略、

被下物トモ御書付左ニ記ス、

一 上布二拾匹

一 着^{②價}

文九郎殿へ

一 銀五枚

御老中ヨリ御馬被為牽候御使者

一 銀一枚

御中間へ

右之通可被下候由仰出ノ書付、川野三太夫ヨリ周防殿

へ遣候ヲ此方へ被遣候、

一同十六日、今朝五ツ前御月番加賀守様ヨリ御使者片桐

平左衛門ニテ御拝領ノ御馬為御牽候、薩州様御玄喚

迄御差出、落縁^(薄力)ニテ御手綱御取御次被成、^{①頂}厩屋別当財

部作右衛門御馬請取、手綱取申候テ差上ケ御次^{①頂}ニテ候、

依之、右使者為挨拶可罷出ノ旨、桂李^(忠保)之助殿ヨリ承、

罷出相勤候、

島津家歴代制度卷之二十九

享和
安永

御元服

諸人元服

家筋連名

御姓氏

諸家姓氏

名遠慮

御元服

一七九八

一 御当家御元服兩条有之、御家御伝来ノ御元服ハ以前御
中荆ノ御元服ト唱候、天明四年辰十一月二日今ノ名ニ

被相改候、上様十二三ノ御頃被遊、御中荆、御髭①髭ヲハ
ヤサレ①候御式、鎌倉御代ヨリノ御伝来ノ由、御先々
別段ニ有之、公義御元服トハ格別ノ事ニ候、

一文治元年六月十五日、忠久公於鎌倉龜岡若宮宝前
御元服、畠山次郎重忠①加冠被任左兵衛①尉候、是御伝来ノ
権輿歟、公義向御元服ハ右已後ノ事ニテ、初テ御官位
御賜ノ御事ト相見得候、夫故、御一字並御道具御拝領
ニテ、則從四位下並被任侍從候、礼ニ初テ服官政ト有
之、此儀ニテ可有之哉、

一 虎壽丸様天明四年辰九月廿七日、御元服、(重要)中將様御
加冠、島津伊賀久金御理髮、御名奉称、又三郎様、御
実名、(後、齊宣)忠堯公候、乃從、中將様御大小被進之、從、又
三郎様御太刀一腰・折十六合・御樽五荷・白木弓二十
帳・征矢二百筋御進上、御礼被仰上候、御代々様大
同小異有之候ヘトモ大底右ノ御振合ニテ候、
一 御中荆御元服ノ事、以来、御家御伝来ノ御元服ノ御式
ト相唱、書付等ニモ相認候様被仰渡、
天明四辰十一月

一七九九

享和二年戊

一若殿様御事、先月九日 (齊意) 太守様御加冠、御家御伝来ノ

御元服ノ御式有之、御名 又三郎様ト奉称、御作法

万端御先格ノ通、首尾好被為濟候段御到来、右ニ付、

御一門・諸大身分・月次御礼罷出候面々、諸士並諸⑦与

与力、移地頭・諸所地頭代・抑、諸郷々土年寄・組頭

迄、御祝儀被仰渡、

享和二年十一月

元服

一八〇〇

一御一門四家・一所持・一所持格・寄合・寄合並・小番

迄、夫々元服ノ格式被定置、御一門四家ハイツレモ御

直元服ニテ⑧候、一所持以下ハ、御直並御前元服ノ御礼、

御内証元服等、不同有之候、

一御直元服ハ、上様御加冠ニテ御家老理髮、

一御前元服ハ於、御前元服被仰付、御家老御名代加冠ニ

テ、奏者番理髮ニテ候、以前御名代元服ト唱候処、元

文二年巳七月、御前元服ト被相改候、

一元服ノ御礼ハ於脇方致元服、即日登城、御礼申上候、

以前脇元服ト唱候、

一御内証元服ハ於梅ノ間元服被仰付、御家老加冠ニテ、

理髮御側御用人、以前此式無之候処、元久二年巳七月

島津權左衛門嫡子島津孫四郎・相良源太夫嫡子相良新

助へ初テ被仰付、例式相成候、

一八〇一

御直元服ノ次第

一元服被仰付候者、理髮ノ御家老召列、御用人相添、御

礼ノ席ニ罷出候節、御用人モ幼名披露可仕候、御礼申

上候砌ハ理髮ノ御家老少シ引下リ居、御礼相濟、則元

服人、御前へ召列、髮御ソキ被下候、

一元服相濟、児烏帽子・素袍着仕罷出候節、御目錄頂

戴被仰付候、御取次理髪ノ御家老、

一進上物備 御前、拝領ノ仮名・実名進上目録ニ相添、

御礼申上候、

一於 御前御三献被下、 御盃頂戴仕候節、御刀拝領、

御取次理髪ノ御家老、

右之通被仰付候段、被仰渡候、

宝永(五年カ)子五月二日

一八〇二

御名代元服ノ次第

一御名代御家老、御書院二之間上敷居涯御勝手ノ方へ着

座ニテ元服人髪ソキ可申候、

但、御名代御家老、支度不洗物半袴、^㉞折みたれ△

箱表御小姓可持出候、支度熨斗目・長上下、

一理髪、奏者番可相勤候、元服人理髪列出、二之間末ヨ

リ二畳目ニテ御礼、奏者番披露、御名代ノ前ニ召列、

髪ソキ引入可申候、

但、理髪人奏者番、支度熨斗目・長上下、

一所持・寄合迄ノ人嫡子ハ、御直元服・御名代元服ニ

テモ元服ノ御礼迄ニテ候、御礼ノ席ニ之間末ヨリ二畳

目ニテ御礼、寄合並ヨリ御直元服並御名代元服ノ御礼

ニテモ諸士同前ノ御礼席、二之間末一畳目、寄合已上

之二男ハ諸士同前、

一天井折三合・御樽二荷、二ノ間御庭ノ方へ相備可申候、

一御太刀・銀馬代一枚、奏者番御太刀二之間末ヨリ四畳

目ニ置、元服人二ノ間末ヨリ二畳目ニテ御礼申上、引

入、天井折・御樽可相下候、

但、披露ノ奏者番、支度熨斗目・長上下、

一元服人理髪召列、二ノ間御庭ノ方末席へ着座、理髪人

附添可罷出候、

一土器ノ御盃三方ニ受、二ノ間上敷居涯へ相立、元服人

へ計御三献被下、御土器 御前へハ不被召上、御名

代ノ御家老ヨリ被下、右御土器二ノ間上敷居涯ヨリ三

畳目ニ相下ケ、元服人罷出御盃可被下候、

但、御名代ヨリノ御盃元服人罷出被下候席ハ、一

所持・寄合並其外ニテモ、御名代元服ノ人ハ二ノ

間上敷被仰渡候間三疊目、配膳表御小姓、支度熨斗

目・長上下、

一 拝領ノ御刀、奏者番鶴ノ間ヨリ御名代着座末ノ方ヨリ

持出、二之間上敷居涯ヨリ三疊目ニテ頂戴為仕、霧ノ

間御勝手ノ方へ相下ケ、拝領ノ刀為差、二之間末ヨリ

二疊目ニテ御礼仕、御盃持下リ本ノ所へ着座、御三

献相下ケ候テ退座、

但、御刀持出候奏者番、支度不洗物半上下、

一 右相済、元服人親御太刀・馬代青銅百足進上仕、悴元

服ノ御礼可申上候、

但、支度熨斗目・半上下、

一八〇三

脇元服御礼之次第

一天井折三合・御樽一ツ、御書院二之間御庭之方へ相備

置、御太刀・馬代銀一枚、奏者番御太刀二之間末ヨリ

三疊目ニ置披露、

但、奏者番、支度熨斗目・長上下、

一元服人奏者番召列、二之間於席末御礼申上サセ、列下
リ可申候、

一 右相済、奏者番元服人ヲ列出、二之間席末ニ扣居候節、

拝領ノ御刀、奏者番鶴之間ヨリ当人着座上ヨリ持出、

上敷居涯②より三疊目ニテ頂戴為仕、鶴ノ間御勝手ノ方へ

相下ケ、拝領ノ刀為差、二之間席末ニテ御礼仕、引入

可申候、

但、御刀持出候奏者番、支度不洗物半上下、

一 御名代元服並脇元服被仰付候人へハ、都テ御加冠ノ御

書付ハ不下候、

右之通、正徳四年八月廿七日被仰出、

一八〇四

享保十六亥四月廿八日左ノ通

二男迄御直元服

島津兵庫殿

島津玄蕃殿

島津周防

島津左衛門

嫡子御直元服・二男御名代元服

島津大藏殿	島津図書	島津中務殿
島津藤次郎	島津至殿	島津小平太
島津市太郎	新納四郎	島津筑後
嫡子御直元服		
川上一学	樺山主計	桂太郎兵衛
島津郷太夫	島津求馬殿	喜入主膳
町田郷九郎	伊集院藏人殿	島津帶刀
島津内記	北郷四郎	島津市太夫殿
島津猛太夫	大野七郎太夫	吉利至右衛門
島津内藏	伊集院徳袈裟	種子島彈正殿
島津仁十郎殿	顯娃長左衛門	柵寝内記
入来院主馬殿	比志鳥隼人殿	肝付典膳
菱刈孫兵衛	諏訪次郎左衛門	島山式部殿
鎌田小藏次 ^⑨ 摩	伊勢兵部	義岡左平太
島津彦太夫	島津右平太	島津登
川上縫殿	新納次郎四郎	樺山長太夫
新納五郎右衛門	町田宇右衛門	伊集院十藏
山田新助	鎌田源左衛門	平田新左衛門

仁禮十兵衛 鎌田十郎 比志鳥小太夫
 諏訪仲右衛門 土持新八 渋谷四郎左衛門
 御名代元服
 川田與右衛門 三崎平太 郷原金太夫
 本田新次郎 秩父十郎兵衛 肝付米千代
 元服ノ御礼
 桂治太郎 種子嶋織部 川上助六
 本田六左衛門 高崎惣右衛門
 右ハ、御直元服・御名代元服ノ御礼申上候付テハ、進
 上物先格之通被仰付管候ヘトモ、御儉約ノ故、進上物
 其格式被定置候、此節ヨリ先五ヶ年品ヲ輕被仰付候、
 依之、左之通被究置候、
 一天井折十二合 ヌリ 代銀一匁二分
 右御借物代銀上納被仰付候、
 但、水玉^⑩とんほりは自分調△、
 一同六合 ヌリ 代銀六分
 右同断、
 但、右同断、

一 右同三合 ヌリ 代銀三分

右同断、

但、右同断、

十二合・六合・三合ノ盛具

一 カンモリ二合

但、白モチ、

一 カウ類モリ二合 マンチウ 山イモ カライモ ナシ

モ、^⑨かき△ピワ ミカン 青梅 九年母

一 肴モリ二合 シビ ソウヂ キス アチ 黄小鯛

十二合ノ盛具、右ノ内ヨリ、外ニ鳥、

但、色付ヤキ、シビ・ソウチノ内、盛留ニキシ少々

可用之、

右ハ、現ノ折進上ノ節ハ右之通可被相心得、都テ代銀

上納ノ儀ハ左之通、

一 銀十六匁^{九カ}

内、十二匁三種代、七匁二荷代、

三種二荷代

一 銀十一匁

内、九匁二種代、二匁一荷代、

二種一荷代

一 銀二十二匁

内、十二匁二合代、十匁五荷代、

天井折十二合・御樽五荷代

一 銀十一匁

内、五匁六合代、六匁三荷代、

天井折十六合・御樽三荷代

一 銀六匁

内、二匁三合代、四匁二荷代、

天井折三合・御樽二荷代

一 銀二匁

手樽一荷・御肴一折代

一元服並親ヨリ御太刀・銀馬代進上仕来候人ハ、御太刀

一 腰・御馬代銀六匁、

一 右同、青銅・御太刀進上仕来候人ハ、御太刀一腰・青

銅代銀三匁、

一 益之助様御方へ進上ノ節ハ、右被定置候通代銀上納可^(宗信)

有之候、右之通被仰渡、

享保十六亥四月

一八〇五

一 御名代元服被仰付人ヨリ御名代ノ人・理髮ノ奏者番へ
祝物ノ儀、向後御名代ノ人々ハ当分被究置候三奴ノ青
銅・太刀遣、理髮ノ方々ハ肴一折遣候様被仰付候、
享保十八丑十一月廿七日

一八〇六

一 天井折ト唱候儀、本不相究事候間、向後ハ天井ノ二字
被相除、折ト唱、書留等ニモ可致旨被仰渡、
元文元辰八月廿三日

一八〇七

一 只今迄、御名代元服ト唱、書付等ニモ致来候ハ、御
前元服ト被相改候、御直元服被仰付筈ヲ、此節ノ通、
玄蕃殿 御名代ニテ被仰付候元服ヲ 御名代元服ト相

唱、書付等ニモ可致候、

一 島津權左衛門嫡子島津孫四郎・相良源太夫嫡子相良新
助へ先頃被仰付候元服之格唱等、左之通被仰付候、

一 御内証元服

右、元服ノ御礼ノ次ニ可書載候、御家老加冠ニテ元服
席ノ儀ハ、其節ハ御意次第可被仰付候、不及進上物、
御内々ニテ 御目見、元服人支度半上下、
右之通書記候様被仰渡、
元文二巳七月

一八〇八

一 御直元服被仰付、御道具拜領ノ節、御家老ヨリ相渡事
候へトモ、差支候節ハ若御年寄ヨリ相渡候様、被仰付
候旨被仰渡、

宝曆七年丑三月日

一八〇九

一 御直元服 御前元服 元服ノ御礼

右都テ有来通、

一 御内証元服

右、御家老加冠等ハ有来通ニテ、御礼ノ進上物相納可

謁御家老候、

一 小番已下初テノ 御目見ニ罷出候程ノ面々ハ、追テ

御着城ノ節一統ノ 御目見可被仰付候、其節ハ弓進上

已上一列^⑧其以下一列△ト可被相分候、尤、御直元服

ノ御礼仰御付候家柄ノ面々迎モ 御名代ニテ相濟候分

ハ右一統ノ御目見可被仰付候、

一 初テノ 御目見相濟候面々、家督御礼ノ儀ハ、其家格

ノ進上物相納、御太刀進上^{⑨以上}ハ可謁御家老、其以下ハ

可謁奏者番、

右之通、御留守年々御礼事計相定候旨被仰渡、

天明五年巳五月

(島津久金)
伊賀

一八一〇

一元服願ノ人段々有之筈候処、 太守様当秋ヨリ 御滯

府御願之通被仰渡、未 御下国ノ御程合モ不相知候間、

依人ハ年齢モ相過、旁可及迷惑候条、 思召ヲ以、当

分ヨリ 御名代ニテ元服可被仰付旨被仰出候旨被仰渡、

天明五年巳八月廿一日

一八一

一 御内証元服ノ儀、御家老加冠等ハ有来通ニテ、御礼ノ

進上物相納、可謁御家老旨被仰付置候、右向々モ追テ

御目見可被仰付候、尤、御直元服以下初テノ 御目見

ニ罷出候程ノ面々、進上物相納、御礼被仰付候分、

御下国ノ上一統ノ 御目見可被仰付旨被 仰出置候、

右面々ノ内月次 御目見ニ罷出候分ハ家格モ相替候付、

其家格ノ席々ニテ人別ニ 御目見可被仰付旨被仰渡、

天明五年巳八月廿二日

(島津久金)
伊賀

一八二

一 御留守中、 御直元服以下初テノ 御目見、進上物相

納、御礼被仰付候分ハ、 御下国ノ上、一統ノ 御目

見可被仰付候、右向々ノ内、月次 御目見罷出分ハ家

格モ相替候間、其家格ノ席々ニテ人別 御目見被仰付

候段ハ先達テ申渡有之候、其外ノ向々⑨面月次 御出座御

席於敷舞台 御目見可被仰付旨被仰出、右ニ付、

御中段涯御疊一帖分明置、三帖目ノ上ヲ限り、夫ヨリ

末へ相揃可申候、猶又別紙絵図面ノ振合ヲ以致吟味、

其節々被申出候様奏者番へ申渡、可承御役々へモ可申

渡候、

但、一代与力ノ儀ハ是迄ノ通、御免駕等ノ御席御（序之）

通掛ノ 御目見可被仰付候、

天明六年十一月 （島津久邦）
豊前

一八一三

一当年元服願申出合ノ面々⑨向有之筈候処、 太守様御暇被

為蒙 仰候テモ 御免駕暫 御見合御積ニテ、 御下

国御程合モ不相知、依之、年齢相過候向モ可有之候間、

思召ヲ以 御名代ニテ元服可被仰付旨被 仰出候、尤、

御内証元服以下初テノ 御目見等ハ被定置候通 御留

守年ノ振合ニテ被仰付筈候、

右、向々へ可致通達候、

享和三年亥四月 （赤松別次）
市正

一八一四

一御留守中御直元服、初テノ 御目見被仰付候面々、

御下国ノ上 御目見被仰付筈候、依之 御留守中右通

被仰付候儀、追テ 御下国ノ上 御目見被仰付迄ノ間、

右向々⑨面、家督継目又ハ出入等其外何ソ相替候儀有之候

ハ、御用人へ相付、時々届可申出候、此旨向々へ

可申渡、

享和三年亥九月 （島津久備）
安房

一八一五

享和二年戊

一奥向並諸⑨御役人、初テノ 御目見並家督継目・養子成

等ノ御礼申上候節、中紙進上ノ内モ現ニ罷出候様被仰

付候間、 御留守年右ノ御礼被仰付候節ハ、現御礼ノ

形ヲ以、謁奏者番被仰付候、尤、初テノ 御目見ハ格

別ノ事候間、謁ニハ不仰付候、此旨可承向々へ可申渡候、

戌九月

(島津久泰)
將監

一八一六

一元服被仰付候人、素袍・袴致着罷出候節、末広持候儀モ有之候へトモ、無官ノ者ハ持不申筈ノ儀ニ候故、向後無用可致候、屹被仰渡儀ニテハ無之、尤御前外常々扇子持候ハ不苦候、此旨承知仕置候様御役々へ可申聞候、

元文二巳十月十六日

主殿

一八一七

御直元服ノ次第

一某日兒某甫十歳、造於朝 太守公臨 御書院 御家老某贊之、始拜謁公、奏者某唱童名、幼名△、直進至公之膝下、拜伏、公手自裁髮、御家老某為理髮、既退至座之中間之時、使侍席国老某授加冠

折紙、賜名於某、拜戴之、退、重出席、進上折六合美酒六樽御大刀馬代、拜賜元服之辱、奏者某唱新名、拜畢退而復出席、乃賜着座及御盃、且拜戴短刀、下席帶所貽之刀、四拜御前、凡其每拜贊者同前事、畢還席罷出、

諸家元服進上物並家筋連名ノ次第

一八一八

御一門

一二男迄御直元服、当玄蕃殿御直元服ノ節、御太刀一腰・御刀一腰・現御馬・御折十二合・御樽五荷進上有之候、一御太刀・三種三荷・御馬代銀ハ三枚二枚一枚、依事相替候テモ不苦由被 仰出置候、
一二男ヨリ名字末川、久之御字、三男ヨリ久ノ御字遠慮、
(末川) 御一門 島津備中殿
一二男迄御直元服、寛保四年子十二月十四日於 磯御屋

敷、島津登御取次ヲ以、周防殿御家二男迄御直元服被

仰付候旨被 仰渡、

一御直元服ノ節、御太刀・現御馬・弓十張・征矢百本・

三種三荷進上有之候、

一御太刀・三種三荷・御馬代銀ハ三枚二枚一枚、依事相

替候テモ不苦由被 仰出置候、

(朱書)
「御一門」 島津周防殿

一二男迄御直元服、

一御直元服進上物、都テ周防殿同様ニ^①被仰付旨△被

仰渡置候事、

(朱書)
「御一門」 島津因幡殿

一二男迄御直元服、当兵庫殿御直元服ノ節、御太刀一腰・

現御馬・御折十二合・御樽五荷進上有之候、先兵庫殿

二男島津助左衛門嫡子島津徳五郎 御直元服ノ節、御

折六合・御樽三荷・御太刀・御馬代銀一枚進上有之候、

一御太刀・三種三荷、

一二男ヨリ家号村橋、久ノ御字御免、三男已下御家ノ御

字御免無之、

(朱書)
「村橋」 御一門」 島津兵庫殿

右座席ノ次第、同様ノ人家督ノ節ハ周防殿・兵庫・玄

蕃殿ト次第可有之候、当分ハ玄蕃殿上座ニテ候、至以

後モ玄蕃殿・周防殿・兵庫殿ノ通ノ人家督ノ節ハ、御

間柄ヲ以右次第ニ可被仰付候、尤、部屋栖ハ其父ノ席

次第カ其節^①之 人柄ニ可依候、

一八一九
(一八)ハ男行間朱書)
一御一門家ノ座席、其節ノ御間柄ヲ以被相定事候、然ト

モ座順時々相替候テハ家格ノ詮無之候条、以来座配可

忖家格ノ順候、備前殿身分ニ付テハ格別ニ候間、一世

可為上席、其儀前文ノ通可被仰付旨被仰出候段被仰渡、

安永二巳十二月廿九日

一八二〇

一所持一所持格

一二男迄 御直元服、嫡子御折十二合・御樽五荷・御太

刀・現御馬進上、二男御折六合・御樽三荷・御太刀・

御馬代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種三荷、
(朱書)

一年頭御礼、御対面所着座、

〔赤山 御二男家格 大身分〕 島津山城

一 二男迄 御直元服、嫡子御折十二合・御樽五荷・御太

刀・馬代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御対面所着座、

〔村森 御二男家 大身分〕 島津大学

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭、御対面所着座、

〔他腹御長男 一所持〕 川上久馬

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 二男 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一年頭御礼、御書院着座、

〔三崎 御二男家格 一所持格〕 島津大藏

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽五荷・御太刀・現御

馬進上、

一 二男 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御対面所着座、

〔山林 御三男家 大身分〕 島津図書

〔行間朱書〕 島津図書

右 島津周防 島津筑後

右三人ノ通、諸事ノ儀被仰付候間、右格ニイタシ、

座席ハ周防次、筑後上之管候、元文三年午十二月十

一日被仰渡、

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 二男 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御対面所着座、

(朱書)
「倉山 附平山 御三男家 一所持」 島津内膳

一 嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 二男 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御対面所着座、

(朱書)
「九良ヶ野 御三男家格 一所持」 島津主殿

右三家同格、

一 嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 二男 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御対面所着座、

(朱書)
「佐多 達山 御三男家 一所持」 島津本殿

一 嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・馬代

銀一枚進上、

一 二男 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一年頭御礼、御対面所着座、

(朱書)
「谷川 御三男家 一所持格」 島津左中殿

一 進上物都テ前同格、

(朱書)
「三木原 御三男家 一所持格」 島津助之丞

右両家同格、

一 ケ条書都テ右同断、

但、三年^{①ニ}三度ツ、佐多家着座ノ場ニ罷出候、佐

多家部屋栖有之、一所ニ着座ノ節ハ佐多家ノ次ニ三

年ニ一度ツ、着座、

(朱書)
「邦永 御三男家 一所持格」 新納四郎

一 嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御対面所着座、

一 二男、太刀・二種一荷、

〔朱書〕 御五男家 一所持 樺山左京殿

一 嫡子 御直元服、御折十二合・御樽五荷・御太刀一腰・

御刀一腰・御馬進上

一 御太刀・御馬代銀十枚・三種二荷、

一 年頭御礼、 御対面所着座、

〔朱書〕 〔北郷 龍岡 御六男家 大身分〕 島津筑後

一 嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一 年頭御礼、 御対面所着座、

一 二男、太刀・一種一荷、

〔朱書〕 〔御四男家 一所持〕 桂織部

一 右同断、

但、年頭御礼、 御書院着座、

一 二男、太刀、

〔朱書〕 〔権田 御四男家 一所持格〕 島津頼母

一 右同断、

〔朱書〕 〔柳 御五男家 一所持格〕 島津求馬

一 右同断、

但、年頭御礼、 御対面所着座、

一 二男、太刀・二種一荷、

〔朱書〕 〔御七男家 一所持〕 喜入主馬

一 右同断、

〔朱書〕 〔梅本 御七男家ノ 三男 一所持格〕 町田主計

一 都テ町田家同断、

一 二男、太刀、

〔朱書〕 〔黒岡 御三男家ノ 二男家 一所持格〕 島津清太夫

一 右同断、

一 二男、太刀・二種一荷、

〔朱書〕 〔基太村 右同断 右同断〕 島津内記

右両家同格、

一 右同断、

一 二男、太刀・二種一荷、

三男、太刀、

〔朱書〕 〔御六男家ノ 二男家 一所持〕 北郷主膳

一右同断、

但、年頭、御書院着座、

一二男、一種一荷、

三男、弓、

〔朱書〕
〔細瀧 御二男家、
二男家〕

一所持

島津内蔵

一右同、

但、年頭、御対面所着座、

〔朱書〕
〔岩越 右同断〕

右同格

島津矢柄

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

一年頭御礼、御対面所、

〔朱書〕
〔右同断〕

一所持

大野多宮

一右同断、

一二男弓、

〔朱書〕
〔御一男家、三男家〕

右同断

吉利左右衛門

右両家同格、

一嫡子御直元服、進上物右同断、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御書院着座、

〔朱書〕
〔川久保 御三男家、
又二男家〕

一所持格

島津大進

一嫡子 御直元服、右同断、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

一年頭、御書院、

〔朱書〕
〔伊集院家、
庶流〕

右同格

伊集院伊膳

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、御書院御対面所着座、

〔朱書〕
〔一種子島、二男太刀・一種一荷、三男太刀、四男弓〕

〔朱書〕
〔二所持〕

種子島左内

〔朱書〕
〔土岐、二男太刀、三男弓、四男中紙〕

〔朱書〕
〔二所持〕

島津右膳

〔朱書〕
〔右同〕

顯娃内膳

〔朱書〕
〔右同〕

小松式部

〔朱書〕 右同 入来院石見殿

〔朱書〕 一比志島、二男太刀・一種一荷、三男弓

〔朱書〕 右同 比志島要人

〔朱書〕 二肝付、二男太刀・一種一荷・折六合・御樽三・御太刀・馬

代

⑦ 一所持△ 肝付彈正

右七家 御直元服、進上物・年頭御礼、都テ同断、

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

一年頭御礼、 御对面所着座、

〔朱書〕 一所持 菱刈藤馬^⑧

一嫡子 御直元服、進上物右同断、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭御礼、右同断、

〔朱書〕 一所持 諏訪甚六

一嫡子 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

一年頭御礼、 御对面所着座、

〔朱書〕 一川田、二男太刀

〔朱書〕 右同 川田伊織殿

一嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭、 御書院着座、

〔朱書〕 一所持格 畠山数馬

〔朱書〕 右同 鎌田藏人

〔朱書〕 右同 伊勢兵部

右三家 御直元服、年頭 御書院着座、都テ同於畠山

家、

〔行間朱書〕 市田勘解由^⑨

右、御由緒柄付テハ、先年家格ヲモ結構被仰付置候

ヘトモ、此節猶又 思召ヲ以、家格一所持被仰付、

家筋連名伊勢播磨次ニ被仰付候、

寛政元酉十一月

〔島津久邦〕 石見

一八二

寄合

一 嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

一年頭、於 御書院持參太刀ニテ御礼、着座無之、

一 御盃頂戴、

〔御五男家 寄合〕 義岡彈正

一 嫡子 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

〔朱書 寄合〕 山岡齋宮

〔朱書 谷崎〕

〔朱書 右同〕 島津主右衛門

〔朱書 右同〕 末川織衛

〔朱書 板鼻〕

〔朱書 右同〕 島津彦太夫

右四家 御直元服、進上物同断、

一 自分元服、御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

〔朱書 右同〕 川上頼母

〔朱書〕

〔御七男家 二男家 右同〕 川上弥五太夫

一 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

〔朱書 御三男家 大熊 二男家 右同〕 島津主鈴殿

〔朱書 御三男家格 掛橋 二男家 右同〕 島津登

右兩家 御直元服、進上物同様、

一 嫡子 御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬

代銀一枚進上、

一 御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

一年頭、於 御对面所持參太刀ニテ御礼、着座無之、

一 御盃頂戴

〔朱書 寄合〕 郷原金太夫

〔朱書 右同〕 川上勘解由

〔朱書 右同〕 新納次郎四郎

右兩家、都テ同断、

一 御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬代銀一

一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

〔朱書〕
御五男家ノ
二男家 右同 樺山権十郎

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷

〔朱書〕
御六男家ノ
二男家 右同 北郷七郎左衛門

一御前元服、御折三合・御樽^⑧三荷・御太刀・御馬代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、
〔朱書〕
右同 北郷権五郎

一元服ノ御礼、御折三合・御樽一荷・御太刀・御馬代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、
〔朱書〕
御四男家ノ
二男家 右同 桂左右衛門

一元服人麻上下、御内証元服、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、
〔朱書〕
御四男家ノ
三男家 同^⑨ 島津仲殿

一元服ノ御礼、御折三合・御樽一荷・御馬代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀一枚・一種一荷、

〔朱書〕
御七男家ノ
四男家 右同 伊集院十右衛門

一御直元服、御折六合・御樽三荷・御太刀・御馬代銀一枚進上、

一御太刀・御馬代銀・三種二荷、

〔朱書〕
右同 新納五郎右衛門

一御直元服略ス、二種一荷以下準之、

〔朱書〕
右同 町田源左衛門

一御直元服、二種一荷、

一年頭、於 御対面所持參太刀ニテ御礼、着座無之、御盃頂戴、

〔朱書〕
右同 伊集院十藏

一自分元服、御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

山田松之助

新納十左衛門

右兩家、進上同格、

一御直元服、二種一荷・六合三荷、

鎌田典膳

一御直元服、六合三荷・御太刀・御馬代銀、

小林中太兵衛

一御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

平田新左衛門

一元服ノ御礼、御折三合・御樽一荷・御太刀御馬代銀一枚、

一自分元服、御太刀・御馬代銀一枚・三種二荷、

高橋此面殿

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、
北条十左衛門

一御直元服、六合三荷・御太刀・馬代、

一御太刀・馬代銀一枚・二種一荷、

仁礼仲右衛門

一御前元服、御折三合・御樽二荷・御太刀・御馬代銀一枚進上、
一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、
本田新次郎

一御太刀・馬代銀一枚・二種一荷、

二階堂部

一元服人麻上下、御内証元服、

一御内証元服、

一二種一荷、

一御太刀・馬代銀一枚・二種一荷、

二階堂源太夫

一自分元服、御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷
相良新助

一御内証元服、

一御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷

名越左源太

一自分元服、御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、
堀四郎大夫

一自分元服、

一御太刀・御馬代銀一枚、

一元服人麻上下、御内証元服、
一御太刀・御馬代銀一枚、

小笠原郷左衛門

一 自分元服、御馬代銀一枚・二種一荷、

鎌田太郎右衛門

一 自分元服、御太刀・御馬代銀一枚、

鎌田一藤太

一 自分元服、御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

市来次郎左衛門

一 進上物相納 御目見、元服人麻上下、

一 御内証元服、

一 御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

河野外記

渋谷喜三左衛門

赤松造酒

宮之原甚五太夫

関山糺

山田伯耆

岩下佐次右衛門

一八三二(の1)

寄合並

一 御前元服、三合二荷、

一 御太刀・御馬代銀一枚・一種一荷、

(朱書)
〔御二男家ノ
三男家〕

一 御太刀・御馬代、

寄合並 村橋左膳

(朱書)
〔右同〕

北郷助太夫

一 御前元服、三合二荷・御太刀・御馬代銀一枚、

一 御太刀・御馬代銀一枚・二種一荷、

(朱書)
〔右同〕

伊勢新五郎

一 御太刀・御馬代銀、

(朱書)
〔右同〕

西平太

(朱書)
〔右同〕

谷川次郎左衛門

(朱書)
〔右同〕

三崎文太夫

(一八三二の2)

一 寄合並以上家筋連名、右ノ通被相定候付、大御目附以

上ノ御役被仰付候節ハ、家筋ヲ以テ右ノ通連名可被仰

付候、右連名ノ内、同格ノ家々ハ先役次第連名被仰付

筈ニ候、且又大御目附以上ノ御役被仰付候者ハ、寄合

並又ハ其外ノ家ニテモ寄合ニ可被仰付候、以上、

戊七月二日

一八三三

小番

一御太刀・三種二荷

⑦ナシ
1 | 比志島彦四郎^{⑧七}

一御太刀・二種一荷

1 | 新納喜右衛門

▽^⑧比志嶋仙太夫△

諏訪仲右衛門

土持新八

渋谷三四郎

以上五家、御直元服、

1 | 秩父十郎兵衛

肝付八郎左衛門

以上二家、御名代元服、

1 | 川上助太夫

本田孫右衛門

▽^⑧高崎惣右衛門△

以上三家、元服ノ御礼、

東郷源五

龜山長太夫

町田直右衛門

三原諸右衛門

種子嶋定治

野村太郎左衛門

新納平太夫

本郷藤兵衛

和田次右衛門

木脇八郎右衛門

相良主左衛門

喜入十郎右衛門

大嶋次郎太夫

種子島宇平次

川上枸杞右衛門

本田與兵衛

樺山助之進

中西文右衛門

岩切六右衛門

新納喜三左衛門

基太村助左衛門

相良傳八

大田五郎右衛門

大山權左衛門

毛利覺左衛門

志岐藤左衛門^{⑧右}

野村金左衛門

一御太刀

丹生助左衛門^{⑧右}

弟子丸與次右衛門

森川孫太夫

土持平右衛門

今井八右衛門

税所弥五右衛門

右松安右衛門

二階堂五郎太夫

佐久間九右衛門

野村權左衛門

迫水善左衛門

村田太右衛門	山口十左衛門	米良九郎右衛門	中村平太 ^⑨
伊勢傳右衛門	菱刈善兵衛	国分十右衛門	黒葛原源左衛門
大山後角右衛門	児玉四郎兵衛	大島武左衛門	猿渡嘉左衛門
渋谷諸右衛門	相良新五左衛門	是枝大膳坊	吉田休兵衛
曾木権之助	平山七郎右衛門	富山傳内左衛門	平山次郎右衛門
伊地知五兵衛	伊集院権右衛門	新納助右衛門 ^{⑦左}	相良與左衛門
伊集院半五右衛門	若松庄左衛門	芦谷喜左衛門	奈良原助八
山田九郎左衛門	伊地知奎右衛門	伊地知四郎兵衛	山本仙太夫
平田藤兵衛	東郷十左衛門	伊勢彌九郎	鮫島次左衛門
伊地知八右衛門	桂吉兵衛	伊地知新太夫	川上十郎左衛門
川上四郎兵衛	土持半右衛門	有馬新助	今井仁右衛門
米良藤右衛門	伊集院弥六 ^{⑦七}	平田五次右衛門	最上孫右衛門
北郷喜三次	東郷四郎左衛門	三原次郎左衛門	新納小右衛門
野村五郎左衛門	村田與三左衛門	調所八左衛門	山沢十太夫
平岡八郎太夫	鹿島牧太	木脇六郎左衛門	木脇助次郎
川上助左衛門	町田孫兵衛	福山平太夫	新納次郎五郎
海江田十郎右衛門	野村源左衛門	川上七郎左衛門	中神仲右衛門
蒲生十郎左衛門	肥後平右衛門	中野駒右衛門	薬丸長左衛門

野村勘兵衛	左近允嘉太夫	國分藤之丞	南郷仁左衛門
八木八郎兵衛	岩切彦兵衛	伊勢彌一左衛門	新納藤右衛門
尾上甚五左衛門	川上孫左衛門	阿多十兵衛	山崎藤八郎
木村四郎左衛門	平山八郎右衛門	新納彦之進	名越權之助
肥後藤之進 ^{①丞}	猿渡勘左衛門	西八太郎	相良市郎左衛門
谷山角太夫	中島七郎左衛門	伊集院源右衛門	高崎五右衛門
本田六右衛門	篠崎八左衛門	本田半兵衛	大田筑左衛門
後醍院喜兵衛	大野清太夫	伊勢六郎左衛門	村尾源左衛門
汾陽源右衛門	種子嶋十郎右衛門	和田乘助	八木源右衛門
種子島善左衛門	長束清右衛門	川上休次右衛門	関次郎兵衛
三原六兵衛	上井五郎左衛門	中原伊兵衛	相良四郎兵衛
長谷場伊角	種子島次郎右衛門	相良作平次	長谷場源助
財部傳右衛門	佐多平左衛門	土岐藤左衛門	柏原弥太右衛門
山田八郎兵衛	名越斧右衛門	福屋伊左衛門	上村茂兵衛
島山甚六	町田次郎太夫	川上瀨兵衛	相良源五左衛門
鎌田次郎左衛門	肥後與左衛門	藤野休左衛門	市来早左衛門
岩元清左衛門	阿多六郎右衛門	市来太郎右衛門	川上八郎次郎
市来軍八	新納九右衛門	二階堂與右衛門	本田助之丞

伊地知新五左衛門	川越三右衛門	伊集院六太夫	山口五郎兵衛
五代源次郎 ^{⑧孫}	伊勢八右衛門	折田與八左衛門	伊地知權左衛門
五代與右衛門	佐多平四郎	酒匂次郎左衛門	若松平八郎
汾陽茂右衛門	甲斐正右衛門	本城源七郎	伊集院安次郎
菱刈新五兵衛	喜入佐次右衛門	伊集院長右衛門	伊集院清右衛門
弟子丸喜兵衛	町田孫七	田尻八郎右衛門	市來勘左衛門
向井十郎太夫	黒葛原周右衛門	伊勢十兵衛	^{⑧伊} 佐佐岡寛右衛門
木脇嘉左衛門	戸田平次	三雲宗八	伊東九左衛門
阿蘇源右衛門	土持佐左衛門	三木原甚左衛門	村田安左衛門
仁礼半太夫 ^{⑧伴}	村田伊兵衛	赤塚新四郎	谷山孫右衛門
仁礼半太夫 ^{⑧正}	吉田次郎兵衛	村田平右衛門	諏訪市右衛門
仁礼左膳五	町田平寛	本田新助	山口左左衛門
中原茂右衛門	高橋次郎右衛門	有馬次右衛門	三原濱右衛門
中江九右衛門	川上納右衛門	川上甚太夫	小島甚兵衛
碓山八郎右衛門	諏訪八郎右衛門	寺尾庄兵衛	山本五郎兵衛
平野六郎右衛門	讚良善助	児玉仲左衛門	今村競
新納四郎兵衛	高城十左衛門	以上、代々小番、	
平田平六	山田四郎兵衛	野村兵部	伊勢平八左衛門

渋谷善之丞

阿多一宗

今井與平次

川上佐左衛門

渋谷甚八

中西長兵衛

龜山理兵衛

田代甚助

山田四郎右衛門

伊集院民左衛門^{⑧右}

三原武兵衛

伊東源右衛門

鎌田十郎

新納喜左衛門

渋谷三治

執印吉太

以上、一代新番並大番、

合、御太刀・三種二荷一人、

合、御太刀・二種一荷三十七人、

合、御太刀進上二百二十七人、

一御太刀・二種一荷、新規進上被仰付候人数

伊集院勘平

川上長太夫

川上孫平太

伊集院六郎

九良ヶ野平八

北郷長左衛門^{⑧比}

樺山九郎次郎

郷原金太夫

一御太刀・一種一荷、右同

村橋左膳^{享保廿年卯八月廿八日、太刀・一種一荷進上ニテ初テ御目見被仰付、從是此御格初ル}

伊集院藏人

細瀧金次郎

比志嶋彦七

穎娃左太夫

肝付八五郎

肝付郷右衛門

一御太刀、右同

大嶋八郎次郎

川上只右衛門

肝付半太夫

秩父十之進

種子島權四郎

諏訪甚之助

土岐太郎次郎

仁礼安左衛門

志岐次郎左衛門^{⑧平}

平岡彦之丞

原田長兵衛

渋谷次郎太

權田弁之助

三原弥七郎

伊地知彦左衛門

義岡八次郎

高橋權左衛門

大熊左源次

北郷七左衛門

伊集院五兵衛

北郷次太夫

柳權太夫

鎌田軍六

三木原寶壽院

新納佐左衛門

新納庄八

伊集院李兵衛	栗川三十郎	鎌田主左衛門	伊集院弥八郎
相良新平	黒岡與十郎	川上彦兵衛	三崎新八
川久保宗十郎	山田新兵衛	上村休右衛門	大河平休兵衛
山元仙太夫	▽ ^⑦ 高橋七郎兵衛△	名越 ^⑧ 祝右衛門	川村四郎左衛門
一弓進上、人数	蒲生傳左衛門	名越郷平次	能勢彦右衛門
仁礼善左衛門	岸喜右衛門	河田仲右衛門	富山九右衛門
本田太兵衛	白尾四郎兵衛	面高真藏	土岐次右衛門
清水源右衛門	志和屋 ^(地方) 左太夫	蒲生郷太郎	肥後平六
比志島小市	渋谷半左衛門	岩山金左衛門	種子嶋左平次
南郷休右衛門	伊地知伊右衛門	諏訪鉄之丞	吉田納右衛門
平山源左衛門	新納仁右衛門	川上喜藤太	梅田李兵衛
福崎清左衛門	家村平八	桂八左衛門	比志島彦八
伊集院三助	肥後太郎右衛門	谷崎徳十太	平田三五郎
川上八郎	伊集院平六	伊東相左衛門	肝付郷七
諏訪権八	郷田源助	伊集院左平太	有馬源五右衛門
三原佐々右衛門	田中藤次兵衛	山田助太郎	海江田半藏
四元次郎左衛門	吉田六郎左衛門		
二階堂十郎兵衛			

御姓名^⑧_氏

一八二四(の1)

一 御家ノ儀ハ元源姓ニテ候処、中頃 近衛様御契子ノ訳ニ付、藤原姓ニテ被成御座候、然処故有之、從 光久公如本源姓御改候、右ノ訳ニ候ヘハ、御庶流ノ儀モ光久公以前ノ御庶流ハ藤原ノ管ニテ可有之処ニ、取違ノ者有之由相聞ヘ候間、此趣御家老ヘ申聞、御庶流嫡家ニハ此段可申渡候、且又他国人ヨリ、御家ニハ源姓ニテ被遊御座候処、御庶流ノ内藤原姓モ有之候段ハ何様成訳ニテ可有之哉ノ旨御尋候ハ、藤原姓之儀ハ御元祖 忠久公 近衛様御家ニ訳有之、藤原姓被遣候故、家久公迄ハ藤原姓ニテ有之候ヘトモ、御家ハ元源姓ニテ被遊御座候^⑨付、光久公ヨリ源姓ニ御改候、依之、光久公已前ノ庶流ハ藤原姓ニテ有之候段、返答可申旨可申聞置候、正徳四年正月 仰出、

藤原姓ノ御支族

島津兵庫殿 島津小源太殿 島津左衛門

島津筑後

島津備前殿

島津内記

島津将監殿

島津図書殿

島津内膳

伊集院藏人

川上久馬

島津助之丞

新納四郎左衛門

樺山権左衛門

桂太七郎

喜入右衛門

町田郷九郎

義岡右京

島津伊織

大野七郎大夫

吉利左右衛門

源姓ノ御支族

但、光久公御已来御取建

島津若狭殿

島津因幡殿

島津典膳

島津頼母

島津求馬

島津美濃

(一八二四の2)

一 島津ノ御称号ノ儀、忠久公薩隅日ノ三州御拝領ヨリノ儀ト相見ヘ候、元来三ヶ国ノ惣名ヲ島津ト為申筋ト相見得候、往古ハ諸島々琉球ヲ初、惣テ御当国ヘ致来津候故ノ名ニテモ可有之哉、御史ニ島津御荘ト有之、文治元年八月十七日 忠久公為島津御荘下司職、同二年四月被補島津御荘惣地頭職、同三年九月九日薩隅日全拝領之、建久七年八月朔日御入国有之候ニ付、自然ト御称号相成候哉、領分ノ地名ヲ以称号ト相成候儀、

多々有之事候、肝付・柵寝・岸良・田代・谷山・加世

田・穎娃・別府・牛屎・川田・吉田・鹿児島・東郷・

高城・霧田・白濱・鳥丸・入来院等皆此類ニテ候、

一元和三年九月朔日賜松平称号、乃 秀忠公口自命曰、

自今世々可称薩摩守先く号陸奥守、

一又三郎様(忠顯、後宗信)、元文四年未八月四日松平ノ御称号御拝領、

御代々御嫡子様松平御名乗被成候様、被 仰出候段被

仰渡、

一三男左膳事、村橋ノ家号被仰付、実名嫡子迄ハ久ノ字

御免被成、二男ヨリハ朗ノ字用候様被仰付候、

一右外ノ庶流ハ勿論、嫡子ニテモ今度被下候朗ノ字ヲ用

候様被仰付候、

右之通被仰渡、

(享保十九年カ) 寅六月廿五日

(島津久貴) 中務

一八二六

一 貴

右 (吉良) 総州様御諱ノ字、於 御前島津(貴總)玄蕃殿へ拝領被仰

付、

元文二年巳七月十八日

一八二五

島津(久年)兵庫殿

右二男島津助左衛門・三男島津左膳、別立被仰付候付

テハ、島津ノ御名字名乗来候へトモ、御名字ノ儀ニ付

テハ段々為被仰渡趣モ有之段被致承知候付、右兩人名

字ノ儀、御見合ヲ以何分ニモ被仰付被下度旨被願出候、

依之、助左衛門嫡子迄ハ往々島津ノ御名字・実名久ノ

字御免被仰付、助左衛門二男家ヨリハ差渡(谷崎カ)ノ家号被仰

付、実名朗ノ字用候様被仰付候、

一八二七

一今月四日、芝御屋敷へ水野(忠定)屯岐守様御出、 又三郎様(宗信)

へ松平ノ御称号御拝領ノ段 上意ノ旨、御承知被遊候

由御到来、御祝儀被 仰渡、

元文四年未八月十九日

一八二八

一又三郎様御儀、旧臘三日 御城⑦被為召、於 御前

御元服、御一字御拝領、從四位下被 仰出、御盃御

看御頂戴、御道具御拝領、御名 薩摩守様、御実

名宗信公ト御改被成候旨御到来、

元文五年申正月四日

(一八三〇の2)

御支族二男家号

一勝山 島津山城殿

一村橋 島津兵庫殿

一末川 島津玄蕃殿

一和泉 島津因幡殿

一赤山 島津左衛門

一村森 島津美濃

一三崎 島津大藏

一山林 島津図書

一倉山平山 島津内膳

一九良ヶ野 島津主殿

一佐多達山 島津本

一谷川 島津將監殿

一三木原 島津助之丞

一邦永 新納四郎

一音堅 樺山権左衛門

一北郷龍崎 島津筑後

一八二九

落穂集

一北郷筑後殿・佐多豊前殿兩人、島津名字御免被成候者、

(吉兼) 淨国院様御代ニテ候、以上、

一八三〇(の1)

御譜

一建久七年八月朔日 忠久年十八下向薩州、過京都謁近

衛殿於茲賜藤原氏云爾、一説承久三年六月、忠久改

惟宗氏為藤原氏云々、

一 権田平屋 島津頼母

一 柳 島津求馬

一 梅本 町田監物

一 黒岡 島津内匠

一 基村(基太村) 島津内記

一 細瀧 島津市太夫

一 岩越 島津矢柄

一 川久保 島津十太右衛門

一 土岐 島津仁十郎

(一八三〇の3)

(朱書) 一 正徳二年六月、久・忠ノ字、実名遠慮ノ事被 仰出、

(一八三〇の4)

御支族二男以下諱之字(朱書)「久ノ字遠慮」

一 親 川上 一時 新納

一 資 樺山 一勝 桂

一 譽ヲ 喜入 一實 町田

一 用 大野吉利 一實 義岡

一 英 山岡 一雄 郷原

一 良 龜山 一真 山田

一 安 碓山 一有 大島

一 経 迫水

右ノ人数、嫡子迄ハ代々久ノ字御免、二男ヨリハ此節

被下置候字ヲ用可申旨、被仰渡置候、

一 長 嫡流 若松正左衛門

一 用 嫡流 大田五郎右衛門

一 用 嫡流 寺山源右衛門

一 行 越前家庶流 所 出生不知 宇宿寛兵衛

右四人、名乗ノ字拝領被仰付候、

一 長 加世田衆中 西善四郎

一 用 轟田衆中 西川六太夫

右二人、同断、

一時 羽月衆中 阿蘇谷彦左衛門

一 長 石見與吉郎

右石見、伊作名字名乗来候ヘトモ、石見ト名字拝領被

仰付候、名乗ノ字用可申旨被仰置候、

一氏 垂水 和泉吉兵衛

一長 加治木 恒吉金左衛門

一行 都之城 知覽兵太

一氏 都之城 相馬弥一右衛門

一氏 都之城 石坂與太左衛門

右之者共、名乗ノ字拜領被仰付候、

一八三三

一島津五郎右衛門殿、宝永二年十月廿八日於 御前家号

平岡卜拜領被仰付候、五郎右衛門後改内匠、(之區)

姓氏

一八三一

元文四年未八月

一今月四日、芝御屋敷へ水野^(忠定)宍岐守様御出、又三郎様

へ 松平ノ御称号被成御名乗、御代々 御嫡子様ハ

松平被成御名乗候様ト 上意ノ旨、松平左近将監様ヨ(乗色)

リ宍岐守様へ被 仰達候段、被成御承知候、

右之段奉承知、与中・諸外城・支配中不洩様可被申渡

者也、

未八月廿日

御家老座印(カ)

一八三三

一百姓トハ、公家二十氏、武家八十氏也、庭訓抄、(朱書)

一八三四

一種子島織部事 北条織部(時守)

右之通、名子替被仰付候、(字)

右之通今日被仰付候条、可承座々へ申渡、其外不洩様

致通達、御側方・御勝手方へハ写ヲ以可相達候、

延享元年子五月廿二日

(島津久純)
大藏

一八三五

一 同心・^{⑦御}小者其外諸座付一身者ノ儀、是迄片書名字相

用來、且又家来ノ内主人依格式片書名字相用、町役人

ノ内片書名字用來候モ有之候ヘトモ、公辺向又ハ外々

様ニテノ御振合不相並候付、以來書下名字被仰付候、

町役人ノ儀ハ乙名頭以上同断被仰付候、 末略、

天明二年寅二月

一八三六

一 祢寝式部殿事、嫡家代々小松名字相用、二男ヨリ祢寝

名字相用候様被仰付候、

宝曆十一年巳十二月

式部殿事、四年亥正月十三日帶刀ト改名、
(小松清香)

一八三七

一 上村名字ニ此上ノ字ヲ用來候、^{カミ}上村名字同前ニテ、他

所ニテハ不分明候条、向後此植ノ字ヲ用候様可仕候、

乍然由緒ノ訳モ有之、此上ノ字ヲ用來候ハ、其旨可

申出^{⑧候}、差テ由緒モ無之者ハ此植ノ字ヲ用可申候、

享保九辰正月

一八三八

一 長田名字ノ者、此長之字用來候者モ有之候付、向後此

永ノ字ヲ用可申候旨被仰渡、

享保九辰正月三十日

一八三九

一 敷根氏、島津ノ御称号被下候儀ハ、寛永二十年九月廿

七日 後光明院御即位ノ時、敷根筑前久頼京都へ御使

者被相勉候付、御免有之、御書付左之通、

一一書令申候、然ハ、貴所へ御名字敷根ニテハ成合申間

敷候間、今度ノ御使者可被成首尾中ハ島津ト可被為名

乗由 御意候条、其分申入候、猶期後音候、恐惶謹言、

寛永二十年未十月五日

山田民部少 有榮判

頭娃左馬頭 久政判

北郷佐渡守 久加判

敷根筑前守殿

川上因幡守 久国判

官名並名遠慮之事

一八四〇

〔(朱書)記檀弓下云、二名不偏諱、〕

一 国名付候テモ不苦面々

一 御兄弟衆

一 御城代

一 御家老

一 若年寄

一 大目付

一 百官・関東百官ノ内ヲ付候テモ不苦面々

但、官名ノ外ニテモ不苦名ハ心次第願可申候、

一 番頭並番頭ノ嫡子

一 御兄弟衆・(光久)寛陽院様御子・御城代・御家老・若年寄・

大目付之同名ハ、官名迄付候格ノ面々モ致遠慮、付申間敷候、

一 与頭ノ儀、大勢ニ候間、仲間ニ同名有之候共、改ニ不及候、

一 江戸御老中様並御同格ノ御方・京都所司・(代脱之)大坂御城代・若御年寄之御名ハ、付申間敷候、

一 近国ノ御大名又ハ御身近キ御一門様方ノ御名ハ、付申間敷旨仰渡、(被脱之)

宝永四年亥七月

一八四一

〔(八四三号行間朱書)一家来下人共名、官名ニ似寄候名附申間敷旨、島津右平

太^⑨ヨリ寄々可申達旨、御家老衆ヨリ被仰候由致承知、右ニ付、支配有之座々ノ儀ハ支配下ノ者相改、名替可

申付候、以上、

朱書

本文、家来下人共ノ名向々何々助ト付居候者ノ儀ニテ、

別紙ノ通、右平太殿ヨリ名替可申付段、致承知候事、

享保廿年卯閏三月廿九日 御船奉行

一八四二

一大藏・右衛門・何三郎又ハ三郎何ト名付居候者、未々迄遠慮、

但、左兵衛・左左衛門・大藏兵衛ト申名ハ不苦段被仰渡、

享保二十年卯四月

一八四三

一 寄合以上官名付候内、名ノ唱別テ耳立候類ノ名、無用ニ可仕候、寄合以上ニテモ無役ノ人、必官名ニ無之候テモ、常式諸人付来候何左衛門・何右衛門・何某類ノ不耳立名ヲ付可然旨仰渡、
享保九年辰二月

一八四四

一名遠慮ノ儀申渡有之候節、諸座一旦ノ寄筆者名替願ノ

儀ハ与ヘ相付可申出候、勿論其座々ヘ付差支有之名替ノ願申出候節ハ、一旦ノ寄筆者進モ支配頭ヘ相付願可申出候条、向後其通相心得候様、与頭・諸座ヘ被仰渡、
明和九年辰六月

一八四五

一 諸御役人並筆者・小役人ノ儀、奉行頭人又ハ同役中同名有之候節、名替願間ニハ致延引候モ有之候間、以前申渡有之候通、無遅滞可願出旨仰渡、
安永四年未八月

一八四六

一 役替リ申付候節、同役ニ同名有之節ハ、新役ノ者ヨリ名替ノ願早々可申出候、此間延引ノ者モ有之候、此段頭々ヘ可申渡候、
正徳三巳五月六日

一八四七

(一八四六号行間兼書)

一同役ノ内同名有之候節ハ、新役ヨリ致名替事候ヘトモ、

新役拝領名ニテ候ハ、古役ヘ名替可申付候、新古役

共ニ拝領名ニテ候ハ、時々相伺可申旨被仰渡、

享保(十年カ)巳四月七日

一八四八

(朱書)

檀弓(下)、二名不偏諱、夫子之母名徵在、言在不称徵

言徵不称在、

一八四九

一頼ノ字・朝ノ字・忠ノ字ハ、向後於御家中名乗ノ字(ニ)

一切用申間敷候、

一当 公方様御名乗ノ字、於 御家中名乗ノ字ニ一切用

申間敷候、

一從 家久公至于 綱貴公御名乗ノ字、 御当代(ニ)

御家中名乗ノ字ニ一切用申間敷候、

一足輕並諸座付又ハ諸士ノ家来、又ハ寺門前・町・浦・

在郷者ノ内、 御家御支族ノ端ト申伝候由ニテ 御直

別等ノ家号又ハ 御家ノ字名乗来候者有之由候、向後

左ニ相記候家号又ハ 御家ノ字名乗申間敷候、

川上 佐多 新納 樺山 北郷 桂

喜入 町田 伊集院 龜山 山田 碓山

大嶋 義岡 迫水 阿蘇谷 相馬 石坂

一御直別又ハ伊集院・町田家ナトノ家中ニ髓同名筋ノ者

家来罷成、今迄致隨身来主人ノ名字名乗来候者ハ、其

家中ニテ其家筋ノ嫡家迄ハ主人ノ家号被遊御免候、勿

論其家ヲ罷出、他家ニ致奉公候節ハ、右ノ家号名字(名乗カ)申

間敷候、

一諸士家来ノ内、無紛其主人家ニ御附人筋ノ者、又ハ其

家ニ罷在、前々御奉公ノ筋ヲ以為抽働無紛者ハ、今迄

名乗来候御直別又ハ伊集院・町田等ノ家号ニテモ、其

者嫡流ノ嫡子迄ハ被遊御免候、勿論他家ニ致奉公候節

ハ是又右ノ家号名乗申間敷候、

右之通被 仰出候間、承知仕、堅固可相守候、此旨支

配中へ可被申渡者也、

正徳三巳七月廿五日

一八五〇

(一八五二号行間朱書)

一 大御目附已上ノ御役被仰付候節、鹿兒島ハ勿論、外城

迄モ同名ノ者致名替事候、然共以後大御目附御役ノ儀

ハ同名有之候トモ名替致ニ不及、支配下ノ者ハ可致替

旨被仰渡、

享保廿年卯七月

一八五一

一 若御年寄以上ノ名、致遠慮事候、是迄本何ト統候名付

居候者モ可致遠慮候、尤、以来共ニ若御年寄以上ノ内、

右通唱統候名ハ都テ致遠慮候様被仰付候、

天明四辰七月十日

一八五二

(一八五三号行間朱書)

一 重 家 治 竹 豊 繼 洪 忠

右文字実名致遠慮、同唱ノ字迄モ可致遠慮候、

但、竹ノ字ハ先年被仰渡置候通、名ニ付候儀モ可致遠慮候、

一 貴 吉 信 宗 年

右文字実名可致遠慮、名ノ同唱ノ文字ハ遠慮ニ不及候、

一 朝 頼 久

右文字先年ヨリ被仰渡置候通、可相心得候、

右ハ、実名ノ文字、已前ヨリ段々遠慮被仰渡置候ヘト

モ、右外ノ文字ハ不及遠慮候、此旨表方御役人限ニ致

通達、与中・支配中・諸外城・私領ヘ可被申渡旨、(以下欠)

宝曆五年亥十一月

鳥津久亮
圖書

一八五三

一 御両殿様 御名ノ文字並紛敷文字実名ニ用候儀、可致

遠慮候、

但、此介ノ字ハ不苦候、

一 寔 茂 幸

右文字実名ニ用候儀、可致遠慮候、

▽^① 一 明 時 為 △

▽^㉞ 右文字実名ニ用候儀、可致遠慮候、△

明和四亥九月十七日

同唱ノ文字ハ不及其儀候ヘトモ、心入ヲ以致遠慮候儀ハ可為其通候、

一八五五

(御触書天明集成 二九二六号)

一貴 吉 継 宗 信 年 竹

一諸職人、受領蒙 勅許候者共、継目ノ受領不相願、父

右文字実名ニ用候儀、遠慮被仰渡置候ヘトモ、最早不及其儀、心入ヲ以致遠慮候儀ハ可為其通候、

或祖父蒙 勅許候受領ヲ其子孫名乗候者共有之候ハ、向後国名並官名共自分ト相名乗候儀ハ可為無用候、尤、

一治 基▽^㉞ 洪△堯

継目ノ受領相願候儀ハ勝手次第タルヘク旨、御領者御代官、私領ハ領主・地頭ヨリ可相触旨、從 公義被仰

右文字、前条同断被仰渡候ヘトモ、最早不及遠慮ノ沙汰、右ノ外遠慮被仰渡置候文字ノ儀ハ、是迄ノ通可相心得旨被仰渡、

▽^㉞ 明和四亥正月廿一日△
渡候、

寛政三年亥十二月

一八五四

一八五六

一江戸御老中様並御同格ノ御方・京都御所司代・大坂御城代・若御年寄様ノ御名、近国ノ御大名又ハ御身近御

一水野^(忠定、若年寄)老岐守様御嫡子権兵衛様ト申候ニ付、御用人・御側廻・納殿廻並江戸へ差越候者、名替ノ願可申出旨被仰渡、

一門様方之御名ハ、遠慮可仕候、尤、依御向柄遠慮有

享保九辰七月

無ノ儀、吟味被仰付筈候間、同名ノ人ハ名替可申出旨被仰渡、

一八五七(の1)

一親 川上 一時 新納 一資 樺山

一勝 桂 一譽ヲ 喜入 一實 町田

一用 大野 吉利 一實 義岡 一英 山岡

一雄 郷原 一良 龜山 一真 山田

一安 碓山 一有 大島 一經 迫水

右ノ人数、嫡子迄ハ代々久ノ字御免、二男ヨリハ此節

被下置候字ヲ用可申旨、被仰渡候、

一長 嫡流 若松正左衛門

一用 嫡流 大田五郎右衛門

一用 右同 寺山源右衛門

一行 越前島津庶流
所出 出生不知 宇宿覺兵衛

右四人、名乗ノ字拝領被仰付候、

一長 加世田衆中 西彦四郎

一用 霧田衆中 西川六太夫

右二人同断、

一時 羽月衆中 阿蘇谷彦左衛門

一長

石見與吉郎

右石見、伊作名字名乗来候ヘトモ、石見ト名字拝領被仰

付候、名乗ノ字長ノ字用可申旨、被仰渡置候、

一氏 嫡流断絶、庶流支蕃殿家来 和泉吉兵衛

一長 嫡流兵庫殿家来 恒吉金左衛門

一行 筑後家来 知覽兵太

一氏 島津筑後家来 相馬弥一右衛門

一氏 右同断 石坂與太左衛門

右ノ者共、名乗(字脱カ)ノ字用可申旨、被仰渡置候、以上、

(一八五七の2)

一中將様御改名ニ付、人々心得ヲ以テ改名、又ハ此介ノ

字相用候向遠慮ノ儀申渡候ヘトモ、不及其儀候、此旨

可致通達候、

天明七未六月

一八五八

一久亮 (重兼男、後久肥)

右、時之丞様御実名ニ候間、亮ノ字実名ニ可致遠慮候、

同唱ノ文字ハ不苦候ヘトモ、人々心得ヲ以致遠慮候儀
ハ其通可有之候、此旨表方ヘ致通達、奥掛・御勝手方
ヘモ可達候、

享和二戌十二月

(赤松則決)
市正

一八五九

一若君様御名 家慶オシキト奉称候ニ付、慶ノ文字、名並名
乗ニ用候儀、尤、同唱ニテモ遠慮可仕候、

右之通、島々ヘモ可被申渡旨、琉球掛ヘ相達、諸郷ノ

儀ハ地頭・領主・大番頭ヨリ可申渡候、

寛政九巳正月

(川上久致)
久馬

一八六〇

一今度御誕生之 姫君様、御 格姫君様ト奉称、(家齊)御台
様御養被 仰出候旨、從 公義被仰渡候段申来候、依
之、(久松)左候被唱候名付居候者ハ可致遠慮候、

右之通、表方ヘ致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可相達候、

但、琉球・道之島ヘモ可被申渡旨琉球掛ヘ相達、諸

郷ノ儀ハ地頭・領主・大番頭ヨリ可申渡候、

寛政十年午九月
(伊勢貞矩)播磨

一八六一

一英 敬 恒 敦 乘 綾 綱 蓬 富 格 亭 幸
職 為 明 壽 雄 邦 五百

右ハ、公義並御子様方等ノ御名文字迄、(ニテ)実名ニ相用
候儀遠慮申渡置候ヘトモ、最早不及其儀候、此旨向々
ヘ可致通達候、

但、英ト唱候儀ハ是迄之通可致遠慮候、

享和三年亥三月二日

(額姓久備)
信濃

一八六二

一入道号ノ儀、高位ノ人外ニ不相用事候故、石塔類ニ相
記候モ、享保十七年以来ハ可消除旨被仰渡、

元文元年辰十二月

一八六三

一 今度御誕生ノ 御男子様(重家男寄宣) 虎壽丸様ト御名被進候間、

可奉承知候、尤、虎ノ字ヲ名並名乗ニ用候儀無用可仕候、何壽又ハ壽何ト相統ク名且名乗ニ用候儀ハ不苦候、

安永三年正月廿一日

一八六四

一同役・同名有之、名替願、寄筆者ニテ候ハ、御免不被

仰付旨被仰渡、

戊閏二月廿二日

一八六五

一 明姫様御事(重家養女) 雅姫様(從)

右之通(從) 中将様御名被進候旨申来候、依之、雅ノ字

実名ニ用候儀可致遠慮候、同唱文字ハ其儀ニ不及候ヘ

トモ、人々心入ヲ以致遠慮候儀ハ其通可有之候、此旨

表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

寛政四年子二月

(兼刈盛宣)
大炊

一八六六

一 今度(重家) 中将様御事 上総介様ト御改名被遊候ニ付テハ、

御遠慮別段申渡ハ無之候、乍然人々心得ヲ以ハ改名可致儀ニ候、尤、此介相用候向モ遠慮可仕候、 末略、

天明七未三月

(普入久徳)
安房

一八六七

一 島津玄蕃殿 島津善次郎殿 島津左衛門 島津周防

右ハ、又ノ字(御之儀)ハ 御家ニ為被用來事候間、御二男家

迄ハ惣領計ニ付可申儀ハ可為心次第旨、先年被仰渡置

候ヘトモ、御二男家迎モ又之字ニ由緒無之候ハ、可被

致遠慮候、又ノ字不被遊御用節、為差立由緒有之候ハ、

不及遠慮候、

右之通被 仰出候旨、本殿ヨリ被仰渡、

享保二十一年辰五月六日

一八六八

一家 頼朝 久忠 光綱 貴吉 繼宗 重竹 頭

右御諱ノ字、不用様被仰付置候、御役相勉候人数ノ事ハ仮名ニテモ不用様可仕候、由緒有之、付来候者ハ格別ニ候、表方外様ノ者、右文字ノ内、吉左衛門・吉右衛門ナト、仮名ニ用候テモ不苦候、若又遠慮ノ心入ヲ以相尋候ハ、致無用候様可申聞候、此等ノ段ハ触流ニ被仰付儀ニテハ無之候、為心得申聞置候旨、御用人中へ織部殿ヨリ被仰渡、

元文三年午十二月

一八六九

寛政三年亥△

一家 齊重 豪茂 敬恒 忠久 明宣 敬敦 乘操

右文字実名ニ相用候儀、同字ハ勿論同唱迄モ遠慮、

一頼朝 竹豊 繼貴 吉信 宗年 洪堯

右文字同断ニ付、同字計遠慮、

一御両殿様御名ノ文字並唱、紛敷文字実名ニ用候儀ハ可致遠慮候、

但、此介ノ字ハ不苦候、

一寔茂 幸竹 千代 淑

右文字、名・実名ニ相用候儀、可致遠慮候、

一明雄 邦時 為

右文字実名ニ用候儀、可致遠慮候、同唱ノ儀ハ其儀ニ不及候ヘトモ、人々心入ヲ以致遠慮候儀ハ可為其通候、

一貴吉 繼信 宗年 竹

右文字実名ニ用候儀、遠慮被仰渡置候ヘトモ、最早不及其沙汰候、人々心入ヲ以致遠慮候儀ハ可為其通候、

一治基 洪堯

右文字、前条同断被仰渡置候ヘトモ、最早遠慮ノ不及沙汰候、

右外遠慮被仰渡候文字ノ儀ハ、是迄ノ通可相心得候、右之通、不洩様向々へ可申渡候、

寛政三年亥十二月七日

(島津久延) 求馬

一八七〇(の1)

文化七年午△

一 公義並 上様御子様方等ノ御名字、実名ニ用候儀差障

候文字、浦役人誓詞ニ付御用見合相成候間、乍御面働

御取シラベ御知セ可給候、当分改誓詞取掛居、急成見

合候間、兩日中御返答可給、此旨御問合申達候、以上、

午十一月九日

御船奉行

御記録奉行衆

(一八七〇の2)

本文、御問合致承知候、別紙ノ通御座候間、為御見合

書付遣^{①中}候、此段御返答申達候、以上、

午十一月十日

御記録奉行

御船奉行衆

別紙^{①左}ノ通、

一 齊 慶 家 峯 菊 虎 岸 久 忠 宣 豪 重

栄 豊 興 亭 操 寛 隨 弥 富

右文字並同唱迄モ遠慮可仕旨、被仰渡置候、

一朝 頼

右文字、遠慮可仕旨、被仰渡置候、

一 淨岸 真含

右二文字モ相統候名並実名・同唱迄モ遠慮可仕旨、被

仰渡置候、

一 寔 茂 雅

右文字遠慮仕、同唱ハ人々心入ヲ以遠慮可仕旨、被仰

渡置候、

一 貴 吉 繼 信 宗 年 竹

右文字遠慮ノ沙汰ニ不及候ヘトモ、人々心入ヲ以致遠

慮候儀ハ可為其通候旨、被仰渡置候、

一 禮

右文字人々心得ヲ以可致遠慮旨、被仰渡置候、

一 舒△時 温 亮 記 諸 豹 銀 兵

右文字、公義並此御方御子様方等之御名・御実名ノ

文字ニテ、遠慮被仰渡置候処、当分ニテハ御改名又ハ

御天亡等有之候、然共其已後何分仰渡ハ無御座候、

一 浅 元 友 又 保

右文字、公方様御子孫方御名ノ文字ニテ、遠慮被仰

渡候儀ハ相見得不申候ヘトモ、文字ハ遠慮ノ文字柄ニ
テ候、

文化十一年戊二月廿六日

伊集院藏主

右之通御座候、此段申達候、以上、

午十一月十日

御記録奉行

一八七一

一 去年十一月二十一日、於高輪大奥御誕生ノ 御女子様、

御名壽姫様ト奉称、御順ノ儀ハ富姫様御次候条、此旨

奉承知、壽ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

右ノ通表方ヘ致通達、奥掛・御勝手方ヘモ可相達候、

文化七年午十一月廿七日

一八七二

一本之丞

右名、寄合以上ノ嫡子迄ハ不苦事候ヘトモ、間ニハ右

ノ外付居候人モ有之哉ニ相聞得候間、屹ト相改候様、

向々ヘ可致通達事、

別紙ノ通被仰渡候間、致通達候、以上、